

日本における Samuel Johnson 研究の流れ

—— 附:Mrs Piozzi (Thrale) の場合, Hawkins の場合,
Boswell の場合 ——

藤 井 哲

はじめに	pp. (1)-(2).
Johnson の場合：時代区分	pp. (2)-(8).
Johnson の場合：主題別展望 その 1	
【1/1】～【3/1】 【5/2】～【12/1】	pp. (8)-(37).
Johnson の場合：主題別展望 その 2 (【13/1】～【25/1】)	pp. (37)-(80).
Mrs Piozzi (Thrale) の場合 (【5/1】)	pp. (80)-(84).
Hawkins の場合 (【3/1】の一部)	pp. (85)-(87).
Boswell の場合 (【4/1】～【4/3】)	pp. (87)-(95).
参照資料目録 (抄)	p. (95).
『文献目録』正誤表	p. (96).

はじめに

2006年6月に筆者は『日本におけるサミュエル・ジョンソンおよびジェイムズ・ボズウェル文献目録(1871-2005)』をナダ出版センターから上梓できた(ISBN:4-931522-11-4, 以下『文献目録』と略記)。明治くらい135年間に我が国で発表されてきた Samuel Johnson (1709-1784) と James Boswell (1740-1795) 関連の文献約1,600件を1,200枚に記述した書誌である。『文献目録』では、最近盛んにインターネット上に公開されつつあるデータベースにも援けられて、学術論文や専門書のほとんどに加えて一般書のかなりの部分を捕捉し得たものと考えている。特に『文献目録』の出版の見込みが立ってからの3年間に集中的に作業してきた結果、この書誌に記述した文献のうち98%までを実見し、数千時間を掛けてそのほとんどに目を通し、コメントや付随情報を執筆することになった。

各文献がそれぞれに多様な主題を扱っているので、付随情報の執筆では内容の主題表示も併せて試みることにした。当然のことながら複数の分野に跨っている文献も多く、分類にもやや恣意的な判断を働かせることにはなったが、大筋においては有意義な主題表示をし得たものと考えている。それにより『文献目録』の利用者は、この表示を出発点にして関心を覚える主題についての過去1

世紀以上にわたる文献の書誌的情報を手にし得るであろう。換言するならば、100人の利用者がその興味に応じて100通りの自家製文献目録を準備するための素材や情報源を提供することを想定して、筆者はこの『文献目録』を纏めてきたつもりである。

そうした100通りの利用に応えるためには書誌自体が特定の色合いを帯びることは好ましくないはずである。喩えるならば、歪みのない像を反射させる鏡のような存在であることが望ましい。完成度の高い書誌であればそれだけ利用者の個性を歪みなく映し出せるべきであろう。そう考えた筆者は『文献目録』を纏めるに際して、文献に添えるコメントではその学術的価値の評価には努めて触れないようにした。筆者にはもともと評価をするだけの能力がないことも理由にはあるが、関連文献を集めてそれぞれに評価を下すことは各利用者の価値観と感性でなされるべき作業のはずと考えたからである。

よって筆者は『文献目録』の巻頭に「日本におけるジョンソンおよびボズウェルの受容」といった概論的序文を取って執筆しなかったのである。歴史的アウトラインを描くということは、資料の取捨選択に筆者個人の価値判断を働かせた結果を提示してしまうことになるし、筆者の歴史観を『文献目録』を手にするであろう様々な歴史観の持ち主に対して押し付けてしまうことにでもなれば、それは倣岸不遜の業であるばかりか、筆者が『文献目録』に託した本来の利用価値や存在意義とも矛盾・対立することになる。

以上の事情により『文献目録』の執筆では中立的なスタンスを保ってきた筆者も此の度は『文献目録』の一読者になって、筆者個人の価値観なり歴史観なりで1,600件の文献に整理をつけておくことにした。それで『文献目録』を脱稿してすぐに、まだ各文献に対する印象が新鮮なうちに、取り分け夏休み前後に時間を盗み取るようにして一気に書き上げたものであるから、時間を掛けてじっくり検討すれば改善すべき点もあろうが、先ずは形あるものに纏めてしまうことこそ大切と自分に言い聞かせ、本稿を勤務先の紀要に投稿した次第である。

この「日本における Samuel Johnson 研究の流れ」では、記述の繁雑さを避けるために、本文中で文献に言及する際には、それぞれの書誌情報については『文献目録』で参照して頂くことを前提に、敬称等を略させて頂いた執筆者名や、短縮表示したタイトルの他、『文献目録』での【文献番号】の表示でいたい済ませている。そして脚注では概ね【文献番号】だけで済ませている。本稿をきっかけに一読したいと思う文献に出会われたら、御面倒様ながら『文献目録』を開いて頂きたい。

『文献目録』が各地の図書館に架蔵されていることを願っているが、もしそうでなければ最寄りの図書館に購入を推薦・申請して頂くようお願いしたい。そうして頂ければ筆者としても、赤字覚悟で『文献目録』の出版に踏み切ってくれた版元に顔向けができようというものである。

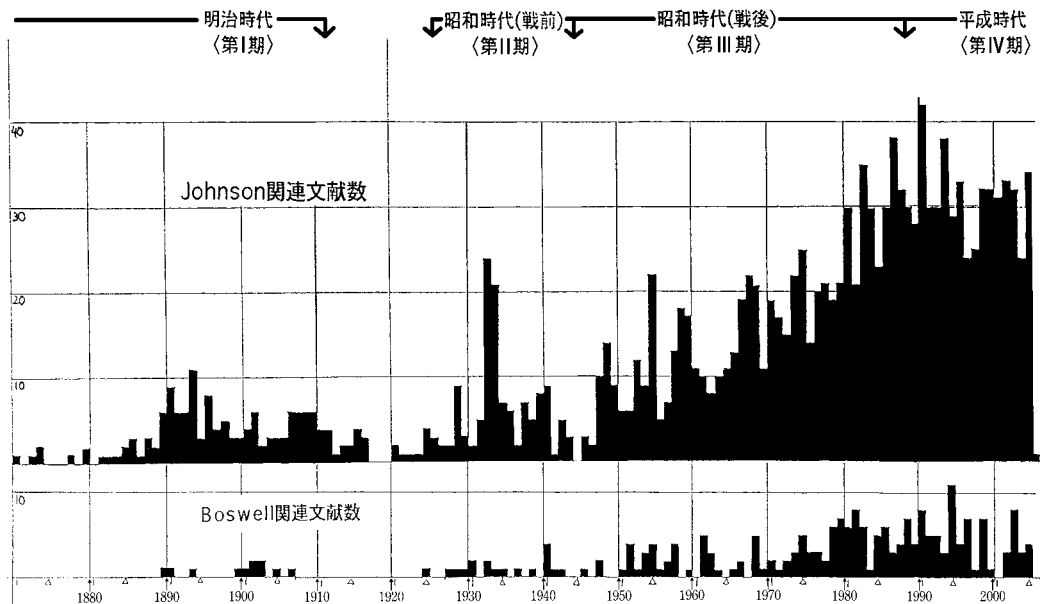
Johnson の場合：時代区分

『文献目録』は1,600件を超える文献を記述しており、当然のことながらそのほとんどが Johnson に関わっているため、これほどの数の論考についてそれぞれの主旨を分類し整然と配列し、それら

が織り成す全体像を描き上げることは、残念ながら筆者の能力を超える作業といわざるをえない。そもそもこの『文献目録』は、利用者がそれぞれの関心なり視点なりで文献を選び取り、選別した文献からそれぞれなりの Johnson 受容史を構築するためのツールたらしとして纏められたものであるから、記述された全文献を包括する全体像を取って求めようとすれば、筆者の包丁捌きならずとも繁雑と混乱の極みに陥ってしまうばかりか焦点もそれだけ分散してしまい、ますます全体像の把握を困難にするだけであろう。

いっぽう『文献目録』で文献を記述するに際しては、James L. Clifford と Donald J. Greene の両名が *Samuel Johnson: A Survey and Bibliography of Critical Studies* (1970) において提唱した【主題識別番号】を一部変更したうえで導入・表示しているの、次章以降ではそれぞれの主題に分類された文献を特徴的諸傾向も踏まえながら縦覧することで Johnson 研究の流れを主題別に展望することとし、本章ではこの表示を手掛かりにして文献数の歴史的分布状況を先ず見渡しておきたい。

ここに掲載するグラフは【主題識別番号】が振られた文献の数を年単位で数えて作成したものであるが、上段が Johnson 関連文献数、下段が Boswell 関連のそれを示している（横軸方向が10年刻み、縦軸が10件刻み）。しかし番号が振られていない文学辞典や文学史などでの記述はカウントされていない¹、複数の主題番号が振られた一部の文献については複数回カウントされている。しかも『文献目録』自体にしてからが135年間の関係文献を網羅しきれているわけでもないから、厳密な意味での実数を表示したグラフとはいえない。それでも時代々々におけるおおよその数値的



¹ こうした分類に馴染まない研究や、文学辞典、文学史などでの記述には、『文献目録』で【主題識別番号】を表示しなかったためである。

趨勢を読み取ることはできるであろう。

一步下がってグラフに件数の分布状況を眺めてみると、Johnson 関連の文献が活発に産み出された時期を、元号の境を目安にして4つの時期に区分してもさほど強引ではなさそうに思われる。すなわち明治時代後半、戦前の昭和時代、戦後の昭和時代、平成時代という区分である。そこでそれらを〈第Ⅰ期〉、〈第Ⅱ期〉、〈第Ⅲ期〉、〈第Ⅳ期〉としておこう。

先ず〈第Ⅰ期〉すなわち明治時代後半(1871~1912年頃)に Johnson 関連文献での特徴的傾向を見渡してみる。彼に対する断片的言及は明治初期から散見されるが、そうした言及の域を越えた規模の文献としては明治10年代以降に複製され始めた *Rasselas* の教科書版とその翻訳書や注釈の存在があり、それらを集めると明治27年までに少なくとも20点はあった。したがって Johnson の名は高等教育の場を介して知識人の間に着実に浸透していったことであろう。たまたま19世紀後半という時代には英国の諸大学で英文学科が設置され始めており、Macaulay の Johnson 論(1831 & 1856) や *Rasselas* が教室で読まれるようになっていたので、それに呼応した現象であったかもしれない。明治27年には、民友社のヒット・シリーズ「拾貳文豪」の號外として『ジョンソン』【89471】² が追加されたことも当時の Johnson 人気の高まりを窺わせている。この内田魯庵による我が国で最初の纏まった Johnson 論を中心にして、一部 Johnson を題材にした Hawthorne の *Biographical Stories* (1842) や Carlyle の *On Heroes and Hero-Worship* (1840年講演, 1841年出版) の流行とが相俟って、この〈第Ⅰ期〉に我が国での Johnson 研究に発端が与えられたはずである。

大正時代も初期のうちには明治時代の余波に多少洗われたものの、Johnson 研究は一旦終息したかに見える。大正時代の後半になってから Johnson の話題を雑誌記事などにポツポツ見掛けるようにはなるが、文献が質・量共に充実し始めるのは昭和時代に入ってからのものであった。20世紀になると、英米では系図学者 A. L. Reade が1740年代以前の Johnson を調査した *Johnsonian Gleanings* (1909-1952) や、人物としてではなく作家としての Johnson に注目した Walter Raleigh 著 *Six Essays on Johnson* (1910) が呼び水となって Johnson 研究への機運が高まり始めるが、日本がそれに反応するには〈第Ⅱ期〉を待たねばならなかった。すなわち我が国では終戦の1945年に至るまでの〈第Ⅱ期〉において漸く Johnson 研究が前進したように見えるのである。

〈第Ⅱ期〉の約20年間のなかで Johnson 研究での特筆すべきの収穫は、昭和8年に研究社から刊行された『ジョンソン博士とその群』【93311】³ であろう。普遍性や永遠性を強調し叡智と判断を重んずる文学を実現させた作家として石田憲次が見込んだ Johnson, Burke, Goldsmith および彼等の周辺を解説した600頁の大著で、その三分の一が Johnson の文学的業績を語るために費やさ

² 記述が繁雑になることを避けるために、文献に言及する際には【文献番号】を表示するに留めているので、書誌的詳細については『文献目録』を参照されたい。なお、【文献番号】の上3桁は西暦年の下3桁を、4桁目は発行月を表わしている。

³ 『文献目録』に記述された1933年の文献数は【主題識別番号】付きが14項目、無しが5項目である。上掲のグラフでこの年が突出しているのは、頁数の多い【93311】の各章に【主題識別番号】を付したためである。

れている。そしてすぐ翌年には当時の英文学界での必須アイテムのひとつ研究社英米文学評傳叢書の一冊として石田憲次と鈴木二郎による『ジョンソン』【93431】も登場しているので、その頃には Johnson 研究の領域が意識され形成され認知されていたのではなかろうか。そして、東京・京都の両帝国大学や東京文科大学などの学会誌を通して学術的な Johnson/Boswell 論がぼつぼつ発表されるようになった。〈第Ⅰ期〉を支えていた Hawthorne や Carlyle 人気に加えて、その頃には我が国でも Macaulay の *The Life of Samuel Johnson* (1856) 【929Y1】も出版されるようになっていたし、Boswell の *The Life of Samuel Johnson* が研究社英文学叢書版【93111】他で注釈あるいは翻訳され始めていた。そして昭和18年に同じ英文学叢書において福原麟太郎が注釈した *Lives of the English Poets* 三部作 (*Milton* 【94341】、*Dryden* 【94342】、*Pope* 【94343】) が一挙刊行されたことは、〈第Ⅱ期〉の最後を飾るに相応しい Johnson 研究領域における快挙となった。ちょうどその頃 Columbia大学の J. W. Krutch が、上述の Reade を取り入れて Boswell 以降はじめての書き下ろし Johnson 伝たる *Samuel Johnson* (1944) を出したところ、初版15,000部は数週間で完売、直ちに再版されるという好評 (*Johnsonian News Letter*, IV:4 & V:1) 振りで、Johnson への関心が米国の一般読書人にまで及んでいたことを如実にしている。

〈第Ⅲ期〉と〈第Ⅳ期〉との境界に必然的な理由があるわけではないが、終戦いらいの文献数の上昇傾向が鈍り始めるのが、たまたま元号が平成に改まる1989年前後であること、我が国の Johnson 研究家が情報交換をするための人脈組織として「日本ジョンソン・クラブ」(Samuel Johnson Club of Japan) が結成されたのが1988年であったことも考慮して、昭和時代の終わりまでを〈第Ⅲ期〉、平成時代を〈第Ⅳ期〉と分けてみた。

〈第Ⅲ期〉になると、その初期では毎年約10件であった文献数が終盤期には30件前後にまで上昇しているように Johnson 研究の勢いが盛んな時期であったが、その背景には社会的要因もあったと思われる。すなわち〈第Ⅲ期〉に入ると同時に高等教育の民主化が推進され、新制の大学が増え、戦勝国たる英米の文化に寄せる憧憬の念が英語英米文学科の新設・拡張を招き、第一次ベビー・ブーム世代を収容するために大学の学生定員が増やされ、そこに関わる教員が増え、彼等がプロモーションのために業績を上げるよう励み、そうしたメカニズムを支えてくれる意欲ある学生が存在したという恵まれた状況が、英米文学語学のあらゆる領域での研究業績の増産を促したはずである。故にグラフに見られる上昇傾向は、他の領域に比べて Johnson 研究の人气が格段に高まったことを示すのではなく、この頃の追い風に吹かれて Johnson/Boswell 研究も相応に充実してきたことを窺わせているに過ぎないのかも知れない。それでは具体的には〈第Ⅲ期〉にどのような収穫があったのであろうか。

1930年代から『英語青年』を中心に Johnson に触れた記事を執筆してきた福原麟太郎は、戦中に刊行された *Lives of the English Poets* 注釈に弾みを得て、〈第Ⅲ期〉ちゅうに約60件の Johnson 関連文献を発表している。そうした彼が〈第Ⅲ期〉早々に、名著としての誉れが高い『英文学の思想と技術』【94851】を出版した。これは外務官吏研修所での1946年の講義を速記したものであった

が、その第5回講義(pp. 139-170)でのJohnsonの略伝が、昭和41~43年に『學鐙』に24回にわたって連載されることになる福原による360枚の「ジョンソン大博士」【96692】を産み出すきっかけとなった。後者は門外漢にも読みやすいうえに知的好奇心を刺激する語り口の評伝であったが、丸善の宣伝誌に英文学界に対する影響力が当時どれほどあったかは判らない。しかしそれが『福原麟太郎著作集第2巻』【96981】に纏められ、また研究社新英米文学評伝叢書『ジョンソン』【97211】として再登場したとき、Johnsonの人間像は我が国の英文学研究者および戦後世代の研究者予備軍にとって親しみを感じながら向き合える研究対象に変貌することになったのではないか。という訳でJohnson研究の〈第Ⅲ期〉を形成した功労者として先ず福原麟太郎の名前を挙げておきたい。彼は1981年に他界したが、Johnson研究は彼の大勢のお弟子さん達にも受け継がれ、たとえば柴崎武夫の『ドクター・ジョンソン：その人間と文学』【98051】などに結実していった。

Johnsonの*A Dictionary of the English Language*刊行後200年にあたる1955年も〈第Ⅲ期〉の守備範囲にある。つまりこの年を期に、そして1967年になって大判大部の*Dictionary*が米独で復刻されたことも加速要因となって、Johnsonの言語学者としての側面も盛んに研究されるようになってきた。永嶋大典による『英米の辞書：歴史と現状』【974Z1】と『ジョンソンの『英語辞典』：その歴史的意義』【98371】は英語学を専門としない英語関係者や英文科生などにも*Dictionary*の諸相を知らしめることになった。そして同じ著者による*Johnson the Philologist*【98861】は我が国のJohnson研究に国際的レベルに達する領域が誕生したことを象徴する出版であった。

1981~1983年にBoswellの*The Life of Samuel Johnson*が全訳【98151, 98251, 983Z1】されたことで、Johnson研究における最重要基本文献のひとつに劣なくして近づける環境が整い、我が国はJohnson/Boswell研究での非英語圏ちゅうの先進国に踊り出たことになる。雄松堂によりなされた*Dictionary*(初版)の復刻版【98311】が英語圏に逆輸出されたのもこの頃であった。

〈第Ⅲ期〉における文献量の充実振りを可能にしたもうひとつの大きな要因として、底本として使用できるテキストの整備と普及が考えられよう。すなわち1952年には極めて学術的なR.W. Chapman編*The Letters of Samuel Johnson*が登場し、1958年以降*The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*が本文校訂を踏まえたテキストを供給し始めて1985年までに12巻を出して主要作品を手近な存在にしてくれており(2006年現在で15巻)、また*Yale Johnson*を補うものとして、G. Tillotson版*Rasselas*(1971)、OMBrack, Jr.とR.E. Kelleyが纏めた同時期の資料集*The Early Biographies of Samuel Johnson*(1974)、J.D. Fleemanの*Early Biographical Writings of Dr Johnson*(1974)や*A Journey to the Western Islands of Scotland*(1985)なども刊行されていた。G.B. Hill版*Lives of the English Poets*がL.F. Powellの匿名による修正で1967年にリプリントされ、同じく*Boswell's Life of Johnson*が1950~1971年に全6巻で出揃ったこと。そして1950年に刊行が始まった*The Yale Editions of The Private Papers of James Boswell*が1989年に完結したことなど、我が国の研究者を刺激してやまない目覚ましいほどの成果が積み上げられた。

〈第Ⅳ期〉に差し掛かったきっかけとしては、元号が平成に改まったことも然りながら、我が国

の大学入学年齢の人口が減少に転じ始めた影響で大学で英文学に関わる人数が頭打ちになり、少なくとも Johnson/Boswell 研究の領域においては生産される業績量のそれまでの右肩上がりにストップが掛かったかの観があることである。なにしろ我が国の大学はそれぞれの入学者定員の充足にその存続を賭けて形振り構わずに学生を集めているために、文学に親しむ能力や意欲とは無縁な学生がキャンパスを闊歩するようになり、大学教育での文学不要を唱える実用主義の声が年々かまびすしくなっていることもあり、英米文学研究の領域での業績数が減少に転じたとしてもやむを得ないというのが〈第Ⅳ期〉の置かれている状況なのである。そうしたなかで Johnson/Boswell 研究が業績数の横這いを何とか維持している健気さをグラフから読み取れるであろう。⁴

しかし執筆者の顔触れを見渡すと、そのために踏ん張っているのは若手よりも教授クラスの常連が目立つといった印象がある。将来において Johnson/Boswell 研究を盛り立てて行くべきはずの後進に恵まれているとは言い難いようで、それも時勢の然らしめるところなのであろうか。啓蒙的一般書で取り上げられた場合にはそれなりに紹介や言及はされているのであるが、学術的な研究では主題の選択やテキストの読みに先鋭の度を増していく傾向にもあり分門外漢・初心者には近寄り難く思われる緊張感もそこはかたなく漂ってくる。それはそれで研究水準の高度化を実現していることになるのであろうが、そのいっぽうで主要作品に正面から取り組んだ論考とか、若い感性を發揮させた大胆な解釈や、テキストと諸文献に向き合った基礎研究⁵などの影が薄くなってきているようにも感じられる。また〈第Ⅲ期〉における福原麟太郎のような役回りでは若い世代を Johnson/Boswell 研究に取り込んでくれる人材が現れていないのも寂しい。今のところ〈第Ⅳ期〉での頼みの綱は、Johnson/Boswell の様々な作品が翻訳されようとしている現象である。⁶ より興味深い作品がより親しみやすい日本語でより手近に得られるようになれば、若い世代の関心と呼び戻すチャンスも必ず出てくるであろう。

もちろん〈第Ⅳ期〉ならではの恵まれた面も忘れてはならない。インターネットを始めとする進んだ情報伝達手段の恩恵を受けて、我が国の研究者も英語圏に居住する者と大差ないタイム・ラグで多くの最新情報を得られるようになり、海外の研究が逸早く紹介され、文献の入手が迅速化されたことである。海外からの刺激が強まれば、逆に海外に向けて発信していこうとの意欲も高まるのが道理で、研究の国際化傾向が加速していることも〈第Ⅳ期〉に指摘できる大いなる特徴であろう。例えば『文献目録』に掲載されている邦人による英文で書かれた論考は、これは概数であるが、平成の17年間に83件あり、そのうち海外で発表されたものが18件に昇っている。比較のために〈第Ⅲ

⁴ 『英語年鑑』の1996年度版～2005年度版で「個人研究業績一覧」(ひとり毎年2点以内の申告)を集計した結果では、イギリス文学関係の論文の総数6,738点のうち Johnson 論は52点で第29位の多さであった由。『英語青年』第151巻10号 2006年1月 p.61 (641)。日外アソシエーツが5年ごとに発行している『英米文学研究文献要覧』1995～1999年度版(2001)および2000～2004年度版(2006)に Johnson/Boswell 関連文献を数えると合計106件あり、いっぽう『文献目録』はこの10年間に300件以上を記述している。

⁵ 永嶋大典の「評伝サミュエル・ジョンソン」【999Z4】はこれまでの Johnson 学の全体像を展望しようとの意欲的な試みであるが、1,800枚の大部であるために出版の機会がなくフロッピー・ディスクで配布された。但しその一部は『ジョンソンの死と信仰』【995X1】に活かされている。

⁶ 例えば、散文集【99151】、説教集【99731】、旅行記【00631】、「ボウブ伝」【992Z1】や「スウィフト伝」【005Y3】、ピオッツィによる伝記【99113】が〈第Ⅳ期〉に邦訳され出版されている。

期) 43年間に数えてみると、邦人による英文の論考は45件あったが、そのうち海外で発表されたものは3件でしかなかった。

こうした国際化傾向の一端を担っている組織として、1988年に発足した「日本ジョンソン・クラブ」を挙げておいてもよいであろう。15名前後の小集団ながら、主題を Johnson に特化して国内外との情報交換を心掛けてきた実績は、既にそれよりも20年以上前に設立されていた日本ジョンソン協会のそれとも相補関係を形成しつつある。London の Johnson 記念館用の解説書『ドクター・ジョンソンの家：ジョンソンおよび18世紀イギリス案内』【994&1】や Pat Rogers 編『サミュエル・ジョンソン百科事典』【99921】を共訳しており、毎年の会誌 *Newsletter* の記事は海外の Johnson 関連雑誌にも転載されている。そして何よりも会員間の切磋琢磨が〈第Ⅳ期〉における業績の相当部分を産み出させる原動力となったはずである。

Johnson の場合：主題別展望 その1

『文献目録』に記述された1,600件を超える文献を漠然と眺めているだけでは、明治いらいの Johnson 研究の流れを集約し展望するには物理的な無理がある。しかし『文献目録』では先述した様に【主題識別番号】を導入し(pp.viii-ix にリストを掲載)、ほとんどの項目に【主題識別番号】を一つまたは複数振っているの、この番号で分けられた文献を縦覧することでそれぞれの主題での Johnson 研究の流れを以下に展望することはできよう。先述の Clifford & Greene (1970) 所収の“A Survey of Johnsonian Studies”や Tomarken (1994) も緩やかな主題別枠組みに沿って文献を選択的に叙述しているので、それに倣ってみる次第である。併せて、非専門家も含めた読書界に対する Johnson の浸透状況を想像するための参考情報として、Johnson の主要作品の全訳や全訳に近い邦訳の実績も【文献番号】で示しておくことにする。

【1/1】：Johnson による作品の書誌

彼の作品の書誌に分類できそうな我が国での試みは、Johnson 関連書に添えられる簡単な作品年表を別にすれば、*Rasselas* の版本およびその邦訳の種類を報告した少数の文献が〈第Ⅳ期〉になって見られるのみ。すなわち泉谷寛が1995~1998年に『『ラセラス』受容史の研究(1), (2), (4)』【995Z1, 996Z1, 998Z2】として発表し、後に単行本化した『『ラセラス』受容史の研究』【00142】であり、従来の W.P. Courtney と D.N. Smith による書誌 *A Bibliography of Samuel Johnson* (1915; 1925; 1939; 1968; 1984) に取って代わった J.D. Fleeman 編 *A Bibliography of the Works of Samuel Johnson* 【000&2】が *Rasselas* 部門に挙げた邦訳書14点のリスト(pp.982-985) くらいであろう。この領域では洋の東西の違いが最も増幅されてしまうようだ。

【1/2】：Johnson 研究の書誌

〈第Ⅲ期〉になってから、朱牟田夏雄の「ジョンソン博士とボズウェル」【96661】が、彼の略伝、

評価上の問題点、有益な書誌を纏めており、後に泉谷寛の「稿本 日本 Samuel Johnson 書誌 (自明治元年・至昭和五十八年)」【984Z2】も明治期を中心に約130件の文献を紹介している。泉谷はさらに *Rasselas* の諸邦訳を集めてその受容を辿り訳文を比較吟味した「明治期「ラセラス」翻訳の片影」【98271】【98872】と「*Rasselas* 直訳附について」【985X1】をこの〈第Ⅲ期〉に発表している。他にも海外の Johnson 論を数篇ずつ紹介した【96042】【97332】【975X1】など書評的記事もここに含められよう。我が国での〈第Ⅲ～Ⅳ期〉にあたる時期に英語圏では、本稿末尾の「参照資料目録(抄)」に挙げたような Clifford (1951), Clifford & Greene (1962 & 1970), Greene & Vance (1987), Lynch (2000) 等が継続的に Johnson/Boswell 文献を収集・記述しており、累計で約7,000件に及んでいる事実に歴史の厚みを感じさせられる。

我が国でも〈第Ⅳ期〉になってから国産の成果を取り込んでの書誌的展望が試みられるようになった。先ず1994年に川戸道昭が「明治時代の英語副読本(I)」【994X2】で訳読用英語副読本としての我が国への *Rasselas* 受容に注目しているし、泉谷は上述の【98271】と【98872】を『健闘の文豪ジョンソン』【99291】として、また *Rasselas* 受容の経緯と Johnson 関連文献45種を記述した『『ラセラス』受容史の研究(3)』【997Z4】を同書名の【00142】として、それぞれ単行本化している。また坪内逍遙ら明治の先覚者たちが Johnson を理解し論じる際に典拠にしたであろう関連文献名の紹介【00232】【00392】や内田魯庵が【89471】を執筆するために参照した文献の同定【00334】にも泉谷の関心は向けられている。

関連文献1,300件弱を発表年月順にリスト化した藤井哲の「日本における Samuel Johnson 及び James Boswell 文献目録(1)～(3)」【99838, 00037, 0033a】は1998～2003年に紀要に発表され、2006年刊行の『文献目録』の母体となった。

〈第Ⅳ期〉では、とりわけ永嶋大典が「進歩的か保守的か：サミュエル・ジョンソン研究近況から」【99111】、「サミュエル・ジョンソン評伝：覚え書(7)」【99171】、「イギリスにおける Samuel Johnson 研究」【99832】、『サミュエル・ジョンソン百科事典』【99921】所収の「Johnson 研究小史(翻訳版付録)」(pp. xxix-xl)などで海外の文献を積極的に紹介している。また藤井哲の「*Encyclopaedia Britannica* 諸版に“Samuel Johnson”項を読む」【99436】は、*Britannica* 各版における“Johnson”項での参考書目の入れ代わりを200年にわたって俯瞰できるリストを併載している。

〈第Ⅳ期〉で注目しておきたいのは、本邦での Johnson 研究の歴史と現状を海外向けに報告した論考の登場である。すなわち永嶋大典は“Johnson in Japan”【993&1】において、明治期の英学熱、*Rasselas* の流行、内田の Johnson 論【89471】などに触れてから、日本における Johnson 関係書籍の存在をアピールしている。原田範行の“Johnson in Japanese Culture”【00433】も、英語教育界での *Rasselas* 熱とその種々の翻訳が及ぼした我が国の現代作家への文体的影響、日本の文化的土壌が可能にした *Rasselas* が内包させている旅行記・伝記的側面に対する理解や、西洋文化の旗頭の文人としての Johnson の受容、明治初期の中頃に始まった Johnson の内面世界に踏み込みながらの作品の読み方、そして20世紀前半以降の本格的 Johnson 研究への歩みなどに注目している。

【1/3】：Johnson の蔵書および彼の愛書家の側面

〈第Ⅱ期〉には、石田憲次と鈴木二郎による『ジョンソン』【93431】ちゅうに Johnson の書物に対する姿勢と彼の学生時の蔵書内容に触れた「ジョンソンと読書」(pp. 84-90)が見られるのみであった。〈第Ⅲ期〉になっても1979年の藤井哲による“Samuel Johnson on the Value of Books”【979Z3】が出版物に対する Johnson の意識を彼の作品や談話に探った1件のみではなかろうか。

しかし〈第Ⅳ期〉になると4件が見られる。すなわち塾上衛の「サミュエル・ジョンソンの読書論・図書館記述」【994Z7】は、Boswell の *Life* から Johnson が読書を論じ図書館に触れた言及を集めている。鹿島茂の「いやー、役に立つものです」【002Y1】は、Johnson の読書法を引き合いに出しながら気楽な読書日記の効用を説く。出口保夫著『物語大英博物館：二五〇年の軌跡』【00561】には、「ジョンソンは1761年に図書室への入館証を取得した記録は残されているが、かなり好悪の感情が激しかった彼にしてみれば、あのような輩がトップにおさまっている大英博物館へは、おのずと足が向かなかつたのかもしれない」(pp. 170-172)との一節が見られる。そして清水一嘉は「イギリス出版文化史覚書：十八世紀の本の流通(八)」【00572】で、Johnson が当時の書籍商業界の慣行に明るかったことを検証している。

我が国でのこの領域の収穫は以上くらいであろう。学問的風土の違いであろうか、あるいは Donald Greene の *Samuel Johnson's Library: An Annotated Guide* (1975) や J. D. Fleeman の *The Sales Catalogue of Samuel Johnson's Library* (1975) 辺りから Johnson の読書生活を推して知り得るとして間に合わせているのであろうか。Robert DeMaria, Jr. による *Samuel Johnson and the Life of Reading* (1997) のような研究が我が国で纏められる気配は今のところない。

【1/4】：Johnson 関連文献のコレクション、展示会目録

経済大国としての強みが功を奏してか数件のコレクションが舶載され目録も作られている。もちろん *The R.B. Adam Library* (1929) や *The Tinker Library* (1959) といった目録に及ぶ可くもないが、【1/3】には見られなかった格段の充実振りを示していると評せよう。そのためこの分野の文献6件のうち5件が〈第Ⅲ期〉と〈第Ⅳ期〉の端境期に集中している。

〈第Ⅲ期〉も末の1986年には研究社によって *Dictionary* の版本100種が購入されたが、2005年の研究社の回答ではコレクションは箱詰めして埼玉の倉庫にあるため閲覧不能の由。売り込んできた古書店が配布した G. J. Kolb 執筆のコレクション目録【986&2】は各版を簡単に解説し全点のタイトル・ページを複写掲載しているので、このコレクションについての資料として言及しておく。

〈第Ⅳ期〉に、永嶋大典が「Hyde Collection, The Johnsonians」【98921】で、R. B. Adam のコレクションを継承した米国の Hyde Collection とその当事者の近況を報告している。そして関西大学図書館が第17回展示会で配布した『サミュエル・ジョンソン：展覧目録』【98953】は、「1986年から翌年にかけて購入された、70点、総数209冊」のコレクションを解説している。坂本武による紹介記事「関西大学図書館蔵サミュエル・ジョンソン・コレクションについて」が『籍苑』（関西大学 第27号 pp. 6-7）に見られ、同趣旨の記事が『英語青年』（第134巻12号 pp. 50）にも掲載さ

れた。

更に永嶋は「京都外国語大学 S. Johnson Collection 目録」【990Y1】のなかで、Johnson 関係文献 237件、Boswell 関係37件、Mrs Thrale 関係 6 件、その他の当時の Johnson 伝 5 件、周辺人物たちによる著述類11件を目録化している。併せて英語版“A Catalogue of the Samuel Johnson Collection in the Library of Kyoto University of Foreign Studies”【990Y1】も発表しているが、彼はその前年に“Johnson in Japan”【98991】で上述の諸コレクションの舶載の状況を海外に向けてアピールもしていた。

そして最後に、2004年には菅原光穂が「Warren N. Cordell コレクション概観」【00413】において、*Dictionary* の諸版が Indiana 州立大学に175点収蔵されていることを教えている。

【2/】：Johnson による作品の刊本、選集、全集

注釈書や教科書類を含めると作品の本文を転載した例はかなりの件数に昇るが、リプリントするばかりで、校訂を施した学術版が我が国で出版された例を知らない。この点では日本の Johnson 研究は海外の恩恵に一方的に依存する後進国の状態を脱し得ていないことになる。それでは研究に供するための省略のないテキストが日本でどれほどプリントされたのかと捜せば、Johnson に関する限りでは『文献目録』は以下の 4 件を記述しているに過ぎない。揃って *Dictionary* 絡みの文献である。すなわち永嶋大典が編纂した *Philological Essays from Dryden to Johnson* 【967X1】 ちゅうの第XII章“Johnson” (pp. 201-255)、およびそこから“Short Scheme” (pp. 265-278)、*The Plan of a Dictionary* (pp. 279-302)、“Preface” to the *Dictionary* (pp. 303-335) を転載した『ジョンソンの『英語辞典』】【98371】があった。雄松堂が復刻した初版の *A Dictionary of the English Language* 【98311】は輸出もされた由である。そして寺澤芳雄所蔵本から『覆刻版ジョンソン簡約英語辞典』【985Y1】が製作されている。21世紀になって、「最初の本格的・正統的・大規模な改訂版」である1818年の H. J. Todd 編 *A Dictionary of the English Language* が永嶋大典の監修で復刻【001Z1】されている。しかしそれが活用された論考の例を未だ知らない。

【3/】：Johnson を取り上げた伝記、伝記的情報、心理学・病理学的考察

〈第 I 期〉の中期にあたる明治21年に、恐らく Macaulay に取材したと思われる 2 頁規模の「サムエル、ジョンソン氏^{りやく}畧傳」【888X1】が見られるが、明治27年になると内田魯庵が「ジョンソンの思想よりは寧ろ行實を明かにするにあれば主としてボスウエルの傳に依りて事實を採集しぬ」との方針で執筆した『ジョンソン』【89471】の主要部分 (pp. 36-217) が伝記になっている。しかし坪内雄蔵 [逍遙] は同年の『『十二文豪號外：ジョンソン』】【89481】 および【89691】で、「正當の史傳としてハ如何あらんとかたぶかる、所^{りやく}尠からず…カーライルの口吻をそのまゝに採用し若しくは…ボスウエルの感歎をそのまゝに受納し…」とするなどアカデミズム側からの評価は辛口であった。それでも同年の大和田建樹による『英米文人傳全』【89492】は「サミュエル・ジョンソン」(pp. 71-78) において、「肉瘦せ体疲れ、遂に精神狂亂の不幸に遇ふ。天何ぞ此一文人に酷なる」

との境遇から、年金を得て「唯人と語り人を恵むを以て無上の快樂と爲し」たるまでの Johnson の心境面での変化に注目している。

〈第Ⅱ期〉には10件足らずの文献が見られるが、Macaulay が *Encyclopaedia Britannica* 第8版に執筆した“Johnson”項(1856)の注釈【929Y1】、【933Z1】、【93611】が踵を接するように出版されていることから、Macaulay によって意図的に粗暴な風体として戯画化された Johnson 像がこの時期の日本に広く浸透したであろう。そして Macaulay は〈第Ⅲ期〉になって早々の注釈【94911】【94951】迄まで読まれ続けたが、その四半世紀後には Macaulay 人気も途絶えてしまう。⁷

石田憲次の『ジョンソン博士とその群』【93311】の第2章1節「小傳」(pp. 45-62)などは相変わらず Boswell の *Life* に拠りながら Johnson の生涯を略述している。Mrs Piozzi の *Anecdotes* (1786) が未だ舶載されていなかったからでもあった。翌年の石田・鈴木二郎共著『ジョンソン』【93431】所収の「彼の生涯及び功業」(pp. 1-34)は、彼の後半生については「順風に帆をあげたやうに…それだけ傳記的興味は減少する」として、前半生寄りに彼の「不羈獨立の熾んな氣象」を描き出し、同じく「文學者としてのジョンソン」(pp. 67-83)で彼の風格を偲ぶあまりに彼の主要作品の検討を怠ってはならないとの見識を示すなどは、「その主力をジョンソンの作品研究に向け、それを通してジョンソン本然の姿を觀察」(訳者はしがき)しようとした S. C. Roberts の *Samuel Johnson* (1954)【95691】の姿勢を先取りしているといえよう。

上述のように Boswell と Macaulay がこの〈第Ⅱ期〉での Johnson 像の形成に大きく与ってはいしたが、京都帝国大学の *Albion* が掲載した記事【93451】【93571】などは、H. Kingsmill による *Samuel Johnson* (1933) と *Johnson Without Boswell* (1940) に目配りをしており、同誌第7巻第4号【940Z1】も「一般には殆ど Boswell を通してのみ知られて居る Johnson の姿を、Boswell 以外の材料の集積の中から浮び上らさう」との姿勢を模索していたようである。同じ頃東京帝国大学出身の戸川秋骨も1938年の日本英文学会の講演「Johnson 傳を中心として」【93921】で、Boswell の「Johnson 傳が、必ずしも眞の Johnson を傳へてゐるか、どうか疑はしい」から「Boswell の Johnson 傳に出てゐないことを言つてみたい」と、やはり Kingsmill に言及していた。

〈第Ⅲ期〉に入ると、日本でのその後の Johnson 研究の原点とも目し得る伝記が登場することになる。すなわち福原麟太郎による一連の Johnson 論であり、特に福原が「ああいう人間知りが、どんな生活の中から生れて来たのかということを知りたかった」⁸ という意図のもとに1966~1968年に『學鏡』誌上に24回連載した、「ジョンソンに起こった出来事を叙述して、それをジョンソンの立場で、ジョンソンになり代って受け留め」⁹ ようとした評伝「ジョンソン大博士」【96692】は、【96981】や【97211】として単行本化され、その読み易さと普及度から我が国では Boswell 以上に読まれる Johnson 評伝の地位を獲得したのではなからうか。但し石田憲次が『「ジョンソン大博士」

⁷ 中原章雄は「内田魯庵のジョンソン博士伝」【97231】で、魯庵が Macaulay に影響されなかったことを Johnson 研究の将来の方向を先取りしたものと評価している。

⁸ 福原麟太郎の「サミュエル・ジョンソンのこと」【96881】より引用。福原は先述の Krutch (1944) を多く用いている。

⁹ 吉田健一の「文芸時評(上),(下)」【97223】より引用。

(福原麟太郎著作集 2)』【969Z1】で指摘したように、福原が Johnson の信仰問題には縁遠かったことを軽視すべきではなかろう。あるいは J. Wain の *Samuel Johnson* (1974) を書評して「いたましい話は略してもよかった」と述懐する福原の姿勢を捉えて、中原章雄が『ジョンソン伝の系譜』【99191】で示した、晩年の Johnson を慌ただしく記述する福原はアメリカでの1950年以降の Johnson 研究の成果とは距離を置きながら戦前に出版された「懐かしい書物群に囲まれ、それらへの謝辞をこめつつ」この評伝を執筆したのであらうとの評言 (pp. 217-227) は、〈第Ⅳ期〉に向けて新たな Johnson 伝誕生への期待を抱かせることになる。

新しき Johnson 伝の手本は1970年代後半に海外からもたらされた先鋭な諸 Johnson 伝、すなわち後述する Wain (1974) や、Bate (1975)、Kaminski (1987) などに求められるようになり、我が国の研究者も Johnson の心の内面や背景的事情にも目を向けるようになってきた。たとえば彼の想像力に占める性的な妄想や狂気観に注目した中原章雄の「ジョンソンとベドラムの影」【97662】、彼の持病の症状を *Life* に読み取ろうとした古川哲雄の「Dr. Samuel Johnson の病気」【98792】、彼の20歳年上の妻 Tetty の存在に興味を覚える秋山肇が1975年刊行の両書を取り上げた書評「John Wain: *Samuel Johnson*/Margaret Lane: *Samuel Johnson and his World*」【97661】などは、後の〈第Ⅳ期〉で顕在化することになる新 Johnson 伝への期待を先取りしたものであった。

ほぼ境目がない状態のまま〈第Ⅳ期〉に入っていくと、1988～1998年に16回にわたって書き継がれた永嶋大典の「サミュエル・ジョンソン評伝」【98891～】は、Johnson の生涯と作品を、それまでの英米の研究成果を絶えず視野に入れながら彼の生涯を概観した「覚え書き」であったが、同時に福原麟太郎による評伝の不備を補うことも意識されていた。この連載から材量を得て1995年に産み出された『ジョンソンの死と信仰』【995X1】は、1783年6月の卒中から臨終までの Johnson の生活と彼の信仰を一年半にわたって跡づけたという意味で、新たな Johnson 伝のひとつの姿を示すものであった。その後「覚え書き」は約1,800枚分に結実したが出版の目処が立たなかったためにフロッピー・ディスク【999Z4】で配布されたままである。

英米におけるこれまでの Johnson 伝に対して向けられた多様な関心を中原章雄著『ジョンソン伝の系譜』【99191】に見出すことができる。先ずその第1部「ボズウェル以前：ピオッチとホーキンス」(pp. 13-35) が、Johnson 伝の御三家と目されながら Boswell の陰に追いやられて我が国で注目されることの少なかった Piozzi (1786) と Hawkins (1787) とに光を当てようとした。既に篠田一士が「もうひとつのジョンソン伝」【96272】において、B. H. Davis が1961年に短縮した Hawkins 版 *Life of Johnson* を読んで古典主義的人間像を信じる Hawkins の冷静な執筆姿勢に注目をしていたが、なにしろ篠田の書評は3頁弱しかなく Hawkins 再評価の呼び水とはならなかった。〈第Ⅳ期〉は新しい先鋭な諸 Johnson 伝と並んで Johnson と同時代の周縁的資料が注目される時代でもあった。すなわち Mrs Piozzi の *Anecdotes* (1786) を横手長治が『ジョンソン博士逸話集』【99113】として全訳しているが、私家版であったためか、やはり我が国に *Anecdotes* 人気を掻き立てるまでには至っていない。同様に、Hawkins (1787) に対する基礎的研究が2001～2002年に藤井哲によって初めて試みられたが、Hawkins の邦訳は未だ登場しておらず前途遥かなりとの感を拭えない。

ここで英米の主要 Johnson 伝の流れを確認しておきたい。20世紀になると Johnson の人間的魅力を描いて読まれてきた Mrs Piozzi, Hawkins, Boswell たちによる Johnson 伝一辺倒の受け売りから脱するかのようになり、著述家としての Johnson の生涯に迫ろうとする伝記が現われ始めた。先ず Boswell が Johnson に会う1763年以前の20年間に強みを発揮していた Hawkins でさえもがカバーしきれなかった1740年までを徹底的に調査した A.L. Reade が資料集 *Johnsonian Gleanings* 全11巻 (1909-1952) を20世紀前半に出版した。その精華を取り入れ、また Boswell が弱みとしていた晩年の Johnson を良く知る Mrs Piozzi を利用して J.W. Krutch が書き下ろした *Samuel Johnson* (1944) が、Boswell に頼らずに Johnson の心の中に分け入って読者の心を掴んだ最初の伝記となった。逆に1940年代の Boswell に関する新知見を取り入れた James L. Clifford の *Young Samuel Johnson* (1955) が1749年までの Johnson の生活を復元したことに触発されて、1970年代になると同郷の先輩作家を前のめり気味に語った John Wain の *Samuel Johnson* (1974)、精神分析学に振り回された Walter J. Bate の *Samuel Johnson* (1975)、1763年までの Johnson を追った Clifford の *Dictionary Johnson* (1979) が揃い踏みをした。その後 Thomas Kaminski が *The Early Career of Samuel Johnson* (1987) で1737年の上京から *Dictionary* の仕事に有り付く1746年までの Johnson に焦点を絞ってくるといったように、Johnson 伝は時代々々の新知見を取り入れながら進化してきているようで、比較的最近も Robert DeMaria, Jr. が過去半世紀の研究成果を取り入れた *The Life of Samuel Johnson* (1993) を発表していた。

そうした成果を背景に、我が国では例えば中原【99191】の第3部「20世紀のジョンソン伝」(pp. 168-186) が、Krutch (1944)、Clifford (1955 & 1979)、Wain (1974)、Bate (1975)、Kaminski (1987) の面白さを簡潔に紹介してから、女流作家の登場に Johnson が果たした役割と彼にとっての Mrs Thrale の存在を正当に評価するような、そして Boswell の影響を振り払った新たな Johnson 伝の登場を期待しているが、それは〈第Ⅳ期〉における伝記的研究が目指そうとする方向を示唆していることにもなる。

〈第Ⅳ期〉での具体的な収穫を幾つか拾ってみると、文壇の労働者として上京してから10年間の Johnson の生活が考えられていたほど貧しいものではなかったとの解釈を T. Kaminski (1987) に読み出した中原章雄の書評【98812】がある。あるいは原田範行は“Johnson's Writing from *London to Life of Savage*”【98992】において、田園生活に引き籠ろうとしていた Johnson が1744年の *Savage* 出版を機に、London に踏み留って人間観察に基づく文学を生み出す決意をしたと見る。原田は更に進めて“Johnson's Duality and His Literary Topos”【00134】で、伝記的事実と作品を検証することが Johnson の文学の理解に役立つとの立場を確認し、彼が文筆生活での転機を迎えた1743年夏を境にそれ以来 London の人間をより広い視野で観察するようになったことを指摘している。

真野泰もまた「職業作家サミュエル・ジョンソンの不安」【99634】において、自信の無さを押し隠しながら文士業の社会的有用性を自他に納得させようと必死になっている Johnson の姿を追っている。そして Johnson の主要作や人物像に見られる二面性と「18世紀イギリスがもっていた二面性」とを重ね合わせながら、「一見矛盾に満ちた彼の活動の多様性が全体として他のどの文人よ

りも、18世紀という時代のダイナミックな展開を体現していた」と解説した齊藤延喜の「ジョンソン博士の時代：ロンドン」【99945】も当時の社会背景の中で彼を捉えようとしたものであった。

D. Greene が1993年の講演を活字化した“Samuel Johnson's ‘Body Language’”【99694】において、Macaulay 以来奇異と印象付けられてきた Johnson の振舞いや不随意痙攣などは18世紀には必ずしも無作法とは受け取られなかったこと、それが今日の医学では ‘Tourette's syndrome’ の症状と診断されることに言及しているが、医学上の知見を援用して文献資料から Johnson を診断しようとの我が国での試みも先の古川論文【98792】を嚆矢としてこの頃から散見されるようになる。更にその頃の John Wiltshire 著 *Samuel Johnson in the Medical World* (1991) が呼び水となって、例えば芝垣茂は“The Medical History of Dr. Samuel Johnson's Illnesses”【99332, 99435】で Johnson の持病の数々に関する最近の研究成果を紹介している。あるいは中村賢一の『『ラセラス』にみられるジョンソンの Melancholy について』【99657】も Johnson の心の不安の原因を「森田療法」で説明しようとしている。

これも〈第Ⅳ期〉における Johnson 伝への期待の多様さを示す例になろうが、資料が整備されてくれば Johnson の私生活もそれだけ掘り起こされてくるというものである。諸々の資料に彼の妻 Tetty への言及を拾い、彼女の半生を再現しようとした江藤秀一の「ドクター・ジョンソンと妻のエリザベス」【00251】も新たな Johnson 伝の到来を僅かながらも予感させていて興味深い。

【5/2】：Burney 家と Johnson との関わり合い¹⁰

Clifford & Greene の *Samuel Johnson* (C/G) では【5:】と分類している領域であるが、『文献目録』では特に Burney 家との接点に絞られた文献に【5/2】という識別番号を設定している。

ここでは、音楽学者の父親 Charles ではなく、Johnson が好意的に評価していたその娘のほうの Fanny [Frances] Burney (1752-1840) が主役となる。結婚後 Madame d'Arblay となったこの女流作家が我が国の文学界に初登場したのは明治19年らしい。つまり Macaulay の“Madame D'Arblay” (1843) を叢菊野史が「いさゝか實録小説風な筆」で訳した「春鶯女史之傳」【886&1】のこのようであるが手稿であったため実見できていない。しかしこれは明治23年に小金井きみ子(森鷗外の妹)との連名で『志がらみ草紙』に掲載された「マダム ダルプレーの傳」【89011】のもともとの原稿だったのであろう。そこでは Burney 父娘と Johnson との交友も触れられている。その後明治25年には澁江保の『泰西婦女龜鑑全』【892Z1】が「ダープレー夫人」(pp. 104-114)で Johnson 的作風が彼女の小説に映し出されていると指摘していたし、明治41年の片山寛による「Fanny Burney の話」【90822】も「Fanny の筆には Dr. Johnson の學者振つた文體が何處となく傳染して、本来の

¹⁰ 【4/1】: *The Life of Samuel Johnson* (1791) および Boswell と Johnson との交友 (← Clifford/Greene による主題番号では【C/G 4:】)

【4/2】: Life 以外の Boswell による作品 (←【C/G 4:】)

【4/3】: “Boswell Papers” 等 (←【C/G 4:】)

【5/1】: Thrale 家と Johnson との関わり合い (←【C/G 5:】), の各領域に分類される文献については、Johnson 関連文献についての展望を済ませた後に、新たな章(本稿冒頭頁参照)で取り上げられる。

淡泊、無邪気な趣を害ひ始めた」と評していた。Johnson との文体上の類似については半世紀後に石本キミも「エヴェリーナ雑観」【95411】で指摘している。

〈第Ⅱ期〉になると、石田憲次の『ジョンソン博士とその群』【93311】に「Frances Burney」の節 (pp. 543-588) が見られるが、恐らく彼女についての当時では最も詳しい紹介文であったろう。また彼女の人物が樋口一葉と似ていると述懐した戸川秋骨の「Fanny Burney と一葉さん」【936Z1】は我が国ならではの文章であった。彼女の日記 (1777年8月~1782年10月) を紹介した H.H. Asquith の文章「Dr. Johnson and Fanny Burney」【94011】が『英語青年』に掲載されたが、後者は大和資雄の『英文学の鑑賞』【949Y2】に再録されている (pp. 220-227)。

この分野での収穫が〈第Ⅲ期〉に多いのは、日記が Everyman's Library 版 (1940) で参照し易くなったからであろうか、例えば彼女と Johnson や Boswell との接点を探った佐野英一による【94981】や【94992】があった。その後 Johnson との絡みで Fanny を論じたものはほとんど見られないのであるが、〈第Ⅲ期〉も終わろうとする頃に江藤秀一が「ファニー・バニーの日記とジョンソン博士」【986Z8】で、Johnson が Thrale 家の別邸に滞在していた期間に記された彼女の日記の面白さに注目している。あるいは Virginia Woolf が Fanny の日記から彼女と Mrs Thrale が同席した場面を再現して1929年に発表した「バーニ博士の夜会」【954X1】は〈第Ⅳ期〉になってからも「バーニ博士の夜会」【99472】として再度翻訳されている。ちょっと古いが C.B. Tinker 編 *Dr. Johnson & Fanny Burney* (1911) は Fanny の著述から Johnson, Boswell, Reynolds に触れた部分を網羅的に集めているので、最近整備されてきた journals の学術版や Nigel Wood の *Johnson & Fanny Burney* (1989) を参照するなどして、Johnson 伝の御三家に次ぐ格式の伝記資料としてそろそろ邦訳されてもよいのではなかろうか。

ところが Fanny の小説作品に対する評価は、Johnson から受けた文体上の影響がかえって災いしてか、我が国では〈第Ⅰ期〉いらい低迷していた。戸川秋骨は上述の【936Z1】で *Evelina* (1778) に不満を洩らしていたが、田中睦夫なども「イギリス女流作家ものがたり(6)」【96991】で、Johnson が *Evelina* を「ほめちぎるのはちょっとおかしい」としている。今後同性としての感性を活かした女性の研究者たちから彼女が再評価されることはあるかも知れない。

【5/3】：その他の Johnson 周辺の人物たちと彼との関わり合い (C/G では【5】)

Johnson が直接に関りを持った人物のうち、Boswell, Mrs Piozzi, Hawkins を除いた誰に対して、日本の研究者が関心を示してきたかを『文献目録』に拾ってみると、〈第Ⅰ期〉で挙げるべきは彼の女性関係であって、翻訳物ながら明治31年の「博士ジョンソンとスレール夫人」【898X1】があり、そのなかで *Life* に拠りながら Johnson の女性への傾倒を、彼を取り巻く女性たちのはしゃぎ振りを通して髣髴させている。明治34年になると關露香は『詩人と戀』【90191】ちゅうの「文豪と婦人：サミエル、ジョンソン」(pp. 79-88) で Johnson と女性絡みの逸話を並べ、彼を「婦人の密を舐めて巧に其の毒刺を避けたる文士にてありき」と評している。この時代にしては意外と粹めいた紹介振りではある。

更に〈第Ⅱ期〉においても、「Dr. Johnson に対して軽蔑の色を隠し得なかつた爲遂には Boswell から敵意を蒙るに到つた」ところの Johnson と同郷の詩人 Anna Seward (1742-1809) を論じた Margaret Ashmun の *The Singing Swan* (1931) を取り上げた書評【93251】があったし、戸川秋骨の「The Bluestockings」【93982】が Elizabeth Montagu (1720-1800) など「青襪派」との接点で Johnson に言及している。

なお〈第Ⅱ期〉には、石田憲次の『ジョンソン博士とその群』【93311】および石田と鈴木二郎による『ジョンソン』【93431】が、Johnson 周辺の名士たちを積極的に紹介していたので、Burke, Fanny Burney, Garrick, Gibbon, Goldsmith, Reynolds, Chesterfield 伯爵といった人名は Johnson との関わりで当時の日本でも認知度を増していったであろう。Life から材料を得て Goldsmith と Johnson との親交に言及した岡本圭二郎の『ゴウルドスミス』【933Y3】もこの頃の出版であった。

そして〈第Ⅲ～Ⅳ期〉に入ると、新顔も加わりながら Johnson の周辺の間人関係が注目されるようになる。石本キミの「ミセス・ハナ・モーアとブルー・ストッキング・クラブ」【95831】は Johnson を崇敬した Hannah More (1745-1833) を取り上げ、岸英朗も「女性作家とモラリズム(2)」【97823】において Johnson が肩入れを惜しまなかった Charlotte Lennox (?1729-1804) に触れ、同じく「ドクター・ジョンソンと女性たち」【98231】でもやはり More に注目している。小林章夫の『チャップ・ブック』【98846】は Johnson が More を chapbook 作家として賛美したことを教えている (pp. 294-296)。そして柴崎武夫の「リッチフィールドの白鳥」【97131】は先にも登場した Seward による 1781～1800年の書簡に Johnson との関わり様を見ようとしたし、Johnson が「特別な親切と配慮をもって」接したとされる女性解放思想の祖 Mary Wollstonecraft (1759-1797) の伝記【970X1】も翻訳された。

男性の名士たちに目を向けると、先ず^{かじま}鍛島直道の「Oliver Goldsmith と Dr. Johnson」【969X2】が、1761年に始まった二人の交友の様子を Life に追いながら、彼が執筆した *The Traveller* (1764) と *The Deserted Village* (1770) への Johnson の加筆についても触れており、伊丹レイ子の「十八世紀ロンドンからの「中国人の手紙」」【99762】では両者の交友が語られている。そして江藤秀一の「ドクター・ジョンソンとオリヴァー・ゴールドスミス」【99923】は、Boswell による Goldsmith 酷評の裏には Johnson に気に入られていた Goldsmith に対する嫉妬があったとする。

Adam Smith への言及も散見される。『國富論の草稿その他』【94861】ちゅうの大道安次郎の「スミスのグラスゴー教授時代の一面」は逸話のなかに両者の接点を求めていたし、水田洋の『アダム・スミス研究』【968X2】は、*Dictionary* を介しての両者の接点 (p. 102)、両者間で交わされた 1761年の口論 (pp. 125-126)、The Club での両者の立場 (pp. 157-158)、週刊誌 *The Bee* に掲載された Smith の Johnson 評 (pp. 207-208) などを主に Life から読み出している。Smith 関連の翻訳物である【975Z3】と【00045】は二人の口論の原因に触れているし、山崎怜も『アダム・スミス』【00511】で、1773-1777年の London 滞在中の Smith の足跡を辿りながら、The Club の会員同士としての両者の感情的な纏れを要約している (pp. 200-205)。

そして The Club の会員たち絡みでは、『エドモンド・パーク著作集 2』【973Y6】ちゅうの中野好之による Burke に触れた「解説」(pp. 344-358), Johnson とは正反対の性格である Reynolds (1723-1792) と Johnson との交友にも触れた岡本謙次郎の「英國の繪畫: Reynolds (2)」【95171】や, 松原慶子の「ジョンソンとレノルズにおける伝記と肖像画の平行現象について II」【974Z2】も挙げておきたい。そして Johnson が Garrick にデリケートな感情を抱いたとする, 中原章雄の『「辞書のジョンソン」の成立: ボズウェル日記から伝記へ』【99922】所収の「名優ギャリックの楽屋裏」(pp. 163-173) も外せないであろう。

職業作家たる, そして本屋の息子たる Johnson は出版業界とは緊密な関係を保っていたので, その方面の論考が〈第三期〉を中心に見受けられるようになる。東京文科大学での1952年の福原麟太郎による講義録「十八世紀の書店」は『英文學の特質』【95441】に収録されているが, そこでは Robert Dodsley (pp. 240-244), Edward Cave (pp. 253-257), Thomas Davies (pp. 257-259), Andrew Millar (pp. 259-263) が Johnson と関わった出版者として紹介されている。以来福原お気に入り of Edward Marston 著 *Sketches of Booksellers of the Time of Dr. Johnson* (1902) や, 後年【99966】として訳出された A. S. Collins 著 *The Profession of Letters: A Study of the Relation of Author to Patron, Publisher, and Public, 1780-1832* (1928) が現在でもこの方面での必須文献とされている。出口保夫の「ジョンソン博士周辺の出版人」【98691】では Cave が, 中原章雄の「1740年前後のジョンソンと出版業者」【98934】では Cave や Thomas Osborne (-1767) が, 同じく「ジョンソンの『英語辞典』と「パトロン」たち」【98935】では Millar が, それぞれ Johnson との関わりにおいて描かれている。しかし J. D. Fleeman が“The Revenue of a Writer: Samuel Johnson's Literary Earnings” (1975) で示したような家計的視点から Johnson の作家生活を跡付けようとのアプローチは日本ではほとんど見られない。

Johnson との関係で興味深い人名に, 彼が引き取って30年間従僕として仕えさせた Jamaica 出身の解放奴隷 Francis (Frank) Barber (?1742-1801) の名もある。鈴木善三の「フランシス・バーバーのこと」【97612】によると, 「この黒人の召使とジョンソンとの関係からもこれまで見落とされてきたジョンソンの真の人道主義者としての一面が浮かび上がってくる」そうである。諏訪部仁も「ジョンソンの召使い: フランシス・バーバー」【99051】で彼の小伝を纏めている。

台湾人を騙って脚光を浴びた George Psalmanazar (1679?-1763) と Johnson との関わりも謎めいている。同じ東洋である日本での関心もまた英米に負けず高いのかも知れない。早くには市河三喜が「倫敦通信: George Psalmanaazaar」【914Y1】でちょっと触れていたが, 彼の告白の書 *Memoirs* (1765) を Johnson が代筆したと仄めかす陳舜臣の「神に許しを」【96933】は度々再刊され, 『定本庄司浅水著作集: 書誌篇第3巻』【98021】所収の「偽作者サルマナザール」(pp. 327-331) や諏訪部仁による「敬虔なペテン師たち」【99821】でも取り上げられたりした。

【5/3】方面での最近の収穫としては, 原田範行の「魔女の大釜, レヴェットの洞窟」【004Y1】が, Johnson の食客のひとりであったヤブ医者 Robert Levet (1705-1782) に対する彼の好意のうちに, 理性の時代におけるヤブ医者的存在としての Johnson の姿を読み出している。但しヤブ医

者といっても今日のそれではなく民間療法を施す治療士 (quack) のことであった。

【6/1】: Johnson 関連団体, 郷里や居住地, ゆかりの品々 (C/G 【6:】, 【7:】, 【8:】)

本邦の雑誌の表紙や特集記事などでも Johnson の肖像類や手稿類が断片的に複製されたりしてきたが, 他の作家に比べて Johnson の登場頻度が高かったとは思われない。〈第Ⅰ～Ⅱ期〉で注目すべき文献は明治44年の「Gough Square 十七番地にある Dr. Johnson の London House は…此の頃 Cecil Harmsworth 氏が此偉人の記念として國に寄附するの考へで買ひ求めた」との報道であろう。London に今日まで存続する Johnson 記念館の発端に『英語青年』が注目したからである。当時の英語関係者にはその場所こそが Johnson 研究のメッカとなりそうにも思えたのであろう。大正15年には金子健二【92691】による, 昭和4年には有田有【92931】による同地の見聞記が残されている。

〈第Ⅲ期〉になると我が国の研究者たちの視野が地理的にもやや広がって, 上述の Gough Square への関心【95081】【96752】と平行して, Bolt Court の居住跡地【96754】【96792】や彼が礼拝に通った Strand 街の St. Clement Danes 教会【95741】など London における Johnson 縁の各所が【98381】【984Z3】等で紹介され, 更に故郷の Lichfield【97271】【984Y1】も話題にされるようになってきた。

しかしこの領域で〈第Ⅲ～Ⅳ期〉を特徴付けているのは, Johnson 研究者や彼を顕彰する団体への関心が日本においても興ってきたことである。「クリフォード教授」【98513】によれば, 1963年に Lichfield を訪ねた内多毅は Johnson 研究の第一人者 J. L. Clifford との人脈を持っていた由である。また鈴木善三の「日本ジョンソン協会発足の頃」【98551】は, その Clifford の意を承けて「日本ジョンソン協会」が1967年に会員67名で発足したことを回顧している。その『日本ジョンソン協会会報』に中原章雄が「Lichfield の Johnson 協会「会報」(1974)」【975X1】を寄稿し, Johnson 200周年に彼の母校 Oxford 大学 Pembroke College で開催された国際会議に永嶋大典【984Y1】と中原【984Za】が出席したことを伝えている。そして永嶋の呼び掛けで「日本ジョンソン・クラブ」(SJCJ) が発足したことを『英語青年』【98881】は〈第Ⅲ期〉も最後の頃に伝えている。こうした団体の活動が〈第Ⅳ期〉になってからの Johnson/Boswell 研究のための大いなる牽引力の役割を果たしてきているといえよう。

海外旅行と情報交換が極めて容易になった〈第Ⅳ期〉なればこそ, この方面での収穫も豊富になってくる。Lichfield の The Johnson Society は *The Transactions for 1989 and 1990* 【990&1】で The Samuel Johnson Club of Japan の発足を伝え, 米国の *Johnsonian News Letter* (XLIX:3-4 & L:1-2) 【990&2】も SJCJ の第3回会合の様態を報告している。そしてその後も *Johnsonian News Letter* は SJCJ の動向を世界の研究者に向けて報じ続けている【00394】【00534】【00591】。

学術的交流の活発さは, 例えば英国を代表する Johnson 学者 J. D. Fleeman (1932-1994) の信奉者が我が国でも漸増していることにも窺えよう。そのひとり永嶋大典は彼の逝去の報に接したとき, *To the Memory of Dr John David Fleeman (1932-94)* 【994Z1】および『プール学院短期大学学長講

話集(1994-1995)』【99561】において Fleeman の人柄を偲んでいる。またつい最近にも『スコットランド西方諸島の旅』【00631】の訳者たちがこの書を Fleeman 夫妻に捧げている。

そして、自身がそこの理事でもあった Gough Square の記念館のことを「Dr Johnson's House のこと」【99342】で語っていた永嶋大典の音頭取りで、記念館用案内書が「日本ジョンソン・クラブ」により日本語化【994&1】されたことも、日英でのコラボレーションのささやかな産物であった。こうした情報ネットワークからの成果のひとつは、1996年に新たに発足した英国 Birmingham 大学の Johnson Centre の情報が藤井哲による記事【00093】【00135】で日本に伝えられたことであろう。

Johnson ^{ゆかり} 縁の地についても断片的ながら情報が集まってきている。小池滋が「引越しにもあきなかったジョンソン博士」【99265】で彼が London で住んだ17箇所を辿っているし、『イギリス文学地名事典』【99281】には Johnson/Boswell に関連する地名項目が意外な程に充実していた。石原孝哉は「ジョンソン博士の古本屋」【99434】で彼の生家地階(一階)にある古本屋を紹介しているし、Johnson の愛猫 Hodge の像が Gough Square で序幕された際にその式に出席して報告を送ってきた江藤秀一の「ホッジ像と新館長」【99811】があったり、あるいは St. Clement Dane's Church の現況を伝える渡辺孔二の「三人のサミュエル」【00161】なども〈第Ⅳ期〉ならではの興味深い記事である。そして Gough Square の Dr. Johnson's House での蔵書と Lichfield の The Samuel Johnson Birthplace Museum での蔵書に日本人が著わした書物の所蔵状況を調べた藤井哲の報告【00151】は、日本の Johnson 研究が輸出される時代の遠からぬ到来を期待させるかもしれない。

【9/】：Johnson をモデルにした虚構作品、パロディ、引用句集

我が国への移入の実績に照らすならば、Johnson をモデルにした虚構作品の筆頭は Nathaniel Hawthorne 著 *Biographical Stories* (1842) に止めを刺すことになる。体調を崩した父親の代わりに Uttoxeter で本の屋台に立つよう父親から頼まれたのにそれを拒んだという親不孝を、Johnson が50年後にその場に佇んで悔悛したという逸話を語って、速やかに謝罪することの要を読者に諭した“Samuel Johnson”の他5篇の伝記を収録した児童向け読み物であった。『文献目録』によると、邦訳や注釈も併せると過去135年間に約40件が出版されてきたことが判る。¹¹ その時代的分布を見てみると、大部分が明治28～大正6年、昭和4～7年、昭和22～42年の3期間に集中している反面、過去40年間には5件のみと激減しているのも特徴的である。抜粋版が多いにもかかわらず、実見した限りでは“Samuel Johnson”を外した抜粋版が皆無であったことから、石橋幸太郎が『傳記物語』【95342】で「最も深い感銘を受けたのはジョンソンの話」であったと述懐したように、とりわけメッセージ性の強いこの逸話を社会が求めていた時代が我が国にも40年前までは実在したことが読み取れるであろう。

¹¹ 【89551】【899Y1】【90711】【90821】【910Z2】【91221】*【91341】【91561】【91651】【917Y1】【92521】【925X1】【929X2】*【93051】【930X1】【93221】【94111】【947&1】【95031】【95043】*【95063】【952Z1】【95342】【95492】【954&1】*【95693】【95762】【95923】【95931】【96024】【96251】【965Z1】【966Z1】【96711】【98167】*【981Z7】*【98844】【99037】*【99427】但し、左肩に*印の文献は未見である。

直接 Johnson をモデルにしてはいないが、同じ Hawthorne の *The Scarlet Letter* (1850) において、晒し台に立たされる Hester Prynne に Uttoxeter に佇む Johnson の姿を重ねて見たり【987Z4】、Arthur Dimmesdale の道徳観念あるいは Hawthorne 自身の人生観に Johnson のそれとの類似性を認めた数篇の論考【99525】【00073】【00421】【005Z1】が発表されたり、憧れの Lichfield を訪ねた Hawthorne の旅行記 *Our Old Home* (1863) が全訳【99936】されたりしたのは、主に〈第Ⅳ期〉になってからの収穫であった。米文学研究者の側が抱く Johnson 観の一端を窺えるのではなからうか。

次に文献量が多かったのは、Johnson を Sherlock Holmes に Boswell を Watson に見立てた米国の女流推理小説作家 Lillian de la Torre による 'Dr. Sam: Johnson' シリーズの訳出であった。やはり Johnson/Boswell 周辺の知識があってこそ興味も湧こうといういわば通好みのシリーズであり、*Johnsonian News Letter* では随時紹介されていたが我が国では Johnson 研究者よりもミステリー・ファンのほうによく知られているかもしれない。これも集めてみると12作品13本の邦訳および注釈書1点といった収穫であるが1958~1992年に集中しているばかりで、その後には新訳を見ないし単行本が纏められたとの話も聞こえてこない。

以上の他にも Johnson に仮託することでメッセージ性を強めようと意図された文章や、何かと有名な彼の人物像を利用して効果を狙ったパロディ的作品も『文献目録』ちょうには散見されるので、そうした文献類を時系列で眺めておこう。まず〈第Ⅰ期〉に1件、大正4年の「歐洲戦争に對する Dr. Johnson の意見」【915Z1】は、米国の雑誌に載ったという「忌憚なく獨逸の横暴を責むる Imaginary conversation」という設定。〈第Ⅱ期〉には4件に増えるが、大正11年に米国雑誌から転載された近代小説を批評する空想座談「Dr. Johnson の近代文學批評」【92211】。Augustin Birrell が自らを Johnson に擬して垂訓した「The Gospel According to Dr. Johnson」【92871】。あるいは有名な *Lyrical Ballads* 第3版(1802)のための Wordsworth による序文【92932】にも、實際生活や自然の言葉を弄んだつまらぬ韻文の例として Johnson 作の戯詩が引用されている。P. Lindsay による「Dr. Johnson Awakes」【93331】は、忍び寄る死に怯える71歳の彼の起き抜けを実況放送したような文章を対訳にしている。

〈第Ⅲ期〉に入って20年、【92932】と同作品の前川俊一訳【965Y4】【96793】、岡地嶺訳【96951】【98061】、宮下忠二訳【98453】と持て余す程に訳出されたが、どれも Johnson には特段の関心を示していない。また Johnson を嗤った戯詩も紹介されるようになる。すなわち P. Milward の *English History in Clerihews*【985X2】と、『ブレイク全著作』【98974】のなかで梅津濟美によって訳出された Blake の手稿の一節である。また Johnson の愛猫 Hodge が主役を張った絵本【99292】もある。

やはりこの分野らしい収穫は〈第Ⅳ期〉の5件であろう。平松良康の「ジョンソン博士の判断」【99334】【994Z6】のうち、前者は警句を乱発させながら Johnson が登場する G. K. Chesterton の三幕喜劇 *The Judgement of Dr. Johnson* (1927) を論じたもので、後者はその第1幕を訳出したものである。Henry Fielding の兄であった盲目の判事 John を主人公にした B. Alexander による推理小説シリーズの第二作『クラブ街の殺人』【99981】では Johnson が事件解決に貢献している。上

司ボズウェルのもとに配置された女刑事の活躍を描いた J. Fforde による『文学刑事サーズデイ・ネクスト 1』【003X3】。そして中原章雄が「「ジョンソン博士とその群」ということ」【003Y1】において、Johnson 周辺にたむろした知的エリート集団とは対極にある彼の「もう一つの群」に注目した B. Bainbridge によるやはり通好みの小説 *According to Queeney* (2001) の紹介は興味深い。ちなみに、我が国でも愛読者の多いミステリー作家 John Buchan が1745年の反乱に参加する Johnson に取材して小説 *Midwinter* (1923) を書いていたが、Jacobite としての Johnson 像の是非が1990年頃から国内外で議論されているなかそれが邦訳されていないのが惜まれる。

Johnson の「引用句集」に分類されるかもしれない文献のうち、内容上後述の「談話家としての Johnson」【10/3】により馴染むと思われるものを除外してここに挙げてみると、市河三喜他編の『引用句辞典』【952X1】が彼の著述および *Life* から後世の作家たちに引用された事例を集めている (pp. 696-698)。また永嶋大典の『ドクター・ジョンソン名言集』【984Y1】も26の話題において「奇人ジョンソン」の面と「真面目人間ジョンソン」の面とを浮かび上がらせようとしている。一般読者を対象にした梶山健編著『世界名言大辞典』【997Y2】は、収録する約8,000件の引用のうち Johnson に帰される名言として、彼の著作から27件及び *Life* から9件を収めているが不正確なところもある。あるいは Johnson の著述に迷信に関する言及を集めた I. Opie の『英語 迷信・俗信事典』【99482】も面白い。他にも収録件数の少なさにこだわらなければ多数の引用句集に彼の名を見ることができるであろう。

【10/1】：批評家としての Johnson 等の一般的研究

〈第Ⅰ期〉ではまだ Johnson における批評論を論ずるというよりも、彼の翻訳論を *Idler* に読んだ「翻譯すべき外國文學」【891Y3】など断片的な段階にあった。〈第Ⅱ期〉になって、批評家としての彼の姿が意識され始めたようである。石田憲次は『ジョンソン博士とその群』【93311】で彼を擬古典主義の文学者と規定したし (pp. 220-234)，“Milton”や *Shakespeare* などの主要作品に Johnson の詩論を読み出そうとした佐藤清の【93981】や【94132】も Johnson を反 Romantic Movement の作家と見ていた。いっぽう『イギリス文藝批評史』【93491】において工藤好美は Johnson の「強味は彼が文學の背後に生活と個性を見、その見地から文學現象に一つの「説明」を興へた點にある」と指摘 (pp. 32-41)、福原麟太郎の「健康な批評家」【94131】は「もつと凡俗の世界に近くゐて、文學といふ美しい、意味の深いものを、凡俗の讀者の爲に評價し、凡俗の生活を一層良く楽しくしてくれる」という Johnson 像を提示していた。やはり本格的な考察は〈第Ⅲ～Ⅳ期〉になってから現れるが、論点の大部分は既に〈第Ⅱ期〉時点で意識されていたようである。すなわち，“Milton”を皮切りに Johnson の作品から抽出される彼の文学論、人間生活に密着させた彼の文学観と不可分な読者への考慮振り、古典主義とロマン主義に端境期に居合わせた彼のスタンスの取り方であった。

〈第Ⅲ～Ⅳ期〉になると文献量も増える代わりに、類似した主題の論考が両時期に跨る様に現れて傾向的差異の時期的境目が判然としなくなるので、〈第Ⅲ～Ⅳ期〉を通して、幾つかの主題に分けて文献を並べてみよう。まずは「文藝批評家としての Johnson」【95531】において酒井幸三は1952

年刊行の J. H. Hagstrum 著 *Samuel Johnson's Literary Criticism* を「Johnson の批評体系を根本的に解明しようとした先駆的努力」と書評して、批評家 Johnson の海外における研究が〈第Ⅲ期〉に入って間もない時期に幕開けを迎えたことを教える。批評家 Johnson の研究に臨む際の要件を示した T. S. Eliot の“Johnson as Critic and Poet”はもともと1944年に発表されていたが、邦訳されたのは「批評家並びに詩人としてのジョンソン」【96091】としてであった。もっともこの講演が Johnson との絡みで考察されるようになるのは我が国においては更に30年後の高柳俊一による「T. S. エリオットと新古典主義の時代」【99021】になってからで、そこでは Eliot が「歴史的感覚」を働かせて Johnson に対する「解釈学的仲立ち」を試みたとの指摘がなされることになる。

Johnson の批評態度の研究では Milton の詩に対する彼の反応をどう解釈するかが試金石となっていたようで、“Milton”を読んだ村上至孝は Johnson を「英国文学批評史上の第一級に列する人」と「十八世紀の詩論：その二」【95534】で評していたし、篠田一士も『世界批評大系1』【97462】で“Milton”が近代批評の出発点になったと解説 (pp. 465-484) している。伊澤東一は「ミルトンの作詩法に対する S. ジョンソンの批判」【99413】で、*Rambler* 第86, 88, 90号が Milton の作詩法を取り上げたことを踏まえて、1751年には Johnson が作詩法に対する批評尺度を確立させていたと推測する。さらに多くの作品から彼の詩論を拾った秋山肇の「Dr. Johnson と詩の問題」【965Y1】や、Johnson にとっての文学批評の‘basic principles’を追い求めた中川誠の「文学批評における Criticism of Life の役割」【96732】が上述の佐藤清の【94132】の延長線上に位置するであろう。

個別的な主題も多様にして散発的で、たとえば中川誠の「Dr. Johnson の翻訳論」【96761】、視聴覚器官の欠陥を克服しながらの彼の批評活動を考察した岸英朗の「詩と批評と偏見」【97831】、宗教詩への彼のストイックな姿勢を指摘した岡地嶺の「聖歌論争について」【98333】、Shakespeare や形而上詩に見られる「自己表出」(self-expression) 的表現ではなく「指示表出」(signifying-expression) 的英語を書いていた Johnson の感受性には限界があったとする桑子利男の“Samuel Johnson's Literary Criticism”【00034】などが目を惹く。

小説および小説家に対する Johnson の態度も〈第Ⅲ期〉の後半に散見される。彼の多くの発言から浮上してくる Fielding や Richardson に対する ambivalent な態度が様々な考察を産み出している。すなわち田中純蔵の「Johnson の Fielding 評について」【96441】、岸本利昭の「S. Johnson and H. Fielding」【965Y3】、鈴木善三の「Johnson の批評の一面」【966Y1】、鳥越輝昭の「ジョンソン博士のフィールドイング観(1)～(3)」【98022, 98132, 98215】、そして中原章雄は「ジョンソンの『辞書』と十八世紀中葉の小説」【98233】において、Richardson の *Clarissa* (1747-1748) への傾倒振りから Johnson が小説のジャンルに多大なる関心を寄せていたと推測する。

市民の日常生活を捉えた散文の物語に対する Johnson の志向の背景には、人間観察と人生経験から得た知恵をもって文学活動における指針とする彼の姿勢があったであろう。¹² そしてこうした

¹² W. J. Bate による1945年の講演の邦訳「ジョンソンとレノルズ：一般的性質の前提」【98641】および A. Banerjee の“Johnson as a Journalist-Critic”【98738】にも同様の指摘が見られる。こうした文学観は Johnson にとっ

文学観と伝記や旅行記への Johnson の嗜好を結び付けたのが島津文成の「ジョンソン批評の一面」【972Z4】であり、松原慶子の「サミュエル・ジョンソンの旅行記について」【98134】であった。

したがって Johnson が執筆し評価する文学作品の価値基準は、それが人間生活の現実の担い手たる一般読者に如何に受け入れられ如何に読者を益するか的一点に集約されていたことになる。やはり〈第Ⅲ期〉後半にそうした論考が多いようである。すなわち *Shakespeare* (1765) と *Lives* (1779-1781) のうちに「一般的鑑賞者」¹³ に与える感動の効果を重んじようとする彼の批評態度を読み出した秋山肇の「Dr. Johnson と文学批評」【959X2】と「Dr. Johnson の批評理念」【96043】、形而上派の詩や宗教詩に Johnson が背を向けたのは彼の読者本位の文学観の故であったと理由付けた平善介の「ジョンソン博士と形而上詩人たち」【96722】と「ジョンソン博士の「形而上詩」批評」【96731】、想像力には読者を喜ばせ得る魅力と倫理的危険性の両面があることを彼が認識していたとする秋山肇の「ジョンソンと想像力」【97341】、職業作家たる彼が頼みとした読者層が彼のなかで変貌していった過程とその時期を推定した藤井哲の「Samuel Johnson の文学に想定された読者について」【98136】等々である。

もうひとつの主題つまり英文学史的思潮区分における Johnson の位置付けについて、我が国の研究者たちはどう捉えてきたのであろうか。〈第Ⅱ期〉までは迷うことなく Johnson を古典主義の陣営に組み入れて見ていたようであるが、〈第Ⅲ期〉以降になると扱いに揺れが見られるようだ。仮に Johnson を古典主義に位置付ける解釈を「右」、ロマン主義的傾向を持つ批評家と見る立場を「左」として、1955～1987年に発表された文献を色分けしてみると概ね次のようになる。小崎喜太郎の「批評家としてのサミュエル・ジョンソンの一面」【955Zd】は、'nature', 'reason', 'imagination' をキーワードにして、彼の批評家としての立場を「進歩派の連中に依って無理に保守陣営に押し戻された形で、これを少し引き戻す必要がある」とやや左寄りへの修正を試みる。3年後の石黒心裕の「批評家としての Dr. Johnson」【95821】も同様のキーワードから彼が自らの文学において 'neo-classicism' の考え方を排し 'imagination' を重視したとして左傾的判定を下している。その翌年に岸英朗は「Dr. Johnson と古典主義」【95961】で古典主義の法則に収まりきらないものを容認した柔軟な古典主義観が「極めて英国的な文運の生成に寄与」することになったと右寄り。いっぽう矢本貞幹の「Samuel Johnson の文学批評(2)」【959Y1】では「文学における楽しみの要素」すなわち 'poetical delight' を尊重する「romantic な趣味」が後年の Johnson の批評に混じるようになったと左に振れている。吉本良典の『『古典主義英文学序論』：ポープ・ジョンソンを中心として】【96935】も、古典主義文学を特徴付ける 'common sense' が *Lives* では彼に秩序を志向せしめたと指摘して右側。Vernon Hall, Jr. の *A Short History of Literary Criticism* (1963) の邦訳【97941】も、Johnson が「新古典主義者のしんがり」を担っていたとするなど、彼を右寄

て批評上の基準【10/1】として機能していたばかりか彼の思想【11/9】の根幹をもなしていたが、その研究史を展望する作業は現在の筆者の手に余るので、稿を改めて後日を期したい。

¹³ Virginia Woolf を Johnson と結び付けるところの 'common reader' の概念であって、黒沢茂も「ヴァージニア・ウルフ」【96781】において、Johnson がその存在を信じることができた「普通の読者」の概念に触れている。

りに据える勢力も衰えていない。しかし E. O'Reilly は “Augustan Literary Taste and Dr. Johnson's Unrepresentativeness” 【983Z8】において、Shakespeare の ‘imagination’ に圧倒され沸き立ちながらも古典主義の枠内に留まろうとしたことが彼に感受性の自己制御を迫らせることになったと、彼が右寄りであったことを惜んでいる。それに対して神定修一の “Neoclassicism of Dr. Johnson” 【987Z3】では、基本的には古典主義の側に与してははずの彼の批評理論が柔軟に運用されていると穏健な右寄り説に落ち着いている。似たような見極めとしては、Johnson は古典主義の時流に逆らえるだけの経済的余裕に恵まれていなかったとする白田昭の「ジョンソンとゴールドスミス」【992X1】や、彼を古典主義のしんがりと位置付ける齊藤延喜の “The Sense of a Middle” 【99454】、Shakespeare の思想の深遠さに自らの限界を弁え得たところが Johnson の古典主義的な謙虚さであったとする中川誠の「モラリストの Shakespeare 批評」【99734】などに見出せる。このようにして見ると多くの論考において、Shakespeare に向き合おうとする Johnson の姿勢をどう解釈するかが、右か左かの位置付けを探るリトマス紙となっているようだ。

【10/2】：伝記作家としての Johnson 等の批評的研究

Johnson の伝記観に焦点を絞った論考は〈第三期〉後半に集中して見られる。中原章雄の「伝記作者としてのサミュエル・ジョンソン」【96312】は、1963年当時に *Lives* がまだ伝記文学作品として研究されていなかった状況と、作家を主題にした伝記は Johnson の考えでは歴史よりも道徳的で小説よりも感銘が深い分野を意味していたことを教える。その道徳性を追求する際にプライバシーへの配慮と記録としての真実性の実現をどう兼ね合わせるかについてを *Lives* に探ったのが中川誠の「Dr. Johnson における「伝記の真実」と人間性」【96662】であった。島津文成の「ジョンソン批評の一面」【972Z4】も、‘poetry’ の目的は ‘truth’ の伝達にあると考えていた Johnson が伝記、自叙伝、日記、自省録を残したのはそこに「人生の truth」を求めたからであろうと解した。そうした姿勢を歴史と伝記との対比において明確にしたのが松原慶子による1970年代の一連の論考【973Z2】【974Z2】【97632】【97711】で、松原によると、*Savage* (1744) で歴史を記述しようとしていた Johnson の姿勢は “Pope” (1781) を執筆する頃になると個人の内面生活を描こうとする姿勢に変化していき、Johnson は個人の内面生活の事実を描写する伝記のほうを歴史よりも上に位置付けるようになったと結論する。故に Johnson による若書きの伝記には彼独自の価値はないとするいっぽうで *Lives* には彼の考えた文学者像を読み出す資料としての有効性を認めようとする。

Savage と *Rambler* 第60号とを読んだ長瀬久子は、Johnson が目指した「役に立つ伝記」とは内部に矛盾を抱えた「人間という生き物の姿を認識させ得る伝記」のことであったろうと「伝記の〈有用性〉」【98081】で推論する。また小池銈も「伝記とジョンソンと」【984Z4】で *Savage* が近代的伝記を誕生させたとするなど、彼の伝記観を捉える上での *Savage* の有用性が注目されてきている。なお *Savage* についての文献は【13/】で取り上げられる。

そして〈第四期〉になってからの芝垣茂の “Some Differences between Samuel Johnson's View of Biography and James Boswell's” 【99136】は、中川誠【96662】の延長線上にありながら、

Boswell の伝記観とも絡ませて Johnson の伝記論を対比的に考察したものである。

【10/3】：談話家としての Johnson

外山滋比古が「語録の人」【984Zb】で Johnson の「語録にはことばがページの外に飛び出してくるような躍動がある」と称賛したのもっともで、〈第Ⅰ期〉の益田藤之助による「Thoughts on Dr. Johnson」【90992】いらい我が国では、主に *Life* をネタにして読者の好奇心に訴え易い Johnson 語録集が纏められることがよくあった。英文学史の教科書、名言辞典の類はもとより、【90091】【90281】【90361】に始まる数次の *Life* の注釈なども同様な発想から産み出されてきたものであろう。その様な次第で、我が国の文献で談話家としての Johnson の領域に分類されるほとんどが語録集か談話好きな Johnson の姿を観察しようとする論考であった。

〈第Ⅱ期〉では、石田憲次と鈴木二郎による『ジョンソン』【93431】に収められた「Mr. Greatheart」(pp. 100-114) が Johnson の「内なる風景」を伝える語録集であった。〈第Ⅲ期〉になると、柴崎武夫の「Dr. Johnson の wisdom」が R. Postgate 版 *Life* (1949) を利用して纏められた。後に柴崎は福原麟太郎著『ジョンソン』【97211】の巻末に「ジョンソン語録」(pp. 301-340) を執筆することになる。Johnson の200周年に刊行された永嶋大典の『ドクター・ジョンソン名言集』【984Y1】も彼の名言を手掛かりに26の話題において「奇人ジョンソン」の面と「真面目人間ジョンソン」の面とを浮かび上がらそうとの試みであった。〈第Ⅳ期〉では、横手長治が *Life* で面白いと感じた箇所を訳出した「ジョンソン博士名言抄録」【990Z2】や、中野好之が自らの4,000枚ある *Life* 邦訳【98151, 98251, 983Z1】を300枚に刈り込んだ『ジョンソン博士の言葉』【00281】なども、語録集に分類されるであろう。

Johnson の談話好きな性格のほうに注目した論考としては、〈第Ⅱ期〉に戻って、石田著『ジョンソン博士とその群』【93311】所収の「ボズエルの傳より見たジョンソン」(pp. 75-101) が、言葉を通して彼の姿を捉えようとしながらも、その背後には作品よりも彼の人物のほうが英国人に親しまれているとの認識があった。だから平田禿木も『イギリス文学史：十七・八世紀』【933Z2】のなかで、彼の作品について「あれだけの物で何うしてあの至高の位置を占められたものか」と自問してから、彼が「文人としてよりは談話家として重きをなして」いたからであろうと自答していた。またこの頃に翻訳された Coleridge の *Table Talk* (1835) 【94371】でも、対 Johnson 評は「筆を取る場合よりは口で議論する場合の方が事実一層有力」であったとある。なお *Table Talk* は最近にも野上憲男により『コールリッジ談話集』【00172】として邦訳されている。英米では19世紀を通してそして20世紀初頭頃まで Johnson を作家としてよりも談話家として評価する傾向にあったから、それが我が国の〈第Ⅱ～Ⅲ期〉の文献でもほぼ共通した認識となっていた。しかし〈第Ⅳ期〉になると、例えば中原章雄著『ジョンソン伝の系譜』【99191】所収の「座談と座談家の諸相」(pp. 51-77) のように、Johnson が座談と執筆とを「その最大の振幅において実践した」と捉え直し、同時に Boswell の「包丁さばき」を臨床的に検証すべきだとの見方もされるようになる。

談話に勤しむ Johnson の姿については、様々な文献が様々な面からそれを捉えてきた。例えば

〈第Ⅱ期〉に C. Langbridge は「The Terrors of Talk」【939Z1】において彼を座談の暴君として登場させ、〈第Ⅲ期〉では、『朝日新聞』掲載の「現代に生きる古典」【95835】が彼の人生観が明るくなかったと感じ取っていたし、G. Gordon の『座右の書』【96081】は、Johnson は男性を相手に談論してこそ彼らしいとの Boswell の考え方を踏まえて、*Life* は人生の厳しさを体験した中年男性が味わうべき書であるとの見方を示しているし (pp. 25-31)、須藤信雄は「Dr. Johnson の人間像」【96632】で *Life* から談話する宗教人の姿を読み出そうとした。そして渡部昇一の「食談と語録」【97981】は大常識人の言行録である *Life* に美食家・健啖家としての彼の姿を見ている。

【10/4】: Johnson と歴史上の人物との比較

この分野の文献を縦覧すると、Johnson の作品を読んで想起する歴史上の人物名に関しては、その時々の研究の動向よりも、研究者一人ひとりの感性や関心といった個人的要因に支配されている場合が多いのではないかと思われる。つまり多様な人名が時代的背景との脈絡もなく飛び出してくるからである。確かに同一人物が複数の文献で Johnson と比較されている例も見られるが、それでも大体において散発的な発生であり着眼も異なっていたりするものである。

〈第Ⅰ期〉では、三宅雄次郎が「ジョンソン二百年紀」【90993】で Carlyle との多様な類似点を指摘していたが、〈第Ⅲ期〉になると矢本貞幹が「伝記の批評：Carlyle の場合」【96482】において、Carlyle の叙述法が Johnson のそれに比べて「まったく堅苦しい」といった相違点を指摘している。

〈第Ⅱ期〉では、石田憲次と鈴木二郎の『ジョンソン』【93431】が「第十八世紀の心」(pp. 58-66)において、彼と Swift を18世紀的 'hilarity' の枠内で捉えていた。Swift との対比は〈第Ⅳ期〉にも海保真夫により「スウィフトとアイルランド海」【00137】で「旅行」という視点からなされている。齋藤勇の「植村正久先生の文學的寄興」【93983】が二人の共通点10項目を並べており、後に中山幸三郎が「ドクター・ジョンソンと植村正久(1)～(3)」【96971, 97061, 97134】で再び両者を比較することになる。

〈第Ⅲ期〉には文献数も増えて比較対照の相手も多様化してくる。先ず枝村吉三の「ジョンソンとコウルリジ」【95922】が Coleridge との共通点を幾つか挙げているし、小池政雄の「二人の批評家」【961Z2】も両者を比較をしていた。Gray 研究者でもあった福原麟太郎が「トマス・グレイとジョンソン時代」【96041】で互いが互いをどう評したかを纏めている。守屋富生の「ベネットにとつてのジョンソン」【965Y2】は Arnold Bennett の著作に Johnson への言及を拾おうとしていた。島津文成は【967X3】「ジョンソンとエリオット」で T. S. Eliot の Johnson 崇拜を分析し、30年後には村田俊一が「T. S. Eliot and Dr Johnson」【99693】で歴史感覚をめぐる二人の相違点にも論及することになる。S. E. Hyman の『批評の方法3: 批評と評価』【97463】は1948年の原著からの邦訳ながら、米の文芸批評家 Yvor Winters (1900-1968) を「サミュエル・ジョンソン流批評のおそらく唯一の代表者」と格付けている。五十嵐一の「イギリスの文学」【97641】は、漱石に目配りしながら Johnson を語っているが、〈第Ⅳ期〉にも鈴木善三が「漱石とジョンソンの「学者論」

【00031】において両者には共通して「モラル・バックボーン」があったと見ている。柴崎武夫の「ジョンソンとドライデン」【97732】が人間性での Dryden との類似を、保田正義の「Blake と Johnson 試論」【97741】がその相異を、渡部昇一の「行と文と」【979Y1】では孔子との比較を、それぞれ話題にしていた。

1980年代には、柴崎武夫が「ドクター・ジョンソンにも似て」【98161】のなかで Johnson を福原麟太郎に重ね合わせ、川崎寿彦は『イギリス文学史入門』の「大御所ジョンソン博士」(pp. 79-81)【986X3】で、彼と 'h' なしの Ben Jonson との共通性に触れている。“A Trio in The Age of Transition”【986&1】で「義務」と「死」に対する姿勢において Hume と Johnson を対比していた諏訪部仁は「大槻文彦とサミュエル・ジョンソン」【994Z5】では *Dictionary* (1755) と『言海』(1891) との類似点から二人の人柄を語っている。山内久明の“Anfractuosities of the Human Mind”【98732】は Johnson の 'melancholy' への取り組み様を William Cowper の場合と比較しながら分析する。そして『上田辰之助著作集 5』【98862】所収の「蘇格人アダム・スミス」は、Smith との対比から England 文化と Scotland 文化の相克を捉えようとした未定稿であった。

1990年代になって、中原章雄は『ヘンリ・ライクロフトの私記』再読【99233】で貧困に喘ぐ者同士の連帯感を George Gissing に読み出し、後に北垣宗治の「ジョンソンとサヴェッジ」【00051】も彼と Savage を貧困と格闘した戦友同士に見立てている。白田昭の「ジョンソンとゴールドスミス」【992X1】は彼を「古典主義の牙城を守る後衛」に、Goldsmith を「ロマン主義の先駆者であるよりも、古典主義の遅参者」に喩えている。そして斉藤延喜の“The Sense of a Middle”【99454】もまた Johnson を古典主義のしんがりに、Sterne をロマン主義の先鋒に位置付けている。久野陽一の主題は「ジョンソンのなかにリチャードソンを読む」【99659】のタイトルが示す通り。中川誠の「モラリストの Shakespeare 批評」【99734】は、Shakespeare 理解の仕方を異にしながらも Hazlitt と Johnson とが人間性探究の姿勢において結び付いてくるとする。原田範行の“In Search of ‘General and Transcendental Truth’”【99736】は、人間性を普遍化しようとした Johnson と自然の包括的把握に挑戦した Wordsworth との間に酷似する姿勢を捉えようとしている。

誠に百家争鳴の賑わい振りであるが、Johnson と邦人との比較には、英米の作家と比較する場合以上に、比較しようとする側の思い入れや人生観が投影されてくるようである。植村正久牧師を紹介した齋藤勇は敬虔なクリスチャンであったし、Johnson に福原麟太郎を重ねたのは弟子の柴崎武夫であった。ここで最後に取り上げる「正統のジョンソニアン・鈴木二郎」【003Z3】の執筆者泉谷寛は最近(2005)他界したが、真摯なキリスト教徒であった鈴木二郎(1891-1955)の人生を語りながら、そこに自らの人生を重ね合わせようとしていたかもしれない。

【10/5】：Johnson 当時および後世での彼の名声や人物評

〈第Ⅰ～Ⅱ期〉における Johnson に対する我が国での評価は、例えば田村逆水が『人生と健闘』【90831】で「彼の全生涯を通じて終始一貫、變らざりしものも苦闘也。健闘の精神也」(pp. 156-162) という称え方をしたように、貧しい境遇に生まれながらも不断の努力を心掛け遂には文筆で

身を立てて後世の我々に生き方の手本を示してくれた英雄と位置付ける positive な評価と¹⁴、文壇に君臨しながらも読む者を感動させる傑作を残さなかった漫談家という negative な評価との二様が散見されるばかりで、Johnson の作品に光を当ててそれを積極的に評価しようとする文献には行き当たらない。

中村正直が明治 4～11年に訳出した『西國立志編』【87171】、『西國童子鑑』【873X1】、『西洋品行論』【87861】などは人生訓・処世訓の取材先として Johnson の言行に関心を寄せてはいたものの、彼を文学的に評価することに対しては頓着しなかった。多少文学的香り添えながら Johnson の姿を広めたのは、彼を普通の人間と運命を共有し合いながら筆を揮った英雄にして社会における予言者と見立てた Carlyle の *On Heroes and Hero-Worship* (1840年講演, 1841年出版) の翻訳『英雄論』や注釈であった。『文献目録』に拾ってみると、〈第 I～II 期〉だけでも『英雄論』の邦訳は土井晩翠訳【89851】、住谷天來訳【900X1】、栗原古城訳【912Z1】、中村古峽訳【914X1】、柳田泉訳【92351】の 5 種類があり、しかもそれらが繰り返しリプリントされていたことが判る。¹⁵

Johnson の作品を踏まえた評価でも negative なものならば〈第 I～II 期〉の文献に拾える。例えば無名氏の「アウガスタン時代」【89311】は *Lives* に ‘Poet’ なく *Rasselas* に展望なしと決め付けている。内田貢の『ラセラス傳』の作者【89441】は、坪内逍遙に Shakespeare 論を酷評されたことで Johnson は作家というよりも「偉大なる豫言者」に転進したと判定している。*Taxation No Tyranny* (1775) を執筆したことで Johnson は松村介石【90271】から変節漢呼ばわりされた。栗原基と藤澤周次による『英國文學史』【90721】には彼の「評論の多く當を失せし」(pp. 182-191) とある。但し浅野和二郎の『英文學史』【90722】は、彼の著述について「其種類は雑多にして…屑のなき代りにこれぞといふべき傑作もなく、やゝ素人文士たるの觀あり」(p. 365) としながらも、*Lives* に対してだけは「吾人は初めて評論家としてのジョンソンの手腕を見る」(p. 366) と珍しく好意的な評価であった。舟橋雄の『英文學史大觀』【91181】は「文体の模範としてとる人もなし、我々の大切な時間を費すべき価値はないのである」(pp. 93-96) と厳しい。藤代禎輔と成瀬清による「ジョンソン」【911Z1】は「詩も小説も脚本も到底第三流を出でず。其の得意なる評論と雖も…決して誇るに足るものなし」と更に厳しく、しかもそれが『日本百科大辭典』の項目であっただけに影響力も少なくはなかったであろう。〈第 II 期〉の掉尾を飾るのは金子健二の『馬のくしやみ』【92691】であったが、Johnson について「博學であつた代りに驕慢であつた。筆も口も常人以上に優れてゐたが、きぎな男であつた。努力主義であつたが不良老年の一人であつた」との印象を金子は現地踏査から持ち帰ったようである。大和資雄の『英文學の話』【94231】は、彼の詩も小説も随筆も Goldsmith 以下、評論は Burke 以下、*Lives* の文体も Gibbon 以下…と、Johnson の文学的の業績を全く認めていない。

¹⁴ 泉谷寛の「学士戎孫からドクター・ジョンソンへ」【987Z1】が、明治 3～43年の諸文献に、その当時の健闘精神が強調・反映されているとする Johnson 像を追っている (pp. 59-70)。

¹⁵ 注釈は【89711】と増田藤之助【929Y2】が見られるが、捜せば更に集められよう。また【89711】によると、原著は英本国でも 1872年くらい毎年のように数千部単位で重版されていた。

〈第Ⅲ期〉のうちはまだ『英雄論』への需要があったようで、栗原孟男訳【94922】、老田三郎訳【94952】、平和舎訳【95562】、入江勇起男訳【96271】を通して、貧にあって品性と見識を保った文士の英雄像が読者に伝えられていた。そして Johnson の生き様を捉えた人物評に彼の作品の positive な評価が加味されるようになり始めるのは〈第Ⅲ期〉からのことであった。すなわち阿部知二により邦訳【948X1】が出された E. Blunden の *Two Lectures on English Literature* (1948) は Johnson を「最初の大英語字典(1755年)を作った人」として称えた。また T. S. Eliot が Johnson に対して“a dangerous person to disagree with” (p. 166) と一目を置いてみせた“The Metaphysical Poets” (1921) を収録する *Essays by T.S. Eliot* 【95181】に施注したのは矢野峰人であったが、彼は生誕250年記念の座談会「ドクター・ジョンソンを語る」【959X6】において「いつまでたっても変わらない価値というのは、批評家としての Johnson ではないかと思いますね…」と発言している。風呂本武敏も「ジョンソンの時代のいまひとつの教訓」【98131】において出版文化的視点から *Dictionary* に注目していた。

しかし Johnson の文学に対する negative な見方が根絶されたわけではなく、原著は1921年出版ながら〈第Ⅳ期〉になって邦訳【998X1】された Taine の *L'Age classique* などは、Johnson を「教区小役人の習慣と警吏の性癖とを持った、この気難しい熊のような男」と喩えている。このようにフランス風の Johnson 評が我が国にまで残響してくることが時折ある。大塚幸男の『ヨーロッパ文学主潮史』【963X2】が、romanticism 到来を目前にした Johnson が「おのが理解しえない時代に君臨し、文学界の独裁者となった」としているのもその一例である。

結局のところ〈第Ⅲ～Ⅳ期〉の人物評では、その多くが positive な評と negative な評との間で振れを見せているようだ。石田憲次の「Dr. Johnson という人物」【95361】のように、座談する Johnson は「自己の口にする言葉の効果を意識していた」が「ヒューマニストとしての理想を失わなかつた」ところが偉いという誉め方であったり、あるいは秋山肇の「わがジョンソン像」【975Y4】の場合には文壇の大御所という厳しいイメージとは別の愛すべき姿を彼に見ようとしたり、L. A. Lundmark, Jr. の“Thoughts on Samuel Johnson's Unpopularity”【98322】は道徳や宗教に背を向けたがる現代人をそれらに引き戻そうとする作風が Johnson を不人気にしたと分析していたり、小野寺健の「国民的名物男サミュエル・ジョンソン」【99253】などは、誰もがタイトルを思い出す作品を書いたわけでもない彼を文豪と奉っているところが英国らしいなどと屈折した誉め方をしている。

【11/】：諸事項（芸術，教育，青少年，法律，超自然的事象，風土，科学，戸外の娯楽，女性，結婚等）に対する Johnson の見解および姿勢 (C/G 【11/1:】～【11/8:】)

上記事項の何れかが前面に出てきている論考を『文献目録』に捜してみると、〈第Ⅱ期〉に見られる僅かの例を除いて、ほとんどが〈第Ⅲ期〉と〈第Ⅳ期〉で半数ずつに分けられる。

まず〈第Ⅱ期〉の石田・鈴木『ジョンソン』【93431】に、Johnson が法律家の適性を備えていると判定した「ジョンソンと法律」の章 (pp. 94-98) がある。それではと「法律」の視点からの関

連文献を捜してみると、死刑制度のなかでの Johnson の行動に注視した寿岳文章の「Johnson と死刑囚」【955Z4】あるいは著作権法に対する彼の意識を探った宮崎芳三の「十八世紀作家の権利意識」【96862】とあまり数を見ない。海外では1951年に E. L. McAdam, Jr. が10年来の研究を *Dr. Johnson and the English Law* に纏め、Oxford の法学教授に就任した Robert Chambers (1737-1803) の法学講義ノート1,200頁分に Johnson が協力した部分を指摘しており、この発見により彼の法律知識や国家観が再認識されるようになった。その後1986年に Thomas M. Curley が *A Course of Lectures on the English Law 1767-1773* としてノートの全文を印刷し、Johnson の政治的著作とも重ね合わせて彼の思想面での関与を明らかにしている。従って Johnson における法律を考察する際にはこの流れに沿って今後はなされることになる。我が国で Johnson が手伝った“Law Lectures for Robert Chambers”に触れていたのは僅かに永嶋大典【999Z4】のXIとXII章くらいであった。但し英国法研究の領域で何かの成果が出されているかもしれないが筆者はその事例を知らない。むしろ『サミュエル・ジョンソン百科事典』【999Z1】にある「Law」や「Chambers」の項目が参考になるかもしれない。

いっぽう「女性」や「結婚」絡みで Johnson に迫った論考は【5/3】でも触れたが、この領域でも最も目立つようである。〈第Ⅱ期〉に、E. J. Hardy から翻訳した『恋愛清談』【93481】には彼の女性好きな側面と奇妙な結婚生活の紹介記事 (pp. 120-129) がある。〈第Ⅲ期〉には、高田峰尾の“Mr Rambler Advises”【959Z2】が彼の女性観を *Rambler* に読み、岸英朗は「ドクター・ジョンソンと女性たち」【98231】で男性優位主義者 Johnson と彼を取り巻く女性たちとの間の罅迫り合いを語り、江藤秀一の「ジョンソン博士の結婚観」【98721】は *Rasselas* や随筆に結婚への言及を集めている。Johnson の保守的傾向は、宮崎芳三と水越久哉が「女性作家の登場」【988Z2】で着目した1753年の「ペンを武器としたアマゾンの群れ」に対する彼の警戒感に繋がっていくかもしれない。〈第Ⅳ期〉になって、稲垣久子の「サミュエル・ジョンソンの女性観」【98931】は、*Life* で男性優位主義者として伝えられた Johnson が随筆や *Rasselas* のなかで知性的女性を描いたことについて、「意見と行動と創作の矛盾を未解決のままに過ごすこと自体がきわめてジョンソンの現象なのだ」と解釈するが、L. Goodhew の“Dr. Johnson and Women”【00036】などは、彼は孤独に対する慰謝を女性に求めていたのであって、*Life* に記録された Johnson の女性観は彼の本音ではなかったと分析している。そして江藤秀一の「ドクター・ジョンソンと妻のエリザベス」【00251】は妻 Elizabeth [Tetty] の半生を諸文献に拠って再現している。あるいは珍しい視点としては鈴木実佳が「不運な女」と「落ちた女」【004Y2】で、Johnson の売春婦像を *Rambler* 第170～171号から読み出している。Boswell は *Life* で女性に触れたがらなかったし Johnson に時折見られた男性優位主義的な言動の故か、海外で Johnson 周辺的女性に対する研究は盛んとはいえ Mrs Thrale の場合を除いて未熟な段階にあり、最近の Norma Clarke 著 *Dr Johnson's Women* (2000) にしても作家の経歴を持つ女性のみを対象にして伝記的情報を示すに留まっている。

「女性」や「結婚」に次いで取り上げられることの多い話題は Johnson と「科学」である。〈第Ⅲ期〉で工藤直太郎の「ジョンソン博士と空中飛行」【95841】および泉谷寛の「ジョンソンの「飛

行術」論【981Z3】は共に *Rasselas* で示された Johnson の飛翔への志向を語る。岸英朗の「ドクター・ジョンソンの科学意識」【98216】は1756～1757年の著述に彼の科学振興への関心を認め、同じく「Dr. Johnson」【98355】によれば、彼の科学知識は信仰との連携が前提となっていた由である。〈第Ⅳ期〉では大野誠が「S. ジョンソンの『英語辞典』とイギリス科学の権威」【99132】で、*Dictionary* における科学用語の引用元が用語により Newton 以前の著作からと以後の専門辞典からとに二分されることを指摘している。中原章雄の『『釣魚大全』を読むジョンソン』【99714】は生活者 Johnson に博物学的な関心を見出そうとする。Johnson における科学・医学知識の範囲と彼の Bacon 流の認識方法に迫った Richard B. Schwartz 著 *Samuel Johnson & The New Science* (1971) は今でも基本文献とされているが、それを積極的に取り入れた論考を我が国で見ることがあまりないようだ。

18世紀においてもなお「科学」とは微妙な関係にあった「超自然的事象」に対しても Johnson の好奇心が旺盛であったことを窺わせる言及が見られる。例えば死んだ従兄弟 Cornelius Ford が幽霊になった話を Johnson がしたという白田昭著『イン』【98662】ちゅうの「ときには幽霊までも…」(pp. 203-207)。彼が‘Cock Lane Ghost’に一杯食わされた話を紹介する桜庭信之の「英文学随想(VI)」【99491】や、言葉や数字を理解する「学者豚」に彼が興味を示したことの異様さに注目した鶴見良次の「学者動物について」【99642】および『マザー・ゲースとイギリス近代』【00584】などである。そして『サミュエル・ジョンソン百科事典』【99921】の「Superstitions (迷信)」や「Cock Lane ghost (コック・レーン横町の幽霊)」項も情報源として多少参考になる。

その他の話題としては、Johnson における「教育」も主に〈第Ⅲ期〉の文献に見られる。高橋源次著 *Samuel Johnson* 【97841】所収の“What to Teach” (pp. 9-11) は若者が教育されるべき12分野についての Johnson の見解と彼が推奨する書名とを示している。岸英朗の「女性作家とモラリズム(2)」【97823】は彼の女性観の根幹を示唆しているし、泉谷寛は Dodsley が発行していた教訓書 *The Preceptor* に彼が寄せた“Preface” (1748) を「教育に関する考察」【986Z4】として訳出している。

「風土」に関しては、小林章夫の「ジョンソンと中国」【97951】が彼の中国への関心を1736～1742年の著述に認めており、A. O. Lovejoy を訳した『観念の歴史』【00353】にも Johnson の中国論への言及 (pp. 90&273) が見られる。植田和文の「都市を見る」【99123】は彼の都市観を *Life* に読んでいる。また村上文昭の『スコットランドあれこれ』【979Z1】には Johnson と Scotland の接点への言及が散見され、諏訪部仁の「ジョンソンとスコットランド」【99739】は彼の「スコットランド嫌い」は口ほどでもなかったことを教えている。

Johnson が無関心であったか軽蔑を示したと信じられてきた文学以外の芸術分野に、彼が関心を寄せていたばかりか影響力をさえ及ぼしていたことを立証した研究が Morris R. Brownell によって *Samuel Johnson's Attitude to the Arts* (1989) として纏められているが、我が国では美術を絡ませた程度の論考しかなく、【5/3】で挙げた岡本謙次郎の「英國の繪畫」【95171】や、松原慶子の「ジョンソンとレノルズにおける伝記と肖像画の平行現象についてⅡ」【974Z2】くらいであろう。

【11/9】: Johnson の思想

〈第Ⅱ期〉の文献は、石田・鈴木の『ジョンソン』【93431】ちゅうの「處世道」(pp. 41-50)にしる、志賀勝の「英米文藝に於ける人間観」【938Y1】にしる、あるいは西脇順三郎の『英米思想史』【94171】にしる、思想面においては中庸を弁えたなかにも英国らしい常識人として Johnson をイメージしていた。

しかし〈第Ⅲ～Ⅳ期〉の文献になると、例えば豪快な外貌と多彩な言動の陰に宗教的倫理的に生真面目な人間を読み取ろうとした諏訪部仁の「ドクター・ジョンソンと倫理」【964Z1】が書かれたらうで、「談論に時を忘れる人生の大教師のかげに、独り私室で眠られぬ夜を、宗教的生に呻吟するもう一人のジョンソン」の存在を指摘した秋山肇の「ジョンソンにおける死の恐怖」【97331】のように、彼の思想を明暗の両面で捉え始めてきているようだ。

そこで先ず彼の思想の明の部分すなわち眼に見えやすく時として建前的な部分を論じたものを概ね時系列に沿って挙げてみよう。柴崎武夫の「サミエル・ジョンソンの叡知」【959Z1】は彼の文学の根幹をなしたのが人間中心の思想であったとし、成田興史の「Dr. Johnson on Pre-Romanticism」【96861】は彼が人間の個人的側面に無関心ではなかったと述べ、泉谷寛は一連の論考【98173】【981Z2】【98217】で彼の著述に理性と想像力の意味を探り、彼の文学および信仰におけるそれらの調和について考察している。同じく泉谷による「ジョンソンにおける「時間」の問題」【98331】では彼が「苦渋に満ちた現実・時間を通して永遠を観た」ことを *Rasselas* や随筆に読み、彼にとって「現世は真理覚醒への方便であった」と解釈する。さらに原田範行の“Johnson's Attitude towards History in His Early Career”【99932】は、想像力が過去と現在とを結び付けるという歴史観が普遍的人間像に迫ろうとする彼の文学において活かされていたとする。「真理覚醒」を「知識の獲得」と読み替えるならば、石井善洋が「学問について(1),(2)」【99933, 99992】で再構成を試みた Johnson の学問観に照らしても、知識の獲得を怠った結果の無知というものは彼にとって「真理覚醒」を蔑ろにしたに等しいくらいの「心の墮落」にも思えたことであろう。

石田・鈴木の【93431】が謂うところの Johnson の「健全なる非理想主義者」的思想は彼の対社会制度観にも反映されているようだ。例えば秋山肇の「Dr. ジョンソンにおける保守主義」【99137】によれば、Johnson は一般民衆の政治的・宗教的な良識が機能するとは信じていなかったために言論・出版に対して適正な統制が加えられる必要性を容認していたが、そのことは宮崎芳三と水越久哉の『イギリス文学者論』【99131】が第1章(pp. 1-7)で指摘した、半人前の「もの書き」が増えたことに彼が覚えた不快感の背景への理解にも繋がるであろう。原田範行もまた「読書する啓蒙主義」【00257】で、出版市場における文士の氾濫が「情報発信の著しい増加と多様性」をもたらせ、既存の読者層の安定性を脅かし始め、延いては社会の分裂や無秩序を招来するのではないかと彼に危惧させたことを指摘している。

彼の思想の暗の部分すなわち隠しておきたい本音的部分を論じたものとしては、先ず Philip Williams の“Samuel Johnson's Central Tension”【95893】が彼の死への恐怖に正面から取り組み

キリスト教信仰にその根源に見出しているが、こうした主題を扱った論考としては我が国での早い例であろう。¹⁶ 石田憲次は「ジョンソン博士二題」【94921】で彼を政治的な「保守主義者」と規定していたが、永嶋大典の「保守主義の土性骨」【96061】における保守とは保守的有神論的合理主義の意味で、彼をそう規定した根拠は、進歩は時間の経過において可能であるが、時間の経過は人を死に近づけるので、「死」を恐怖した Johnson は宗教や倫理を科学の上位に置くという保守的態度を堅持したとの解釈からであった。

いっぽう秋山肇の「ジョンソンにおけるペシミズム」【97431】は、彼の pessimism が何ものにも代えがたい喜びを忍苦多い人生の背後に潜ませた特異なものであったと解し、同じく秋山の「ジョンソンの精神」【97621】も彼が「害のない道理にかなった快樂」をこよなく愛する人間であったことを指摘している。泉谷寛にしても“Johnson's Pessimism in the Choice of Life and Eternity”【975Z2】で、死への恐怖が彼の悲観主義の源にはなったが宿命論的諦念には捕われなかったことを彼の著述に読み取っている。やはり泉谷の「ジョンソンの笑い」【982Z2】も60歳代以降の彼の笑いへの執着と苦渋に満ちた現実に対する彼の愛着とを重ね合わせているし、同じく「ジョンソンにおける死と死の恐怖」【98473】でも、説教・随筆に読み出される死を説く彼の姿と日記・書簡に告白された死を恐怖する姿とを交差させてから、「生の強者」はやはり「強者の死」を全うしたと結論付けている。

岸英朗による書評【99052】は、Nicholas Hudson 著 *Samuel Johnson and Eighteenth-Century Thought* (1988) が Johnson の倫理的原理を「キリスト教的エピクロス主義」と定義していることを教えるが、それは石井善洋の「希望について」【00092】が随筆作品に読み出したところの Johnson が期待していた「合理的な希望が与える満足」とも無縁ではなからう。同じく石井の「信仰について」【00291】でも示されているように、人間の事象は偶然に支配されるもの人間の努力は報われなくてはならないという矛盾を孕んだ信念を Johnson が保持し得たのは、その矛盾を信仰のうちに折り合わせていた故であろうという解釈も、Hudson の「キリスト教的エピクロス主義」という定義と共振り合うのではなからうか。

【11/10】：Johnson の気質と習癖

ここに取り上げる Johnson の気質と「Johnson の思想」【11/9】との境界は分明し難いし、彼の場合は特に「談話家としての Johnson」【10/3】とも不可分に重なっているので、「Johnson の気質と習癖」に関わる文献の多くがそれらのどちらかに吸収されるであろう。現に Clifford & Greene (1970) を参照してみても、【11/9】には48件が【10/3】には40件が記述されているのに対し、【11/10】には15件しか挙げられていない。しかもそのほとんど扱われる主題が *Life* に記述された彼の気質と習癖に関する情報が発端になっている。したがってここでは直接文献資料から抽出される

¹⁶ Johnson が死への恐怖を口にしたことは *Life* を通して知り得たから、「死を恐るゝこと甚だしく…」程度の言及ならば、明治30年の【897X1】所載の「サミュエル、ジョンソン」(pp.50-55)にも見られる。海外で Johnson の心の暗の部分一般読者にまで知られるようになるのは、Krutch (1944) 以降のことであろう。

Johnson 像がどうであるといった羅列よりも、彼を観察しているうちに感じ取られてくる彼を覆っている雰囲気や報告しているような文献を並べてみたい。

〈第Ⅰ期〉には、明治27年に内田貢の『ジョンソン』【89471】があった。その第4章「性行習癖及び交遊」(pp. 141-207)が、文学倶楽部等の関係者の発言や逸話から、Johnsonの衣、食、美的感性、談話振りを伝えているが、その情報源については「例言」に「主としてボスウエルの傳に依りて事實を採集しぬ」とある通りであろう。しかし章の冒頭にある圏点の付けられた「…剛毅、膽勇、任侠、大度、慈仁、正義…」は内田がJohnsonに親しむうちに得た印象と思われる。明治30年には井上藤吉著『大文豪』【897X1】所収の「サミュエル、ジョンソン」(pp. 50-55)が、彼の気質について「剛毅と耐忍との二美性」に恵まれながらも「死を恐るゝこと甚だしく、仮令ひ貧困なりとも此世にあらんことを欲し、其病に臥すや、煩悶將さに狂せんとすること屡なりしが、其の將さに死せむとするの時に至り、豁然として悟るところあるが如く、静黙の中に瞑せり」とした筆致も、やはり井上を受けた感銘を伝えたものと見てよからう。

〈第Ⅱ期〉になると、内多精一の「目覺めたる愛蘭人」【92421】がJohnsonをIrelandの圧政者たるAnglo-Saxon人の典型に喩えていることから彼の醸した威圧観のほどを想像させる。いっぽう石田・鈴木の『ジョンソン』【93431】は、書物から「處世の大道」を学び、談話では「幽玄な四割」を「平然と棄却して…六割の眞理を常に提供」し、貧という「生活道場に於ける深刻なる修練」が彼をして人生の達人たらしめたと気質を按分している(pp. 35-40)。変わったところでは、彼が歯擦音(sibilants)に敏感であったことを岡本圭次郎が「Dr. Johnsonの耳」【93881】と題した書評で伝えているので、詩に対する彼の姿勢を考える時に参考にならう。

〈第Ⅲ期〉の西脇順三郎『近世英文學史』【948&1】は、彼がRousseauやDeismの思想を嫌ったのは、実人生において実行力のない議論倒れの態度や考え方を軽蔑したからと言い切っている。Y.M.によるW.J. Bate著*The Achievement of Samuel Johnson* (1955)の書評【95723】は、'the hunger of imagination', 'the treachery of the human heart', 'the stability of truth'がJohnsonの執筆姿勢であり生活方針であったことを伝える。また平井正穂の「世界文学史29」【96023】によると、彼の「平衡感覚がミルトンとその時代にみられる熱情enthusiasmに反撥」を覚えさせたそうである。

Johnsonの思索、行動、人生観が「理性的に思考するものは道徳的に思考しなければならない」という指針により導かれていたと多田幸蔵が「サミュエル・ジョンソンおぼえ書き」【971Y4】で指摘しているが、飲酒という視点で彼のなかの'moralist Johnson'と'Epicure Johnson'とのせめぎ合いを想像したのは諏訪部仁の「ドクター・ジョンソンと「酒」」【974X2】であった。同様にJohnsonがその詩観でも理性を想像力の上に置いたことを「ジョンソンとコリンズ」【96562】で指摘していた秋山肇は、「Dr. Johnsonにおけるロマン的要素」【96531】で旅人としてのJohnsonのうちにロマンティックな喜びに鈍感ではない彼の感受性に注目している。これはWalter Allenが謂うところの「センシビリティ」に通じるようにも思えるが、その『イギリスの小説』【97543】によればJohnsonは「センシビリティ」を育むことができなかつた由である。

玉井庸彦の「S. ジョンソンの J. ウェインに及ぼした影響について」【97533】によると、John Wain が Johnson から学び取ったのは彼の「悲劇的陽気さ」だったそうであるが、Johnson のそうした性格的傾向を考えるヒントになるのが、泉谷寛の「ジョンソンにおける「怠惰」の問題」【98373】であろうし、鈴木善三の「ジョンソンにおける怠惰」【984Z7】ではなからうか。泉谷によると「勤」と「怠」との葛藤が常に彼の心に同居して精神的緊張を引き起こし彼の気質に悲劇の様相を醸していたであろうし、鈴木によれば怠惰と闘うためにこそ彼は孤独を忌避して陽気な座談を求めたことになるからである。

〈第Ⅳ期〉になり、江藤秀一の「人生の選択」【99022】は Johnson が職業作家として順調なスタートを切りながら迷わずにいらなかった「でもしか」文士だったのではと想像する。真野泰も「職業作家サミュエル・ジョンソンの不安」【99634】で、「自信の無さを押し隠しながら自分の職業の社会における有用性を読者に、そして自分に納得させようと必死」になっている彼の姿を思い描くとともに、同じ真野の「職業作家サミュエル・ジョンソンと金」【99538】によると、それ故に彼はアマチュア詩人による手遊び的文筆を軽蔑していたことになる。

Johnson が保守的な人生観を持っていたことは【11/9】で触れているが、政治的傾向における彼の‘conservative’な側面を海外の最近の研究が浮上させつつあることを、永嶋大典は“Progressive or Conservative?”【99351】で教えてくれている。政治面での彼の保守的な姿勢については【20/】でも触れることになる。

【12/】：Johnson の散文文体

〈第Ⅰ期〉では、『國民之友』掲載の「文家秘訣(一)」【890Y1】が Johnson の文体について「ハートの鼓動はあへて感ずる能はざる」と言及した明治23年の例のみ。〈第Ⅱ期〉になると、Rambler の文体が室鳩巢を思い起こさせるとした竹友藻風の「ジョンソンとゴウルドスミス」【927Z1】、18世紀の文章家の文体が話し言葉の調子から離れていったことを指摘する B. Dobrée による講演を紹介した大内脩二郎の「Modern Prose Style(二)」【934Y1】が見られる。そして中西毅の「ジョンソン博士の文體」【93591】は、W. Vaughan Reynolds の“The Reception of Johnson's Prose Style”を要約したものながら、諸家による彼の文体に対する賛否を並べて超簡略版 Johnson 文体批評史になっている。その結びの「読者の鑑賞がすゝむにつれてその文體の長所を認めざるを得なくなるのではなからうか」とは中西による寸評であろう。「M. Arnold の散文論(1)～(6)」【940Y2】には、Johnson の散文では用語より構文のほうで平明なところが近代的であるとする Arnold の指摘が見られる。また「Johnson's Lives of the Poets」【94441】は、W. Raleigh 著 *Six Essays on Johnson* (1910) のうち「主として散文の達人としての Johnson を論じた」部分 (pp. 131-135) を柴崎武夫が訳注している。この頃までは概ね海外での見解を紹介して済ませていた段階であった。

〈第Ⅲ期〉では、先ず中島英雄著『近代英語とその文體』【953Z1】の刊行があったが、Johnson と Boswell の文体を引用で例示するに留まっていた (pp. 212-230)。しかし鈴木知行の“Some Aspects of the Prose Style of Doctor Johnson”【96561】になると、彼の文体の‘a pompous

writer' 的面と 'a plain writer' 的面との二面性に着目している。後にこうした視点は Robert Alter 著 *The Pleasures of Reading in An Ideological Age* (1989) を邦訳した『読みの快樂』【994X3】にも見られる Johnson における口頭の言葉の文体と書かれた言葉の文体の併存についての指摘とも同趣向であろう。

Johnson にあつては音の反復は意味の反復の補助でしかないとする W. K. Wimsatt の *The Prose Style of Samuel Johnson* (1941) に対して、Johnson の著述では頭韻や子音反復が基本的な表現技巧として機能したはずと主張した Philip Williams の “Parallelism of Sound in Samuel Johnson's Prose” 【97135】も彼の文体に迫った論考であろう。江藤秀一は『『ラムブラー』の英語』【98621】で *Rambler* 第14号が読みにくい理由を文体面から考察している。Ifor Evans 著 *English Literature* は【98843】として訳出されているが、1962年の改訂版では英語の表現力に対する Johnson の認識に触れた部分 (pp. 61-63) が1944年版に書き加えられている。彼の斬新にして模範的な語法を見極める感性が作品理解に不可欠とした鈴木知行の「Dr. Johnson の作品と *The Oxford English Dictionary*」【988Z1】は、彼の主要作品を読みながら OED に用例が採られているはずと読者が気付かねばならない語彙・語句のリストを作成している。以上の文献を縦覧して判る通り、我が国では Johnson の文体を否定しようとする論考はほとんど見受けられないようである。

Johnson の場合：主題別展望 その2

【13/】： *The Life of Richard Savage* (1744) および初期の伝記類

明治24年の『國民之友』掲載の内田魯庵による「雑筆」【89171】は *Savage* の冒頭から一部分を要約しているに過ぎない。明治27年の同『ジョンソン』【89471】でも *Savage* の「怠慢放縱の弊」に目が向くばかりで、Johnson の *Savage* については「躍動せしめたるの筆力」を誉めるに留まっている (pp. 113-117)。石田憲次の『ジョンソン博士とその群』【93311】も「ジョンソンの精妙細緻な観察」を多とはするものの、W. Raleigh の *Six Essays on Johnson* (1910) での説を紹介する程度で済ませている (pp. 199-204)。したがってこの領域の文献は〈第Ⅲ～Ⅳ期〉に集まってくることになる。

我が国で最初の纏まった *Savage* 紹介は恐らく福原麟太郎が『學鐙』に連載した「ジョンソン大博士」【96692】のうちの1967年2月に掲載された第6回であろう。内田の【89171】同様 *Savage* 冒頭に Johnson の生涯を覆った悲観的人生観を読み出し、「ストイシズムの思想に対する信仰」が両者に共通していたと見る。福原は *Savage* を読みながらその梗概を作成し、「この伝にはいろいろ歴史事実としての証明の方法に不足があるが、ジョンソンは自分のことを書くような気持ちで書いたであろう」(p. 56) との印象を書き添えている。1975年には中川忠訳『サヴェジ伝』【97511】と諏訪部仁訳『サヴェジ伝』【97551】とが相次いで登場し、「前々からこの詩人伝を翻訳してみたいと思っていた」福原も早速「イギリスの天一坊」【975X2】で両訳書の存在を紹介している。

その後は *Savage* 研究にエンジンが掛かったようで、芝垣茂は「Dr. Johnson の *Life of Savage*」

【97971】で Johnson が *Savage* を執筆するに至った背景と Johnson の *Savage* 像とを纏めている。長瀬久子による一連の論考、すなわち「*The Life of Richard Savage* における Johnson の位置」【98011】では *Savage* を反面教師に仕立てて読者を教化しようとした彼の moralist 的側面に注目し、続く「'Life of Savage' における Samuel Johnson」【981Z5】では、方便として道徳の仮面を被っていた文士 Johnson は自身の内部に抑圧された欲望を「*Savage* の像の中へと解き放ってやることによって、Johnson 本来の自己が、彼自身の中にあるよりも、はるかに徹底し、はるかに健やかに 'Life of Savage' の中に生きて」いられるとの解釈を示す。同じく「浄化作用としての創作」【98351】でも、*Savage* が Johnson の下意識を語るための虚構的存在であったとの見方が示されている。

江藤秀一による「S. ジョンソンと『サヴェジ伝』」【983Z4】は *Savage* を詩人 *Savage* への鎮魂の書、弁明の書、そして Johnson 流の「人生読本」と規定している。神山妙子の「サミュエル・ジョンソン「サベツヂ伝」おぼえ書」【986X1】は、欠点も含めて彼が *Savage* に寄せた理解と愛情や彼の伝記観を作品に読み出そうとする。こうした評価に加えて、松原慶子の「Samuel Johnson の *Life of Savage*」【98834】は、母性を求めて裏切られてきた Johnson のわだかまりが母親に疎外された *Savage* のうちに投影されて、「母性を喪失した女性に対する彼の個人的な感情」が *Savage* に噴出したと読み方が次第に深まっている。

また藤井哲の「*Encyclopaedia Britannica* 諸版に Richard *Savage* 像を読む」【99539】は、英語圏での *Savage* あるいは *Lives* 収録の“*Savage*”の受容のされ方を200年にわたって辿る作業でもあった。そして佐伯彰一の「伝統の「引力」」【9965c】は *Dr Johnson and Mr Savage* (1993) とその著者 Richard Holmes の紹介を含んでいる。従来は Johnson による *Savage* が彼についての標準的伝記とされてきたが、20世紀になって Clarence Tracy による *The Artificial Bastard* (1953) の登場が *Savage* 研究を息づかせ、テキストも Tracy が *The Poetical Works of Richard Savage* (1962) と *Samuel Johnson: Life of Savage* (1971) として刊行してくれたので研究態勢は整っており、*Savage* の出生の謎を除いてほぼ調べ尽されたかの観もある。そうしたなかでこの Holmes の書がジャーナリズムでも注目され、*Savage* と Johnson の交友が一般読者にも知られるようになった。しかし新たな発見を報告するレベルの書ではなかった。

その後も芝垣茂の“Johnson and *Savage* (1)~(3)”【99834, 99934, 00032】は、先ず *Savage* 作の詩行を *Dictionary* 初版(1755)と第4版(1773) ちゅうの用例で比較し、*London* (1738) にも *Savage* の姿を探ろうとする。(2)では *Savage* と Johnson の夜毎の徘徊の性格を考え、(3)では再起を図る *Savage* の意欲と彼の死とを再構成しながら Johnson による筆遣いをも考察する。そして原田範行の“An Imaginative Journey through an Alter Ego”【00331】は、Johnson が“his cool, objective narrative of dichotomy”の手法で *Savage* の内なる世界を記述していたことに注目し、本文の二元論的記述と一元論であるべきはずの Johnson の教訓的結論との折り合いの付け方にも考察を広げている。以上が大まかな *Savage* 研究の流れであった。

我が国では〈第Ⅱ期〉にあたる時期すなわち英米では1927年に“Browne”, 1929年に“Ascham”,

1936年に“Blake”, 1943年に“Boerhaave”, “Sarpi”および“Drake”がJohnsonの筆と同等されるなど、Johnson研究の基礎資料が整備されることになる1950年代に向けて初期伝記のテキストが着々揃い始めたが、英米でもそれら初期伝記が多くの研究者の視野に入ってきたのは更に30年後のことであった。すなわちJ. D. Fleemanが*Early Biographical Writings of Dr Johnson* (1973)としてJohnsonによる*Lives*以前の伝記作品のテキストを*Savage* (第2版, 1748)も含めて30人分も集めてくれて大変便利になった。しかしそれらのなかでこれまでに我が国で注目された初期伝記は下記の通り極く一部でしかない。関連する論考を発表順に並べてみよう。先ず小林章夫の「ジョンソンと中国」【97951】が、1736～1742年の著述で見せていたJohnsonの中国への関心を裏付ける例として*The Gentleman's Magazine* (以下GMと略)掲載の“Confucius [孔子]” (1742)の存在を教えている。また藤井哲は*Christian Morals* (1756)に添えられた伝記“Thomas Browne”を「サー・トマス・ブラウン伝(訳その1)～(2)」【98235, 98334】として訳出、GMに1754年に掲載された“Edward Cave”を「エドワード・ケイヴ伝(論考と翻訳)」【98433】として訳出、そして*The Works of Ascham* (1761)ちゅうの“Roger Ascham”を「ロジャー・アスカム伝(翻訳)」【98534】として訳出し、それぞれに注を添えている。

更に藤井哲は「“Life of the Earl of Roscommon”への加筆について」【990Z3】において、彼がGMに発表していた“Roscommon” (1748)を*Lives*に再録するに際して大幅な加筆を施したにもかかわらず作品として成功していなかったことを明らかにする。藤井はまた“Johnson's “Roscommon” in the 18th Century”【991X1】と「“Life of Roscommon”の位置付け」【99212】においても、彼の“Roscommon” (1748; 1779)が18世紀の諸Roscommon伝に及ぼした影響関係を図式化し、*Lives*所載のほうの“Roscommon” (1779)が圧倒的な影響力を後世に及ぼしていたことを明らかにしている。同じ手法により藤井は「Dr. Johnsonは“Life of Collins”をどう書き改めたか」【992Z4】で、*The Poetical Calendar*に掲載された“Collins” (1763)と*Lives*に加筆転載された“Collins” (1781)の本文を比較対照してから彼のCollins観を読み出し、更に「“Life of Collins”は18世紀のCollins伝にどのような影響を及ぼしたか」【99336】では、Johnsonの“Collins” (1781)の本文が多くをJames HamptonのCollins伝(1763)に依存していたこと、そして諸家による18世紀のCollins伝14点のなかでJohnson版の占めていた位置が何処にあったかを示している。

永嶋大典著『ジョンソンの死と信仰』【995X1】の第Ⅱ部「ジョンソンの信仰」(pp. 143-191)において、Johnsonが残した“Sarpi” (1738), “Boerhaave” (1739), “Drake” (1740-1741), “Barretier” (1744)の各伝記に永嶋が宗教的要素を読み出そうとしていることを付け加えておきたい (pp. 154-156)。以上に言及したJohnsonによる伝記のすべてが上述のFleeman (1973)に複製転載されているのは勿論のことである。

なお【13/】の領域に入るJohnsonの作品の邦訳は以下の通りである。【97511】【97551】【98235】【98334】【98433】【98534】【990Z3】

【14/】: *London* (1738), *The Vanity of Human Wishes* (1749), および劇場関連著作を除く韻文作品

〈第Ⅰ期〉に見られる関連文献では、彼の詩に対する部分的言及が散見される程度である。『文献目録』に記述された一番早い例は、1863年刊行の教科書を日本で明治15年に復刻した *Sanders' Union Fourth Reader* 【88281】であるが、彼の小品“The Vanity of Wealth”の前半14行が挙げられている (pp. 380-381)。この第四読本は明治24年にも別書肆から復刻【89131】されるなど、明治・大正を通して広く使用されたらしいが、確認されている限りではこの14行に和訳を添えた文献例は明治31年の井上歌郎著『和譯詳解英文傑作集』【898Y1】所収の「The Vanity of Wealth (富人の自負)」(pp. 13-14) しかない。

〈第Ⅰ期〉で取り上げられてきた彼の詩の別の一片は、*The Vanity of Human Wishes* (以下 *Vanity* と略記) の第191-222行で、W. Swinton が1880年に纏めた *Studies in English Literature* に掲載されていた。ちなみにこの32行については、T. S. Eliot が “Johnson's *London and The Vanity of Human Wishes*” (1930) で賞揚したまさに同じ部分であることを、しかも両者が Boswell の *Life* に拠って引用したものであることを後年になって福原麟太郎が発見し、「エリオット挿話と称して」【971Y7】のなかで語っている。続いて明治30年には増田藤之助の「スキントン英文學：Vanity of Military Ambition」【89791】がやはりこの32行分に施注しているし、中村可雄も明治31年に「勇士の夢」【89831】として和訳している。齋藤秀三郎が F. Brinkley と共に明治44年に纏めた *The World's English Readers No.5* 【911Z2】もやはり同一箇所を収録している。

〈第Ⅰ期〉でただ1件ながら、『旧約聖書』の「箴言」第6章6～11節を Johnson が書き直した短詩が「パラフレイズの例」【91051】として紹介されている。そして〈第Ⅱ期〉になってからも、【91051】が引用した短詩に加えて【9/】で触れた Johnson 作の戯詩4行が Wordsworth の “Poetry and Poetic Diction” 【92932】に引用されている。いっぽう「文壇消息」【93141】は、*Johnson: A Poem. The Vanity of Human Wishes* (1930) に T. S. Eliot が寄せた上述の序文について早々と報じている。そして *Vanity* に対する反応としては、石田憲次著『ジョンソン博士とその群』【93311】の第2章6節 (pp. 130-152) が、*Vanity* が気迫で *London* に優るとの評価を示している。

〈第Ⅲ期〉に入ると、矢野禾積が研究社英文學叢書版 *Essays by T.S. Eliot* 【95181】で先の Eliot による序文に施注している。この Eliot (1930) に刺激されてのことであろうか、我が国では1950年代になって Johnson の長詩を取り上げた論考の登場を見受けようになるが、当時はまだ Johnson の詩作品の底本が整備されていなかった。すなわち D. N. Smith & E. L. McAdam 編 *The Poems of Samuel Johnson* (1941) は刊行された直後に重要資料の発見が相次いだために陳腐化していたから、この領域での研究が本格化するのには Yale 版(1964)と Fleeman 版(1971)によりテキストが出揃うまで待たねばならなかった (但し1974年の Smith による *Poems* の第2版には本文校訂上の欠陥が指摘されている)。

我が国での長詩研究に先鞭をつけたのは赤嶺やよいの「*The Vanity of Human Wishes* と *London*」【955X2】および「*London*」【955Zc】であつたらう。前者は出版時の *Vanity* の評判が *London* 程で

なかった要因を考察し今日の *Vanity* 偏重を改めるよう求めており、後者では模倣詩 *London* を本歌である Juvenal の “The Third Satire” と対照させている。なお *London* については後に永嶋大典が「Johnson の *London*」【96231】で、Juvenal を原作にした Oldham, Dryden, Pope による英訳詩とも比較しながら Johnson の文学的特質を考察することになる。Tomarken (1994) は1950年代に模倣詩における Johnson の詩法に研究者の関心が高まったことを教えているが、我が国での研究も英米にあまり遅れることなく歩調を合わせているかの観がある。やや私事に渡るが、筆者も修士論文 “Samuel Johnson's Poetics: Concept and Practice of ‘Imitation’” (1977) を纏めるに際して、この頃の研究に学ぶものが多くあったことを思い出す。

酒井幸三の「詩人としての Johnson」【95631】は彼の詩作品を読むことで彼の心境の変化を考察する。つまり詩人として出発した Johnson の *London* 発表以降の「追いつめられた十年の人生経験が…古典主義的な態度へと彼を導いていった」が故に、*Vanity* 執筆を最後に彼は詩作から足を洗い学究的批評を志向し始めたとの見解である。村上至孝の「詩人 Samuel Johnson」【96142】は、40歳で詩作を断念した彼の古典主義的な詩は内容が普遍的である程に「平凡なるがゆえに誰の心にも当然受け容れられるべき」であるとして、その再評価を訴えている。後に村上は「ジョンソン『ロンドン』と『人の望みの空しさ』」【97381】において、Johnson は自らの「人一倍活発な想像力と強烈な愛情」を自覚して、「古代ギリシア、ローマ文学以来の流れに沿ったイギリス文学の本道を守るため」に「自ら進んで詩人の素質を抑え、批評家の道を選」んだのであろうとの観測を示している。

秋山肇の「詩人としての Dr. Johnson」【96162】よれば、彼にとっての詩的衝動は芸術的というよりは「人間の生と死に関する内省」という倫理的なもので、それは *London* と *Vanity* において吐露されており、最晩年の “On the Death of Dr Robert Levet” (1782) において昇華されることになった由である。故にこれらの詩作品を彼の宗教詩の延長線上に据えようとするとき、岸英朗が「S. ジョンソンにおける詩と宗教の問題」【962Z3】で示していた、‘impersonal’ な詩的情熱と ‘personal’ な宗教的情熱との融和がラテン語以外の詩では困難と感じていた Johnson が *Vanity* という「諷刺詩の領域に、宗教性を持ちこんで、諷刺詩の倫理性にこれを合流」させたとの指摘も想起されてくる。また中川誠も「Samuel Johnson の Juvenal Imitation」【97191】において、諷刺詩たろうとした *London* と *Vanity* は手法としては ‘imitation’ 詩でありながら、そこに込められたキリスト教的な愛を生じさせる「堪え忍ぶことのできる精神」への自覚は、Juvenal 自体にはもちろん Juvenal に取材した Dryden や Pope にもない Johnson だけの独自性であるとしている。

表現面から Johnson の詩を査定した平善介の「サミュエル・ジョンソンの詩」【971X1】によると、英詩本来の「平明なスタイル」は Johnson 流の「個別的な感情の表現が抑制され」がちな詩作品においてこそ受け継がれているようだ。また鈴木善三も「『人間の願望の空しさ』：ポーブに倣いて」【97561】で、*Vanity* が *An Essay on Man* (1733-1734) の文体を模倣しながら同時に思想的影響も Pope から受けていたことを指摘する。

この頃 Johnson の短詩が泉谷寛により数篇邦訳されている。すなわち「即興短詩」【97652】、

「成人頌歌」および「スレール夫人へ：三十五才の誕生を祝して」【97792】で、岡山の同人誌に掲載されたものであった。また泉谷の「ジョンソンの「ステラ詩」をめぐって」【98533】は、彼の初期の純愛抒情詩に「詩人・ジョンソンの魂が吐露」されていると見た論考であった。これらに上述の【91051】と【92932】を加え、高橋源次著 *Samuel Johnson* 【97841】所収の“Miscellaneous Poems (“Know Yourself”, “Stella Poems”, “On the Death of Mr Robert Levet”, etc.) (pp. 132-146) における作品紹介、そして後述する【98923】と【99822】【001&1】とを併せたものが、*London* と *Vanity* を除いた Johnson による詩作品を扱った我が国での文献の総体ということになる。ちなみに *London* と *Vanity* の邦訳については、この頃に「模倣詩と翻訳」【977Z2】で Johnson の翻訳観と ‘imitation’ 手法とを再確認していた芝垣茂が、後に『ジョンソン博士の詩』【98521】において実現させることになる。

上述した高橋の *Samuel Johnson* 【97841】は、“*London, 1738*” (pp. 1-8) と “*The Vanity of Human Wishes, 1749*” (pp. 25-45) のふたつの章で両作品の梗概を示し、両作品に Providence の要素を考察している。また中川忠の「*London* 断章」【98133】は、Johnson が身に沁みた体験を語って読む者の心に強く訴える第158-181行を読み解いており、志賀文枝も『「ロンドン」の注釈の試み』で第1-30行に注釈と翻訳を添えている。いっぽう斎藤美洲は「十八世紀英詩の思い出」【98172】のなかで、「どうも思った以上に、この『人の願望の空しさ』は、『ロンドン』とともに大名作であるらしい」との感慨を洩らしているところを見ると、石田【93311】や赤嶺【955X2】いらい両作品の優劣判定はなかなか決着がつきにくいのであろう。芝垣茂にしても“Dr. Johnson's Poetry (1), (2)”

【98332, 98431】で時代背景と社会情勢を踏まえながら *London* を読み、*Vanity* の無常観には *London* 以上の深みと重み、Juvenal にはない同情が備わっていると評している。あるいは中原章雄の「T. S. エリオットの諷刺詩『ロンドン』論」【98733】は、*On Poetry and Poets* (1957) 所収の1944年の講演のなかでの手厳しい *London* 評価は Eliot が Boswell に惑わされたからであろうと推測している。

〈第Ⅳ期〉になってからの文献としては、先ず中川忠著『詩神との戯れ』【98922】が、先の【98133】を再録し、*Vanity* の第73-93行と第135-156行を読み解いた「*The Vanity of Human Wishes* におけるイメージ」も併載しているが、「比較的日本人になじみの深い作品を取り上げ、主にその表現面の技巧に注目しつつ、その特徴、面白さを味読する楽しさ」を語るための注釈を意図してのことであった。面白さといえば、藤野紀男の「ジョンソン博士のナンセンス詩」【98923】によると、Johnson が残したナンセンス詩は *Yale Johnson* 第Ⅵ巻 *Poems* (1964) 所載の2篇 (pp. 269&296) の存在が知られていて、その後者 “If the man who turneps cries...” は20世紀前半まで市販のマザーグース作品集に収録されていたそうである。平群秀信の「Samuel Johnson の脚韻について」【99621】は、行末韻の踏み方から Johnson の発音を推定しようとした調査報告というやや英語学的感覚の論考で、【14/】の領域では珍しい文献。山中光義の「サミュエル・ジョンソンのパロディをめぐって」【99822】は、*Yale* 版 *Poems* 所載の Johnson 作のパロディ詩3首 (pp. 268-270) のうち2首についてそれらのモデルとの照応を示して「バラッドをめぐるジョンソンのアンビヴァレントな気持」

を考察したもので、「生成期の18世紀バラッド詩の模倣と逸脱をめぐるわが国最初の本格的論考」として山中により英語化され、*The Twilight of the British Literary Ballad in the Eighteenth Century* 【001&1】の第2章に組み入れられている。

改まったところでは、圓月勝博の「ジョンソンの『人間の願望の空しさ』におけるジャンルの問題」【98932】が、「原作者の権威と模倣作者の自己表現…の葛藤」が認められる *Vanity* において「模倣作者の主観性がどのように主題化されているかを分析」している。久末源治も「*The Vanity of Human Wishes*」【989Z2】において、「感性と思想が、一つの首尾一貫した表現形式のもとに」提示されたとする *Vanity* に対して Juvenal にはない Johnson の肯定的側面の存在を見ている。

20世紀の最後を飾ったのが原田範行による3篇の論考で、最初は“Johnson's Satiric Mode in *The Vanity of Human Wishes*”【99711】で、諷刺対象や主題の革新的な取り上げ方に彼の諷刺家としての姿勢と真意を探りながら *Vanity* の再評価を試みたものであった。そして“Creative Mind in the Making”【997Z3】と“Creativity in Tradition”【99835】が続くが、その前者では *London* の諷刺詩としての問題点を時代性や伝記的背景にも照らしながら再吟味し、後者では *London* に見られる手法的欠陥の原因を伝統的な諷刺詩の手法と彼の意図との間に生じた不調和に求めている。

なお【14/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【91051】【97652】【97792】【98521】

【15/】: Irene (1749) 等の劇場関連著作

1749年冬に初演され9夜しか続かず再演もされなかった Johnson による唯一の悲劇 *Irene* を研究しようとの気運は我が国ではほとんど高まらなかったようだ。邦訳もない。

〈第Ⅰ期〉では、明治27年に内田魯庵が『ジョンソン』【89471】において「全く面白からざる所謂俗受け以下の者」と評しながら *Irene* を紹介 (pp. 118-121) したのが、恐らく最初の纏まった文章であろう。それでも Boswell を利用しながら最低限度の情報は示されている。

〈第Ⅱ期〉での石田憲次著『ジョンソン博士とその群』【93311】が、Richard Knolles 著 *The General Historie of the Turkes* (1604) における美女 *Irene* の原話に言及し、もう一人の美女 *Aspasia* を追加した Johnson の「偉大なる道徳家としての特長」に言及するが、「感銘は至つて薄弱」と判定している。そのために、本書で *Rasselas* に費やされた11頁に比べて *Irene* では4頁 (pp. 149-152) の扱いであった。石田と鈴木による『ジョンソン』【93431】でも、*Irene* 評と思しき箇所は「劇そのものが、もともと、あまりいい出来ではなくて、ギャリックの妙技を以てしても、到底舞臺上の効果を期待することは出来なかつた…」(pp. 16-17) で済ませるなど、従来から押し並べてお座なりな取り上げ様であった。

〈第Ⅲ期〉になると、福原麟太郎が『學鐙』に連載した「ジョンソン大博士」【96692】のうち1967年7月に掲載された「(10) ギャリック登場」が、*Life* から *Irene* 上演の背景を紹介し、それが9日の興行で終わったものの著作権料も加わって £295-17s という大金が Johnson に転がり込んだことを教える。同じく8月掲載の「(11) 劇詩『アイリーニ』」では、「いろいろのジョンソン文献に『アイリーニ』の名はしばしば出て、内容梗概を書いたものが一つもみつからない」(p. 48) という

理由から相当に詳しい梗概を述べ、Aspasia と Irene という「二人の美女が代表するテーマは…宗教的人間と政治的人間」(p. 46) という Johnson にとっては生涯に及ぶ問題の反映であったことを教えている。そして高橋源次著 *Samuel Johnson* 【97841】 ちゅうの “Love or Power” (pp. 46-85) になると、この Irene の梗概や Knolles との比較の他に、物語の性格と主人公の人格を示す13の key words のための concordance を添えている。

〈第Ⅳ期〉には、原田範行が “From Verse to Prose” 【000&1】 で、Irene の第一草稿と、第二草稿に相当する “Rough Notes” と、刊行された Dodsley 版とを照合しながら、1736～1749年における Irene 推敲の跡を辿り、その経験が彼に散文批評家としての成長をもたらせたとの解釈を示す。また住本規子の「Irene に見るページとステージ」【00236】は、Shakespeare 劇での従来幕・場割りに違和感を覚えていた彼が入退場指示のない古典劇書式を Irene で採用してみたが、それではページを繰ってステージを思い描こうとする読者に負担を掛けることに Johnson が気付いたのではないかと考察する。

Irene の頼れる学術版テキストは未だに Yale 版 *Poems* (1964) だけであろう (Fleemen 版は抄録)。論考はというと英米でも数えるほどしかなく、B. H. Bronson の “Johnson's ‘Irene’: Variations on a Tragic Theme” (1944) が相変わらず基本文献とされている。そうした状況に照らせば、日本は上述の業績でそれなりに健闘してきたことになるであろう。Tomarken (1994) は、作品の様式的特徴と当時の舞台演技との相関性の分析を今後に方向付けているが、我が国では作品に触れようとする機運そのものを盛り上げることが取り敢えずの課題であろう。Shakespeare のみならずマイナーな劇作家を消化してきた日本流の研究意欲がここでも発揮されることを期待したい。

【16/】: *The Rambler* (1750-1752), *The Adventurer* (1752-1754), *The Idler* (1758-1760) 等の随筆

Johnson が執筆したとされる *Rambler* (定冠詞を略す) 203回分、*Adventurer* 29回分、*Idler* 92回分の合計324本の随筆が我が国で受容されてきた経過を4期に分けて眺めてみると、『文献目録』に記載されている限りでは、翻訳論たる *Idler* 第68, 69号に触れた明治24年の「翻譯すべき外國文學」【891Y3】をもって嚆矢とする。〈第Ⅰ期〉に属する関連文献は7件を数えるが、どれも随筆の何れかの号を単発的に取り上げて全部または一部の原文か和訳を掲載したものでしかない。〈第Ⅰ期〉で取り上げられた号は、*Rambler* から第5, 40, 64, 65, 102, 137号、*Idler* から第23, 47, 68, 69, 99号で、*Adventurer* からはゼロであった。そのうち *Rambler* 第102号の和訳が「人生の航海」として【89521】および【90211】に登場している。

〈第Ⅱ期〉に入っても状況は似たり寄ったりで、研究社英文学叢書版 *English Essays* 【92541】は岡倉由三郎の注釈で *Rambler* 第47, 117号と *Idler* 第46号を収めている。*Idler* 第14号を対訳にした「On Wasting Time」【926Z1】も見られる。石田憲次著『ジョンソン博士とその群』【93311】ちゅうの「ラムブラー」, 「アイドラー」その他 (pp. 164-177) は Johnson の随筆を論じた最初の文献と見受けられるが、石田によると随筆には moral purpose が濃厚で「人の望の空しさ」を多く唱えているが、「坐談に見るやうな色彩が缺けて」いて Addison に及ぶところがないといったふう

で、消極的評価しか出てこない。続く平田禿木の『エッセイ』【93381】は更に手厳しく、*Rambler* を書く Johnson について「斯かる漫文へ筆を染めるのも幾分好ましからぬといふ態度も見え、「藝術の高峰」を下つて、心ならずも俗衆と伍するのだといふ風があった」と僻目がちな観察になっている (pp. 16-18)。

『英國随筆史』【940X1】で批評家気取りの Dick Minim が登場する *Idler* のほうを *Rambler* 以上に誉めていた福原麟太郎も、後年の「随筆ばやり」【97222】でも「実際ジョンソンの随筆で面白いと思ったのは「ディック・ミニム」という文壇評論家出世物語ひとつくらいのものでした」と再度漏らしているように、Johnson の随筆には幾分距離を感じていたようである。結局福原は *Idler* を数篇訳出したものの *Rambler* には手を出さなかった。

その *Idler* や *Adventurer* についてはその文体的な軽さから慌ただしく執筆された随筆と従来は考えられてきた。また19世紀末までの *Rambler* の人気のなさに対しては、Tomerken (1994) は *Samuel Johnson* (1878) から引用して "...[Johnson] rather abuses the moralist's privilege of being commonplace" と Leslie Stephen に巧いことを言わせている。彼の随筆作品の復権が唱えられたのは W. Raleigh の *Six Essays on Johnson* (1910) になってからであり、*Rambler* に Johnson 当時の社会的諸相を再現しようとした O. F. Christie の *Johnson the Essayist* (1924) が最初の研究書であった。そして B. Dobrée の *English Essayists* (1946) になって彼の随筆を文学的に読もうという姿勢がぼつぼつされるようになり、英米で学術的研究が発表され出したのは1950年代以降になってからのことであった。

〈第三期〉は *Rambler* と *Idler* の訳注で始まる、すなわち福原麟太郎による「On Wasting Time」【94431】と「Dick Minim the Critic (1), (2)」【94711】であるが、前者は自他に対し時間の篡奪者とならぬよう警告した *Idler* 第14号、後者は似非文芸批評家の横行を Dick に仮託して諷刺した *Idler* 第60, 61号に訳と注を添えたもの。*Rambler* のほうでは、この頃に朱牟田夏雄が「Unreasonable Fears of Pedantry」【948Z1】で第173号に、中西信太郎が「The Advantages of Living in a Garret」【95511】で第117号に訳と注を添えている。

Johnson の随筆を主題に据えた我が国で最初の論文が恐らく安田哲夫の「「ランブラー」, 「アイドラー」とサミエル・ジョンソン」【957Z1】であったが、そこでは *Spectator* とも比較するなどして「ジョンソンの偉さは誰の説にも左右されず自分の信ずるままを書き、職業的文人の生活を確立した「ランブラー」と「アイドラー」に現れている」と前向きな評価が示されている。同じ頃、高田峰尾の“Mr Rambler Advises”【959Z2】はさらに焦点を絞り込んで *Rambler* に Johnson の女性観を読み出そうとしている。続いて渋谷武也が「ドクター・ジョンソンの道徳性」【961Z3】で彼の道徳観に注目しながら *Rambler* を読んでから、従来 *Rambler* を近寄り難くさせてきた ‘Johnsonese’ の文体は広く思考する者の言葉であったとの観測を添えている。

1963年は *Yale Johnson* 第Ⅱ巻 *The Idler and The Adventurer* が刊行された年である。従来テキストの普及という観点から最も必要とされていたのが、Johnson の随筆の学術版であったが、取り敢えず *Idler* と本文の同定が困難視されていた *Adventurer* の登場で底本上の問題が解決されたことに

なる。日本でも Johnson の随筆がたまたま11本纏めて翻訳刊行されたのもこの1963年であった。すなわち『世界人生論全集5』【96351】が、*Rambler* 第59, 60, 161号、*Adventurer* 第115号、*Idler* 第31, 35, 40, 97号を清水阿や訳で、そして *Idler* 第14, 60, 61号を福原麟太郎による既訳で収録していた。それまで黙殺され続けてきた *Adventurer* がこのとき始めて邦訳されたことになる。ちなみに第115号で Johnson が発した、誰もが資格も能力もなく作家たろうとし女性までもが「ペンを駆使するアマゾン」たろうとする前代未聞の知的病弊が蔓延しているとの警告は、後に宮崎芳三と水越久哉による調査の出発点となり、『イギリス文学者論』【99131】という成果を産み出すことになる。

中原章雄編注の *Johnson's Essays* 【96541】は恐らく *Yale Johnson* 第Ⅱ巻による直接・直近の成果であろう。本文の同定がやかかいであったため従来出番がほとんどなかった *Adventurer* であったが、今回は「*The Idler* から12篇、*The Adventurer* から3篇を収めた。随筆は専門的な文学論を避け、できるだけ variety を考慮して、真面目なもの、小説風のもの、諷刺的なものなど様々な型を選んである」という触込みの教科書版としての登場であった。もっとも Johnson の随筆が大学教養課程用教科書として出版されたことのほうに今では隔世の感を禁じ得ないのであるが。

鈴木善三は C. McIntosh 著 *The Choice of Life* (1973) の書評【974X3】で、Johnson の 'periodical-essay fiction' ちゅうに見られる「幸福の幻影にまどわされて人生の道を誤る」という筋立ては彼の反ロマンス的態度の反映に他ならないとの指摘に注目している。しかし日本で Johnson の随筆を fiction 作品として読もうとする姿勢はその後10年ほど経ってから顕在化し始めたようである。

Yale Johnson 第Ⅲ～Ⅴ巻 *The Rambler* が刊行されたのは1969年で、大多数の研究者にとって *Rambler* 全号のテキストを初めて眼前に出来るようになった年なのであるが、その後ほつほつ *Rambler* を取り上げた論考が発表され始めている。例えば、竹内公基の「Samuel Johnson と *The Rambler*」【97631】は *Rambler* を「弱味だらけの著者の、それから脱出しようとするあくなき苦闘の所産」と評している。あるいは渡辺邦男の「『ラムブラー』の加筆について」【98218】は、その後合本再刊された *Rambler* の第2版(1752)と第4版(1756)に表現上の改訂を数え上げて分類し、なかには「見解あるいは議論の変更をもたらす」ほどの加筆も含まれていたことを報告する。渡辺は「ジョンソンの『ラムブラー』改訂」【983Z7】でも第83, 141号に対する加筆の効果を検証している。このように *Rambler* は内容上の解釈だけでなく文体上の分析でも対象にされるなどしており、今後とも多くの可能性を展開させてくれる作品群といえそうである。

泉谷寛による「ジョンソンの中の淑女たち」【983Z2】および「ジョンソンの中の紳士たち」【983Z3】は、Johnson の随筆に描かれた125名の女性と180名の男性を吟味して、読者を幸福な人生に善導しようとする彼の意図を読み、彼が創造的 imagination の持ち主であったことも示している。前者は【959Z2】とも似た着眼を示してはいるが、泉谷は *Idler* や *Adventurer* にも調査対象を広げている。泉谷は更に「ジョンソンの東方物語」【986Z3】において、そして【974X3】で McIntosh が既に示唆していたように、*Rambler* 第44, 67, 102号や *Idler* 第99号を物語作品として読み、それらの梗概や特徴を紹介している。泉谷による Johnson の随筆との格闘は翌年と翌々にも成果を産

み出し、彼の纏めた *Characters* 【987X1】は Johnson 筆の satiric essays に描かれた14名の登場人物に「モラリスト・ジョンソンの温かい人生態度」を読み出そうとした教科書版であった。彼の「ジャーナリストの義務について」【987Z2】は“Of the Duty of a Journalist” (1758) と *Rambler* 第145号を邦訳したもの。同じく泉谷による編書 *Moral Essays: Dream, Hope and Life* 【98811】も、「人間のモラルの追求と、それに対して苦悩し、熟慮する彼の誠実真摯な姿勢」が書き込まれたところの *Rambler* 第2, 18, 32, 60, 67, 102, 196号, *Adventurer* 第111, 120号, *Idler* 第27, 31, 94号を収録した教科書版であった。

江藤秀一も、先ず *Adventurer* に注目して「ジョンソン博士と『アドヴェンチャー』誌」【98562】において、積極的に生きよ、物欲に溺れるな、世の為人の為に生きよ、といった前向きな人生訓を読み出してから、次に「『ラムブラー』の英語」【98621】で、*Rambler* 第14号が読みにくい理由、すなわち小川和夫が「イギリス・ジャーナリズムの発展」【973Y2】で「大だんびらを振りかざし…」と喩えた彼の文体に考察を加えている。そうした文体で書かれた *Rambler* が想定した読者像が何処にあったかを、江藤は「十八世紀の読者層」【98823】において、登場人物たちの職業や身分を手掛りに迫ろうとする。同じく「ジョンソン博士と『アイドラー』」【98925】は、重い文体の *Rambler* と対比させることで、身近な話題で読者に人生を説こうとする姿勢を *Idler* に見出すことになる。

そろそろ〈第IV期〉に入ってきて、泉谷寛は『テネリフの隠者・セオドーの夢』【99151】のなかで娼婦 Misella が登場する *Rambler* 第170, 171号を訳出しており、後年鈴木実佳も同じ号に注目して「「不運な女」と「落ちた女」」【004Y2】で Johnson による創作の物語に18世紀中葉の売春婦像を読み出している。更に泉谷は「ジョンソンの〈夢〉物語」【991Z2】において、Johnson が随筆類でよく取り上げていた夢物語についても、「主人公たちの見る夢は…新たな知恵を生む自己確認へと展開されている…地より生じ、天より下る正夢である」との解釈を示している。ここに至って彼の随筆作品を創作物語として読む姿勢は我が国でもすっかり定着したように思われる。

いっぽう原田範行の「アディソン、スティーヴル、ケイヴ、ジョンソン」【99091】は、江藤の【98823】にその兆しが現れてはいたが、定期刊行物が想定した「作者と読者」像を考察し、*Rambler* によって想定された読者が「作家を取り巻く社会の総体」を構成していたことを指摘している。

1992年以降この領域に分類される文献としては江藤秀一によるものが目立っている。すなわち *Rambler*, *Adventurer*, *Idler* に文学論的記事を辿った「ジョンソン博士の文学観」【99221】があった。そして Steven Lynn の *Samuel Johnson after Deconstruction* (1992) を構成面でディコンストラクション理論も援用しながら *Rambler* を検討し信仰の大切さを伝えるという思想で一貫した書と評した江藤の「『ランブラー』評価への新たな挑戦」【992Y1】が、海外での恐らく最新の研究状況を窺わせてくれているのであろう。その他にも *Idler* に Johnson の前向きな人生観を読んだ「ユーモア作家のジョンソン博士」【99423】、そして *Adventurer* における Johnson の前向きな幸福論が彼の人生観を理解するための重要な手掛かりになるとした“Trio: The *Adventurer*” 【000X1】が江藤により書かれた。

なお【16/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【89521】【90211】【91261】

【926Z1】【94431】【94711】【948Z1】【95381】【95511】【96351】【96733】【96981】【987Z2】【99151】

【17/】：*A Dictionary of the English Language* (1755) および Johnson の言語学者としての側面

この領域では英語学研究者の側からの貢献が大きいので、言及しておきたい文献数が100件近くに昇っているが、そのうち〈第Ⅰ～Ⅱ期〉に属するものは5件程度で、あとはすべて〈第Ⅲ～Ⅳ期〉に固まっている。これだけの数の文献を機械的に時系列で並べてみるだけでは、多様な論点が目まぐるしく出入りするばかりで、慌ただしく散漫な記述の羅列になってしまう。そこで【17/】では文献を内容別に4グループに分類することにした。すなわち主として辞書史的視野で書かれたものを【17/1】としてみる。英文法・英語史・語源の知見を含む Johnson の英語観の領域を【17/2】、編纂方針・引用・記述法に関わる視点での文献を【17/3】、その他の関心によるもの【17/4】といった分け方で関連文献を以下に並べてみたい。なお Clifford & Greene (1970) にはこうした下位区分が設けられていない。また【17/】での邦訳は伊東只正による「ジョンソンの『英語辞典』序言(翻訳)」【99333】のみであった。

【17/1】における最初は〈第Ⅲ期〉からで、無名氏が「Dictionary Johnson」【95561】で、Johnson の *Dictionary* 刊行200年を期に J. H. Sledd & G. J. Kolb 著 *Dr. Johnson's Dictionary* (1955) が出版されたことを逸早く報じていた。そしてこの1955年が我が国における *Dictionary* 研究の元年であった。すなわち同年暮れには渡部昇一が『『ジョンソン博士の辞書』】【955Ze】で、「今まではジョンソン以前の辞書とジョンソンのそれとの差を大きく見過ぎて、辞書の伝統の連続性が軽視されて来たということ」をこの書が主張していると書評している。

Sledd-Kolb (1955) が唱えた伝統の連続性に一連の論文をもって反論したのが永嶋大典であった。まず「Johnson の英語に対する態度」【96232】では、言語アカデミー思想を継いで規範家たろうとした Johnson としては、百科事典的傾向を強めていた「Cawdrey から Bailey にいたる English Lexicographical Tradition」を批判するつもりで *Dictionary* を編纂していたとして、Johnson の辞書史上の貢献を過小に評価していた De W. T. Starnes & G. E. Noyes の *The English Dictionary from Cawdrey to Johnson, 1604-1755* (1946) をも含めて批判の対象にしている。続く“Johnson's *Dictionary* Reconsidered”【96481】でも辞書史における *Dictionary* の正しい位置付けを求めている。そして“An Historical Assessment of Johnson's *Dictionary* (I), (II)”【966X2, 96832】では、Johnson は百科事典的英語辞典の伝統には与せず、*Dictionary* 編纂にあたっては *Dictionnaire de l'Académie française* にその手本を求めるなどして言語学的姿勢を貫いたために OED に繋がる伝統を打ち立てることになったと主張する。20世紀以降の辞書史研究を視野に入れながらそうした主張を提示したのが“Backgrounds of Dr. Johnson's *Dictionary*”【96833】で、特にその第Ⅲ章は Johnson に言語学的姿勢を採らせることになった‘the idea of an English academy’に注目している。

林哲郎の *The Theory of English Lexicography 1530-1791* 【978&1】は、16～18世紀の諸辞典に編纂理論を読み出し、その実践振りの検証から辞書編纂の歴史を跡付けた研究であった。続く小島義

郎も「ジョンソンの辞書とその前後」【98342】において、*Dictionary* 初版(1755)と N. Bailey の *Dictionarium Britannicum* 第2版(1736)を数値的に比較して、「ジョンソンはたしかにベイレーを参考にしてはいるが、いわゆる種本と言われるような使い方はしておらず、いわば反面教師的」としたであろうとの推定に至る。

永嶋大典の『ジョンソンの『英語辞典』:その歴史的意義』【98371】は、「Johnson の辞典をイギリスの英語辞典の伝統と大陸由来の「言語アカデミー思想」の交流点に置き、Johnson の保守性と革新性を明らかに」し、国内の英語関係者に広くアピールすべく既発表の論考を踏まえて日本語にして著述された書物である。そして言語アカデミー思想を絡めた *Dictionary* の研究が未だ本格化していないとする三好楠二郎の「言語アカデミー思潮概観」【987X3】は、イタリアとフランスでのアカデミー思潮、およびその英国への流入に注目している。林哲郎も『英語学の歴史』【98841】の第4章「英語純化と英国アカデミー論」(pp. 61-63)でアカデミーに関心を抱いた Johnson を含む6人を挙げ、その第5章「英国アカデミー論の終結」(pp. 79-80)では彼の設立反対論が Sheridan や Priestley の同調を招いたと指摘している。

その約10年後すなわち〈第4期〉になって、三好は「S. Johnson と大陸の言語アカデミー」【997Z2】において、Johnson の *Dictionary* がどのように *Vocabolario degli Accademici della Crusca* の初版(1612)と *Dictionnaire de l'Académie française* の第3版(1740)を取り込んだかを頻用動詞項目に調査した結果を報告している。

早川勇の「ジョンソン英語辞書の収録語彙」【99536】は、*Dictionary* の延長線上に H. Picard の *A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages* (1857)を捉え、さらに本邦初の本格的英和辞典である『英和对訳袖珍辞書』(1862)までの連続性を示唆している。いっぽう「新たな形で英語辞書史を書いてみたいと思っていた」小島義郎は、『英語辞書の変遷』【99964】ちゅうの「英語辞書の躍進」(pp. 116-133)において、「アカデミー運動」や「ベイリーの *Dictionarium* と『ジョンソン辞典』の語彙の比較」といった話題で Johnson の *Dictionary* を語り、「『ジョンソン辞典』の影響」にも触れている。更に同書の「トッドによる『ジョンソン辞典』の改訂」(pp. 201-205)は、慎重で思慮深いことで評判の H. J. Todd による改訂版(1818)を解説している。再び早川勇であるが、『辞書編纂のダイナミズム』【00131】所収の「19世紀イギリス辞書界と英和辞典」(pp. 155-211)は、Bailey (1730)と Johnson での収録語彙の比較から OED に至るまでの辞書史を略述し、ハイ・ブラウな「ジョンソン辞書の版歴」(p. 167)と Johnson の簡約版をも含めた「ミドル・ブラウ辞書の版歴」(p. 169)とをリスト化している。

菅原光穂の「リチャードソンのジョンソン評」【00273】は、C. Richardson が *A New Dictionary of the English Language* (1836-1837)の“Preface”でぶちまけた「偏狂な」Johnson 批判を「直接話法的文体」で紹介していて、反 Johnson 勢力の気配を感じさせてくれる。しかしそうした事例はむしろ少なく、例えば Johnson への反撥を顕にしていた N. Webster の *An American Dictionary of the English Language* (1828)にしても Johnson (1755)に依存していたという実態を永嶋大典が『現代人のための英語の常識百科』【98813】所収の「英語辞書の歴史」(pp. 633-639)で紹介して

いるに過ぎない。ちなみに早川勇著『ウェブスター辞書の系譜』【004Z2】によれば、「ウェブスターの簡約英語辞典はジョンソンの辞書の足元にも及ばなかった」(p. 6) そうである。

【17/2】の早い文献例としては〈第Ⅱ期〉に見られ、金子健二が『英語發達史』【93241】で、Johnsonは英語の墮落を防ごうとしたが言語を人為的に統制する困難さを思い知らされることになったと語っている(pp. 782-783)。同様に石田憲次も『ジョンソン博士とその群』【93311】の第2章9節(pp. 177-193)で、彼が編纂作業で味わった幻滅を“Preface”から読み出している。その後〈第Ⅲ期〉になって *Dictionary* 刊行200年にあたる1955年に石橋幸太郎が *Dictionary* の“Preface”と“Grammar”読んで「Dr. Johnsonの英語観」【955Z3】を執筆している。また最良の状態での英語の固定を彼が断念した時期を絞り込むべく藤井哲は「*Rambler* 及び *Adventurer* から概観した Samuel Johnsonの英語観の変遷」【97833】で彼の1747~1755年の著述を読んでいる。

Johnsonが編纂作業を通して英語固定の非現実性を悟り歴史主義に傾いたことを“Backgrounds of Dr. Johnson's *Dictionary*”【96833】の第4章(pp. 146-152)で語った永嶋大典は、*Dictionary* 前付の“Grammar”に注目し、“Mutual Debt Between Johnson and Lowth”【96831】でにおいて R. Lowth 著 *A Short Introduction to English Grammar* (1762) が Johnson による後年の *Dictionary* 改訂(1773年の第4版や1785年の第6版)に影響したか否かを検討する。さらに永嶋は“Johnson as an English Grammarian”【96931】で、*Dictionary* 初版に触発されて英語史上初の語法書を著した Lowth (1762) と Lowth を“Grammar”に取り入れた *Dictionary* 第6版(1785)との相互的影響の分析が Johnson の英文法史的貢献を評価するのに有益と考察する。その後渡部昇一が「英文法の成立(11)」【97542】前半の“Dr. Johnsonと9品詞の確立”で、Johnsonが伝統的なラテン語文法の枠内に英文法を組み込もうとしたことを指摘しており、同じく渡部著『英語学史』【975Y1】ちゅうの「Dr. Samuel Johnson」の節(pp. 356-357)は、彼の“Grammar”が1760年代以降に8品詞という枠組みを定着させたと説いている。いっぽう林哲郎著『英語学史論考』【978X2】の「文法思想とサムエル・ジョンソンの文法観」(pp. 149-161)は“Grammar”の意義を(i)文法学、(ii)文法性、(iii)文法書の視点から検討し、(ii)こそが「ジョンソンが自ら発見した‘grammar’の新しい意味である」と結論している。同じく林の *The Theory of English Lexicography 1530-1791* 【978&1】には、“Grammar”に Johnson の正音法に関する考え方を検討した箇所(pp. 112-115)が見られる。後に南出康世は「文法と辞書における規範主義」【98954】で、18世紀に出版された500点の文法書の頂点に位置する Lowth (1762) と、300点の辞書の頂点に位置する Johnson (1755) とは共に規範主義的であったが、Lowth の評価は後世に下落し Johnson は「規範主義的態度を取ったことで特に大きなマイナスの評価をうけたことはない」ことに着目しその理由を考察している。

先の永嶋著『ジョンソンの『英語辞典』』【98371】所収の「ジョンソンと英文法史」(pp. 221-247)に並べられた(i)序論、(ii)ジョンソンと初期英文法家たち：特にウォリス、(iii)ジョンソンとラウス、といったトピックから永嶋が“Grammar”に求めた着眼点を窺うことができよう。川崎寛二は【96931】と【97542】を捩り合わせるようにした「Robert Lowthと18世紀英文法界」【98359】

で、Johnson の“Grammar”が「総論において九品詞分類を示しつつも、各論においては扱いにもれがあるのに対し、Lowth は九品詞を丁寧に扱う」と判定する。同じく川崎による「文法相対主義への試論」【98471】は“Grammar”と諸家の英文典との影響関係を示した系譜図を掲載する。

三好楠二郎による「Priestley の『英文典』と Johnson 『英語辞典』」すなわち【98492】と【987X2】は、Johnson の“Grammar”から‘reason’派たる Lowth の *Short Introduction* (1762) を経て‘custom’派たる Priestley の *A Course of Lectures* (1762) および *Rudiments* の再版(?1768) までの流れが18世紀後半において syntax 研究を促したとして、英文法史にもたらした Johnson の貢献を再評価することの要を説く。

永嶋の関心は *Dictionary* に添えられた“History”にも向かう。すなわち“A Note on Dr. Johnson's History of the English Language”【98651】は、Johnson の“History”に独創性が欠けているとはしながらも、最初の科学的客観的英語史として評価している。

Johnson の英語観を *Dictionary* 前後に求めた齊藤延喜は“System and History in Samuel Johnson's *Dictionary*”【986Z7】において、言語とその対象とを本質的に不可分とした‘system’に基づいて英語を黄金期の状態に固定しようとした Johnson が、*Dictionary* の編纂を経験したことで英語は人間的営為として‘history’を刻みながら変化し続けるものとの認識を得た結果、自らの‘system’のうちに‘history’を包含するに至ったとの解釈を示している。

Johnson の英語観の末端には語法に対する彼の見識も含まれてくるであろう。林哲郎は『英語学の歴史』【98841】第5章の「Johnson 英語辞典と英文法」(pp. 87-88)で Johnson の「英文法は語形論の点で優れ、統語論と韻律論は不十分であった」との評価を示しているが、三好楠二郎は一連の論考において Johnson の語法上の諸傾向を集めている。先ず K.M. (三好のこと?) による「ジョンソンの『辞典』(1755)におけるドライデンの引用例文」【98451】は、Johnson 同様に前置詞の用法に気を配っていた Dryden であればこそ *Dictionary* に引用されたと見る。そして三好の「ジョンソンの英訳聖書観」【98571】は、前置詞の用法を示す用例が必要な場合にも聖書からは引用しなかった方針に Johnson の規範文法家としての姿を見る。さらに三好は「ジョンソンの『辞典』における引用例文」【98663】でも、だからこそ前置詞の項目にあっては Dryden からの引用数が Shakespeare を上回っていると指摘する。続いて「*Rambler* と *Dictionary* の間」【98711】では、*Rambler* 第208号が攻撃したのは動詞副詞結合ではなくて前置詞の用法であったろうとも推論している。

そして〈第IV期〉に入って行くが、三好は「ジョンソンの『辞典』：用例の語学史的意義」【989X2】において、「近代英語史との関連から」*Dictionary* ちゅうの例文を研究することが必要であるとして、頻用動詞の項目、前置詞の項目、頻用動詞が副詞と結合した語法の記述に「語学者 Johnson の実像」を探ろうとする。同じく“Some Remarks on Johnson and Webster's Treatment of Modal Auxiliaries”【001Z5】は Johnson が法助動詞‘Shall’, ‘Will’, ‘Should’, ‘Would’の項目で例文の多くを自作していたことに注目する。“Johnson's and Webster's Verbal Examples for Adjective-preposition and Verb-preposition Collocations”【004Z1】でも、形容詞/動詞+前置詞の語法についての Johnson と Webster の判断を比較して、Johnson が語源から語法を導く傾向に

あるとともに Dryden から多くを引用したことが再度指摘されている。

再び〈第Ⅲ期〉に戻って、Johnson の語源に対する見識を独り永嶋大典が考察してきていることにも注目しておきたい。先ず Bailey の *Dictionarium Britannicum* 第 2 版 (1736) を比較材料にすることで Johnson の語源観が見えてくるとの観測を示した「Johnson の語源」【98752】があった。それから“Johnson's Use of Skinner and Junius”【987Y1】は、Johnson が Skinner (1671) を主に Junius (1743) を従に利用しており、定説がない場合には諸説を勘案していたことを Bailey (1736) とも比較しながら導き出している。*Johnson the Philologist*【98861】所収の“Johnson the Etymologist” (pp. 149-205) も、Bailey (1736) と比較しつつ、Skinner (1671), Junius (1743), Meage (1650) 等を利用していた Johnson はひとかどの語源学者であったとする。そして“Johnson's Revisions of his Etymologies”【998&1】は、*Dictionary* の初版 (1755) と第 4 版 (1773) での語源記述を読み較べることで、彼の英語観の一端を探ろうとしたものであった。

【17/3】の文献には〈第Ⅰ期〉に属するものがある。『帝國文學』に 4 回にわたって掲載された国語学者である藤岡勝二による辞書論「辞書編纂法并に日本辞書の沿革」【89612】である。Johnson の *Dictionary* での専門用語の収録方針 (pp. 153-154) や語義の与え方 (pp. 1168-1170) についての言及が明治 29 年からあったことに驚かされる。〈第Ⅱ期〉になって、*Dictionary* で試みられた音節表示が不徹底であると糾弾したのは、Johnson には厳しい態度をとっていた金子健二による『英語發達史』【93241】 (pp. 559-560&754) であった。

〈第Ⅲ期〉以降に *Dictionary* 研究のためのスタート・ラインが引かれることになるが、福原麟太郎による『英學雜談』【955X1】所収の「ドクター・ジョンソン」は、福原が Johnson の母校であった Oxford 大学の Pembroke College で *Dictionary* の原稿を見てから、The John Rylands Library で自筆の書き入れが残されている改訂用の版本を閲覧した話で、この分野における我が国の研究者のフットワークの軽さを窺わせる事例であろう。理念面を論じた【17/2】ばかりでなく、実践面に関わる【17/3】でも永嶋大典の業績が多い。先ずは“Backgrounds of Dr. Johnson's *Dictionary*”【96833】ちゅうの“The Making of the *Dictionary*”の章 (pp. 152-156) で、*Dictionary* 編纂作業の進捗、*Plan* (1747) での目論見と刊本になってからの乖離、用例採集法などを纏め、編集方針の不徹底を初版～第 6 版 (1785) に探知している。いっぽう林哲郎による辞書編纂史 *The Theory of English Lexicography 1530-1791*【978&1】では、第 4 章 18～35 節 (pp. 92-105) が *Plan*, “Preface” および用例の採取先を踏まえて Johnson の辞書観の諸相を Bailey いらいの流れの中で捉えようとしているし、第 5 章 8～11 の節 (pp. 112-115) では Johnson の正音法に対する考え方も検討している。そして綴字の表記に関しては、渡部昇一が『英語学史』【975Y1】の「Dr. Samuel Johnson」 (pp. 229-233) で、綴字を現状で固定するという Johnson の方針が 18 世紀末までに標準発音を形成させることになったと推論している。

中原章雄は「ジョンソンの『辞書』におけるシェイクスピア」【97452】において、Warburton 版 *Shakespeare* (1747) に残されている Johnson の書き込みが *Dictionary* のどの用例に採用されたか

を調べれば彼の Shakespeare 観を知り得ようとの目算を示している。同じく「ジョンソンの『辞書』とシェイクスピア引用句」【97491】も、彼こそが imagery 研究の先駆者であったと規定し *Dictionary* の例文から彼の Shakespeare 観を読み出すことを提唱している。さらに中原は「からす麦とシェイクスピア」【975Y2】においても、*Dictionary* が Johnson の文学の一部として研究されるべきであることを訴え、その引用の延長線上に *Shakespeare* (1765) の在り様を想像できる旨を強調する。岩崎泰男の「ジョンソン博士の『英語辞典』と『ジョン・ブル物語』」【97934】は、*Dictionary* 初版と第 5 版(1784) に採用された Arbuthnot の *The History of John Bull* 初版(1712)と改訂版(1727)からの引用を通して Johnson の編纂上の工夫を窺おうとしたもので、文学畑からのアプローチの数少ない例になる。

津谷武徳の「ジョンソンの辞典(1755)に現れる「辞典語」についての一考察」【98838】は、Johnson が先行の諸辞典から *Dictionary* に引用し Dict. と表示した例文が出現する 1,101 の見出し語を ABC 順と品詞別にリスト化しており、“A Study of Dictionaries in Johnson's *Dictionary*”【98882】では同様の例を 1,044 とし、そのうち 511 例の引用元を OED から明らかにしている。

〈第 IV 期〉になって三輪伸春の「近代英語辞書の起源と発達(下)」【98924】も、やはり OED に照らしながら、*Dictionary* が先行の諸辞典より日常基本語彙の語義の記述で格段に優れていることを例示している。大野誠は「S. ジョンソンの『英語辞典』とイギリス科学の権威」【99132】において科学用語の項目に注目し、Johnson が Newton 以前の用語については「イギリスにおける「近代科学の形成」をイデオロギー的に推進する立場の著作」から引用し、Newton 以後の「個々の実用的な知識」に関しては各領域の専門辞典から多く引用していることを指摘している。

Dictionary 研究の先端を行く Allen Reddick 著 *The Making of Johnson's Dictionary 1746-1773* (1990) について我が国でも書評が 2 件見られる。すなわち渡部昇一の「ジョンソン博士の辞書と新資料(1), (2)」【99153】は 1973 年から閲覧可能になった Johnson や助手達による無数の書き込みや貼り込みのある初版本 *Dictionary* (Sneyd-Gimbel 本) を紹介し、永嶋大典の「ジョンソン『英語辞典』新研究紹介」【99162】は、当該書が *Dictionary* 第 4 版(1773) への改訂の経緯に修正を加えるとともに、初版の編纂では第一稿が放棄され出直しがなされたとの仮説を提唱していることを伝えている。

また Matthew Hale 著 *The Primitive Origination of Mankind* (1677) から *Dictionary* への引用を通して Johnson の辞書編纂法に迫ろうとの試みも、永嶋大典の“*How Johnson Read Hale's Origination for His Dictionary*”【996X1】においてなされている。更に永嶋は“*The Biblical Quotations in Johnson's Dictionary*”【99943】で、*Dictionary* の初版が聖書から引用する際に Cruden の *Complete Concordance to the Holy Scripture* (1737) を利用した可能性を示し、“*The Biblical Quotations in Johnson's Dictionary*”【99982】においても、Johnson が欽定訳聖書のテキストを改変しながら *Dictionary* に引用した状況を調査し、*Dictionary* の第 4 版(1773) で Cruden の第 2 版(1738) が使用され始めたとする Reddick (1990) に対して初版段階での Cruden の使用例を提示している。

そして三好楠二郎は、Johnson が *Vocabolario* や *Dictionnaire* からの影響を受けたか否かを判断するために、“*The Historical Background of Johnson's and Webster's Dictionaries*”【002Z6】の

第1章 (pp. 33-44) において、前者の初版(1612)から ‘Tenere’ 項を、後者の第3版(1740)からは ‘Prendre’ 項を持ってきて、それぞれの構造と語形表示について Johnson (1755) の ‘Take’ 項と読み合わせている。

【17/4】での最初の文献は既に〈第I期〉にあり、明治41年の加藤咄堂著『話草』【90881】ちゅうの「ヂヨンソンの英語辞彙」の節 (pp. 92-96) が、*Dictionary* での ‘Excise’ の定義が誹毀罪を構成するか否かを判断した当時の法務長官の答申を訳出している。個性のある *Dictionary* 故に様々な語義が話題にされてきたが、これは法学部的発想で書かれた珍しい文献であろう。

〈第III期〉に飛んで、今度は経済学部的興味というか恐らく Smithiana の一環として訳出されたのであろう、*The Edinburgh Review* 第1号(1755年6月)掲載の Adam Smith による書評的論文「サミュエル・ジョンソン著英語辞典」が、『國富論の草稿 その他』【94861】ちゅうに大道安次郎訳で収録 (pp. 261-287) されている。

永嶋大典が解説を加えた *Philological Essays from Dryden to Johnson* 【967X1】の第XII章 “Johnson” (pp. 201-255) は、*Dictionary* 周辺の原資料を集めており、本書により *Dictionary* 研究に入り易い環境が我が国でも整えられ始めた。ちょうど1967年には米 AMS 社と独 Olms 社が *Dictionary* の初版を復刻しており、我が国での *Dictionary* への関心により拍車が掛かったことであろう。同じく永嶋による書評「文学的・文化史的辞書論集」【972Z3】は、H. D. Weinbrot 編 *New Aspects of Lexicography* (1972) が「辞書を中心とする…文学・語学の研究ないしは思索へのよき誘い」たり得る書であることを教えて、英文学畑の研究者にも *Dictionary* 研究への方途が残されている可能性を示唆している。それに呼応するかのようには永嶋大典著『英米の辞書：歴史と現状』【974Z1】は、特に「ジョンソン以前：英語アカデミー思潮」(pp. 36-61) と「ジョンソン」(pp. 68-85) の章で、§ 30. ポープの場合 (pp. 55-57) / § 31. ジョンソンの言語観・英語観 (pp. 57-61) / § 32. ジョンソンの辞典：序 / § 33. 辞典の刊行 / § 34. チェスターフィールド事件 / § 35. 伝統との断絶：収録項目の激減 / § 36. 削除と補充 / § 37. フランス・アカデミー辞典の影響 / § 38. ジョンソンの辞典の伝統的要素 / § 39. ジョンソンの辞典の革新的要素 / § 40. 組織的な語義区分 / § 41. 語法規範 / § 42. 引用例文、といった節を擁していて、英文学畑の者が *Dictionary* に親しむためのいわば「涙なしの入門書」となってくれたのである。併せて永嶋大典著『ジョンソンの『英語辞典』』【98371】も専門書ではあるが、門外漢でも【974Z1】を経由すれば取り付き得る内容であり、附録の “Short Scheme” (pp. 265-278), *The Plan of a Dictionary* (pp. 279-302), “Preface” to the *Dictionary* (pp. 303-335) はポケット・マネーでは購入し難かった【967X1】の代替となってくれる資料であった。

再び Smithiana の登場である。今度は水田洋の “The Edinburgh Reviews & the Scottish Intellectual Climate” 【97534】が、Scotland 啓蒙運動の研究用資料のうちとして Smith の “Johnson's *Dictionary*” (1755) を複製しており英文学分野にも裨益するところが少なくなかったはずである。また須藤壬章は「アダム・スミスの言語論の研究(1)」【97911】で、Smith が “Johnson's *Dictionary*” (1755) において *Dictionary* に望んだ項目のサンプルとして ‘But’ 項を設定した背景に Locke の

Human Understanding 第3巻7章5節の、同じく ‘Humour’ 項の背後には Addison の *The Spectator* や Hume 等からの影響があったことを指摘している。同じく須藤の『『ブリタニカ』三版とアダム・スミス』【97991】も、Smith がサンプルとして示した ‘Humour’ 項の文案が *Encyclopaedia Britannica* 第3版(1788-1797)の ‘Humour’ 項に引用されていたことを教えている。

永嶋大典が【98861】において Johnson をひとかどの語源学者として認めた背景には、「語学者としてのサミュエル・ジョンソン概観」【98491】が紹介したところの諸言語に通じた Johnson の姿、すなわち辞書編纂家としての Johnson を「はるかに上回る大きな存在」があったのであろう。永嶋の「辞書編纂者・語学者としてのジョンソン」【984Z5】にして然り、言語や文化の歴史に対する飽くなき探求心が彼に文献主義的言語観を抱かせたとする「語学者としてのサミュエル・ジョンソン概観」【98836】にしてもまた然りであった。

いっぽう英文学領域では、例えば諏訪部仁の“On Samuel Johnson's Definition of ‘Oats’”【97821】などは、従来英文学史での必須知識とされてきた ‘Oats’ の定義が実は Johnson のオリジナルでなかった事実を *Dictionary* 前後の文献に拠って示している。また芝垣茂も英文学の視点を活かして、“A Study of Dr. Johnson's *Dictionary* (1), (2)”【98532, 98632】において、*Dictionary* 編纂の契約を結ぶ前後の彼の経済状態、契約後の助手の顔ぶれ、準備状況や意気込み、刊行後の反響や貢献について纏めており、それらは後に芝垣茂著 *Dr. Johnson's Dictionary* 【989X3】に“After Publication of the *Dictionary*” (pp. 59-78) や“Revision of the *Dictionary*” (pp. 79-119) とともに収録されることになる。

この頃我が国でも *Dictionary* の初版が復刻【98311】されて、この方面の研究に対する当時の熱気が伝わってくるのであるが、Johnson 自身による改訂を受けた最後の版である第4版(1773)の復刻(1978)は Beirut で印行されたために我が国での参照が容易でない時期が続いた。それが1996年になって Birmingham 大学の Anne McDermott により初版と第4版の全頁の映像と文字情報が CD-ROM で提供されるに及んで、18世紀英文学研究での *Dictionary* の参照の利便が格段に高まったといえよう。ちなみに McDermott 編 *Anniversary Essays on Johnson's Dictionary* (2005) はこの領域での研究の最新状況を示す論文集と目せるが、編者が文学研究者であるためか語学的アプローチに実績のある邦人の論文は登場して来ない。

Johnson の親版を加工した *Dictionary* についての成果もある。「まれな語や意味不詳の語…を省き、また多少の補正を加えている。…引用は作者名あるいは作品名だけを挙げるに止め、語義もときに簡略化されている」ところの簡約2巻本(1756)を初めて原寸大で複製した『覆刻版ジョンソン簡約英語辞典』【985Y1】には、原本の所蔵者である寺澤芳雄執筆の「Johnson『簡約英語辞典』解説」が添えられており、その小冊子には *Dictionary* 関連のデータが集約されている。同様に今里智晃の「Dr. Johnson's *Dictionary* in Miniature」【98822】も十二折判(1806)での収録語を親版と比較することで ‘miniature’ 判の特徴を捉えようとする。いっぽう *Lessons in Language* 所収の“The Plan of an English Dictionary”【986Z1】は、Johnson による1747年の *Plan* から一割程度をカットした本文 (pp. 1-22) を転載し、諏訪部仁による詳注 (pp. 69-75) を添えた教科書版であるが、

その売上げ部数が判明すれば、我が国での *Dictionary* 研究の将来性を占めるのではないかと思ったりもする。

三好楠二郎の「*Dictionary* への encyclopedic approach」【98761】は、R. DeMaria, Jr. 著 *Johnson's Dictionary and the Language of Learning* (1986) の書評であるが、「ジョンソンの思想を求める人にとっては恰好な概説書・入門書」と評して、それが英文学領域の人間にも近づきやすい書物であることを教えている。

〈第Ⅳ期〉になって、永嶋大典による“The Road to the *Dictionary*”【99531】は、Dodsleyら書籍商たちと *Dictionary* 出版契約を結ぶ1746年以前から Johnson が自分流の *Dictionary* に関心を寄せていた事実に着目し、その出発点を考察したものである。

またもや Smith なのであるが、Johnson の *Dictionary* では語義分類が文法的でない指摘していた Smith の「ジョンソンの『辞典』の批評」が『アダム・スミス哲学論文集』【99341】にも訳出されている。それでも『文献目録』に拾った限りでは【94861】いらい半世紀振りの新訳で、その訳者の須藤壬章は【97911】と【97991】でも登場していた。英文学の側からこれに加えられた考察が松原慶子による「アダム・スミスの『英語辞典』書評を巡って」【00035】である。Smith が Johnson に「品詞の類別と説明の体系性」を求めたのに対し、Johnson は「語義の詳述とその正用法」を重んじていたことを対照させ、両者の背後に Locke の *An Essay Concerning Human Understanding* (1690) の影響を指摘している。

早川勇著『辞書編纂のダイナミズム』【00131】所収の「明治の英和辞典とウェブスター及びジョンソン辞書」(pp. 455-462)によれば、Johnson の *Dictionary* は明治の日本人には難しすぎて辞典編纂に利用されることはなかったが *Dictionary* の背後にあった言語アカデミー思想は当時の国語学者の心を掴んでいたとして【89612】の存在を教えてくれる。同じく「ジョンソン英語辞典簡約版の歴史的意味」【00522】では、八折簡約版各種(1756~1815)と親版との内容上・編纂方針上の相違点を挙げながら、親版も簡約版も文明開化期に舶載されなかった背景に触れている。

最後に「文学的表象としてのジョンソンの『英語辞典』再考」【00531】は、タイトル通り原田範行が英文学の側から *Dictionary* に分け入って、「歴史的推移を勘案した上で現実に裁定を下す」とか「最終的な判断を読者に委ねる」といった Johnson の *Dictionary* での姿勢は、1740~1750年代の彼の著作に認められる作家としての理念と十分に重なり合うことを指摘して、*Dictionary* と Johnson の文学作品との融合を図ろうとする。そうした折りも折り2005年に *Yale Johnson* 第XVIII巻 *Johnson on the English Language* が登場してくれて、文学畑の研究者にとって *Dictionary* 周辺が一層身近に感ぜられる様になってきた。

【18/】：*Rasselas* (1759) 等の散文虚構作品

内田魯庵が『ジョンソン』【89471】で「東京の諸學校は英語の教科書として此書を用ゆるをもて、『ラセラス傳』の名は四書五経よりもさらに廣く英學書生の間に知らる」(p. 131)と語ったのは明治27年であったが、『文献目録』では明治17年の *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*

【88451】が最も早い記載例であり、これは Tokyo Daigaku による翻刻本である。川戸道昭の『『ラセラス』の流行とその背景』【00042】によれば、「明治12年以降、東京大学では毎年決まって『ラセラス』の名が使用教科書の一覧表の中に登場してくる」(p. 316)とあり、明治18年が『『ラセラス』の英語副読本がはじめてわが国の書店から刊行される記念すべき年であった」(p. 318)とあるから、恐らく明治12年頃は輸入された原書の用い始めて、明治17年までには大学が自前で印刷していたのを、明治18年以降民間で印刷販売されるようになったのであろう。『文献目録』にも明治18年版の翻刻本が2種類記載されている。ちなみに英米でも *Rasselas* 人気には伝統があり、19世紀ちゅうだけでも少なくとも9種類の刊本があったくらいである。

合計すれば『文献目録』には〈第Ⅰ期〉ちゅうに *Rasselas* の教科書版だけでも12種類が見られる。*Rasselas* が当時の英語教科書の定番であったとすれば、その理解を助ける注釈本や訳本の市場が形成されてくるのは自然の成行きで、明治19年に発売されていた丈山居士(譯)『王子羅西拉斯傳記』

【88622】を始めとして、注釈付きや付きでない完訳本が6種類、その他にも断片的な注釈や和訳が主に雑誌誌上に数件見受けられる。ところが大正以降になるとその後の1世紀間に、朱牟田夏雄(譯)『幸福の探求』【94891】が出版(1949年と1962年に再刊)されたのを例外として、*Rasselas* 関連書は出版されなくなってしまった。それで川戸の【00042】などは、明治45年の齋藤秀三郎による *Rasselas* 【91281】を「明治時代の『ラセラス』の流行の最期を締め括る教科書として貴重な文献である」(p. 336)と位置付けているが、実質的には将来にわたって『ラセラス』の流行を締め括る教科書となってしまったようだ。

〈第Ⅰ期〉の上記以外の文献としては、明治25～26年に増田藤之助の「ジョンソン氏「ラセラス傳」詳註發端」【89241】が「近年…大ひに世に行なはる」*Rasselas* の「大意及び性質を一言」し、同じく「ラセラス傳」の評」【89391】は Johnson が「物語その者に於ける實らしきことを犠牲にする」が「道徳上の趣意目的」を物語で明示しているとし、「ラセラス」の文章」【893Y1】では *Rasselas* の「文章の如きも英文を學ぶ者の模範とすべきにはあらず」とも評している。また高橋五郎著『人生觀』【90381】所収の「ジョンソンの人生觀」(pp. 9-25)は、*Rasselas* の梗概を示してから Johnson の「知命安分的有神の消極觀」という人生觀を導き出している。

〈第Ⅱ期〉には該当する文献が少なく、石田憲次が『ジョンソン博士とその群』【93311】で *Candide* (1759) と比較して、*Rasselas* は「ずつと読んで行くうちに、ジョンソンの人格そのものであるやうな感じがして来て、如何に平凡な事が書いてあつても棄て去ることが出来なくなる」との感想を洩らしている (pp. 152-164)。石田は参照していないようであるが、Chapman 版 *Rasselas* (1927) の序文が *Candide* との関連を示唆したのに対し、その当時の“ECCB for 1928”での書評が関連の可能性を否定した反証を試みており明快にして興味深い。また石川林四郎の「*Rasselas*」【93391】は全49章ちゅうの第1章の本文と注でしかなく、〈第Ⅰ期〉と比べて甚だ簡素な扱いである。永井三太郎の「Dr. Johnson の飛行觀」【93411】は *Rasselas* に説かれていた飛行術とそっくりの謬見を抱いた人間が当時の英国に実在した逸話であるが、これも周辺的情報でしかない。

〈第Ⅲ期〉は朱牟田夏雄(譯)『幸福の探求』【94891】で始まり、その後に E. Blunden は1927年

の *Lectures in English Literature* を再版【95242】するに際して“*Rasselas and The Vicar of Wakefield*” (pp. 29-44) を加えており、*Rasselas* は“*portrait-sketches*”には無関心であったが、Goldsmith とともに“...can moralise with the benefit of humour and prose style”という共通性を有していたと指摘している。

福原麟太郎が「ジョンソン大博士(19)」【96692】において、*Rasselas* を「いかにも下手な小説である。描写ということをしないうで説明や批評ばかりしている」として石田【93311】や朱牟田【94891】に頼って解説を書いていたのは1968年であったが、邦人による本格的な *Rasselas* 論がその頃登場し始めていた。すなわち中原章雄の『『ラセラス』の側面』【964X3】で、1752~1765年の Johnson の伝記的事実と重ねながら、*Rasselas* に1759年当時の彼の「生活と精神の状態を反映した議論」を読み出そうとしている。あるいは岸本利昭も『『ラセラス』について』【967Z2】のなかで、‘Johnsonese’で「ジョンソンらしき意見を吐く」登場人物たちが Johnson の人生観の代弁者であるかのような印象を読者に与えると指摘している。

いっぽう黒田磐雄の「*Rasselas* について」【96934】は tragic であった *Rasselas* に ironical な解釈をぶつけるなど、二元論的視点で作品を読もうとする姿勢の兆しを見せ始めている。続く飯島武久の「Dr. Johnson における「崇高」の問題」【97042】は、‘the beautiful’ と対峙する ‘the sublime’ の概念のもたらす心理的効果を彼が *Rasselas* において認識していたとするし、同じく「*Rasselas* 試論」【97132】は、*Rasselas* を教訓的悲劇物語と見る Boswell いらいの解釈と Alvin Whitley が“*The Comedy of Rasselas*” (1956) で提唱した哲学的誤謬を諷刺した喜劇と見る解釈とが併存するようになった発端は、構成や人物描写での二項対立を通して曖昧な現実から普遍性を導き出そうとした Johnson の手法にあったと考える。中川誠の「*Rasselas* 試論」【970Z2】は、*The Vanity of Human Wishes* で唱えられた堪え忍ぶ前向きの人生観が Johnson の「後半生をきびしく照らす天上の導きの星であったとすれば」、‘Choice of Life’ の困難に晒されたその後の10年の人生経験が産み出した *Rasselas* は「その星を頭上にいただきながら人生という荒野を旅した人の暗く重いつぶやきであった」と喩えて、Johnson の人生における両作品の繋がりを示唆している。そして同じく「Samuel Johnson の二つの道標」【97272】では、そうした人生哲学が *Rasselas* に登場する説教者たちの存在感を弱めることになったとも指摘している。

この【18/】の領域は *Rasselas* 以外の散文虚構作品もその対象に含めているが、Johnson が創作した散文作品は彼の一連の随筆に多く登場するので、ここでは【16/】に分類されなかった作品を論じた文献を挙げておこう。まずは、人生選択についての夢物語として *Rasselas* の先駆的作品とされた *The Vision of Theodore, Hermit of Teneriffe Found in His Cell* (1748) を泉谷寛が「テネリフの隠者セオドラの夢」【97771】として訳出している。同じ頃に高橋源次も *Samuel Johnson* 【97841】所収の“Reason, Religion, & Education” (pp. 12-17) でこの寓意物語の梗概を示しているが、これ以降【18/】に属する *Rasselas* 以外の散文虚構作品絡みの文献は泉谷の独壇場になる。すなわち「ピグミー族の反逆」【98512】は、これを pygmies の姿となって人生の登山者の行く手を阻む悪しき habits に対し警戒するよう Johnson が説いた作品と解釈する。「ジョンソンの東方物語」

【986Z3】は東洋に取材した物語8篇(随筆集掲載分も含む)の梗概と諸特徴を示しており、「ジョンソンの *The Fountains*」【98735】は彼が随筆形式の作品で女性を描く際に避けていた「老年や死への対処」を *The Fountains* (1766) に読み出している。それらを含めて泉谷が編注した教科書版 *The Fountains & Other Stories* 【986Y1】は、「幸福の探求」という主題において共通する *The Vision of Theodore* と *The History of Ten Days of Seged, Emperor of Ethiopia* (1752, *Rambler* 掲載) と *The Fountains* の三篇を収録したものである。やや先に飛ぶが泉谷の「ホークスワス作〈東洋物語〉をよむ」【001Z2】も、*Rasselas* がその一角を占めていた18世紀における oriental tales の流行に着眼したもので¹⁷、末尾に「〈東洋物語〉関連年表」(pp. 85-88) を付している。

Rasselas に戻ろう。1980年代以降は多様な視点での作品解釈の試みが並ぶようになる。すなわち *Rasselas* に Johnson の神経症的側面を読み取った君島邦守は「『ラセラス』論」【980Z1】で、他人への恐怖心と独居の不安というジレンマが、矛盾した言説をこの作品に生ぜしめたとする。Johnson が *Rasselas* の構成に内在的統一性を与えるために意図的にナイル川のイメージを利用したのではないかと推測したのは山崎弘行の“The Function and Meaning of the Nile in *Rasselas*”【98234】であった。泉谷寛の「明治期『ラセラス』翻訳の片影」【98271】は、5種類の邦訳で訳文を比較しそれぞれの文体上の特徴を挙げている。同じく「『ラセラス』冒頭の‘exhortation’について」【98837】でも、泉谷は *Rasselas* 冒頭の段落の訳文を明治期の10種類の翻訳と朱牟田訳【94891】とで比較しながら、「奨励文」における訳文のニュアンスの違いを指摘する。松原慶子の「*Rasselas* 解釈の試み」【98313】は Johnson の看取していた realistic な人生観を二元論的視点でこの作品に読み出し、作品における時間の経過に対する彼の意識にそれが反映されていると解釈する。江藤秀一の「S. ジョンソンの『ラセラス』について」【98523】は *Rasselas* そのものがそれ以前の彼の著述の形態上および思想上の集大成であることを例証しようとする。荻野昌利著『暗黒への旅立ち』【98731】の「プロローグ」(pp. 3-15) は、ロマン主義文学が愛好した〈牢獄〉と〈脱獄〉の主題が *Rasselas* では未熟な果実に終わってしまったとする。そして泉谷寛の「ラセラスはどこへ帰ったか」【98734】は東西の *Rasselas* 論を渉猟して「ジョンソンの意図するところ」や「ラセラスの行く末」を検討した批評史的論考になっている。

〈第Ⅳ期〉になっても英学史的視点で書かれた *Rasselas* 論は登場してくる。この領域でも意欲旺盛な泉谷寛による「『ラセラス』をよんだ文人たち」【99072】は、「明治期のわが国において、多大の反響をよび、かつ広く愛読された書物である」*Rasselas* について「英語風俗史の一環としても興味あるこのブームの源流をたどり、その影響、経緯を人物中心に検討」したものの。川戸道昭もまた「『ラセラス』の流行とその背景」【99082】で、明治12年くらい *Rasselas* が我が国の教育の場を受容されてきた様を明治30年まで辿り、作品ちゅうの「明治の学生や教師、あるいは文人に受け入れ

¹⁷ R. Irwin の *The Arabian Nights: A Companion* (1994) を西尾哲夫が訳した『必携アラビアン・ナイト：物語の迷宮へ』【99816】によれば、*Rambler* や *Idler* ちゅうの16篇の東方物語は Johnson が時代の好みに迎合した結果であり、*Rasselas* も「ヴォルテール同様、凝りすぎてけばけばしいものと思えたアラビア語原典をからかった」だけのもので、彼がイスラム文化に惹かれて執筆したのではないと解釈している (pp. 321-322)。

られやすい要素」について考察している。

久末源治の「*The History of Rasselas, Prince of Abissinia*」【990Z1】は、解説や解釈を添えながら *Rasselas* をパラフレーズし、人間とその生の局面について Johnson が提示した「人生論的な fable」であったとこの作品を規定する。斉藤延喜の“A Journey through the Mind”【99335】は、松原の【98313】同様に時間の要素に注目しており、‘a moral history’ 的 ‘history-story’ である *Rasselas* では主人公の心の旅が出発前から始まっており、旅先での *Rasselas* は ‘choice of life’ 的物語への入退場を時間的にコントロールしていたが、この時間の要素は Happy Valley に戻ったあとの主人公にも ‘history’ を刻み続けさせたとの読みを示す。

再び登場する泉谷寛であるが今度は *Rasselas* の続編に注目する。「ラセラスはどこへ帰ったか」【99353】では E.C. Knight 著 *Dinarbas: A Tale: Being a Continuation of Rasselas* (1790) を紹介し、「自薦の弁」【99412】でも *Rasselas* の続編や英国の女流作家たちが示した東洋物語への嗜好に触れている。「ラセラスはどこへ帰ったか」【99451】および「ミス・ウエイトリィ作『ラセラス』第二部について」【99658】でも、E.P. Whately 著 *The Second Part of the History of Rasselas* (1834; 1835) という続編を掘り出している。更に「『ラセラス』における〈永遠の選択〉」【00253】は、*Rasselas* の第48章で暗示された ‘the choice of eternity’ という問題が3人の女性に *Rasselas* の続編を書かせることになり、彼女等が ‘the choice of eternity’ を宗教的に捉えていたことを指摘している。

高知尾仁の「近代エチオピア表象論2」【99431】は【25/】で言及されている論考【99426】の続きであるが、その前半「ラスセラス」(pp. 36-49) が *Rasselas* の梗概を示しながら、*Voyage to Abyssinia* (1735) における「ロボの旅とラスセラスの旅に共通するものはそれが幻想と覚醒の物語であり、希望と挫折の物語であり、閉鎖と開放の物語であることだ」(p. 48) との比較論を展開させている。すなわちこの論考は、Johnson のこのデビュー作が1735年以来初めて1985年に Yale Johnson 第XV巻として活字化されたことを契機にして、*Rasselas* を始めとする東洋に取材した彼の諸作品に対する解釈に幅と深みとが加えられていくであろうとの方向性を示唆していよう。

明治時代における我が国での *Rasselas* の読まれ方を英米の刊本とも照らしながら研究してきた泉谷寛は、1995年に図版を多用した「『ラセラス』受容史の研究(1)」【995Z1】を発表して以来毎年1本ずつ書き継ぎ、21世紀早々に「『ラセラス』受容史の研究」【00142】として出版している。

やはり原田範行の“Samuel Johnson's *Rasselas* Reconsidered from the Conception of Time”【99635】も作品のモチーフになっている時間の要素に注目し、それを検証しつつ、旅人たちが作中に見聞したことの意義、エピソードに託された役割、Johnson の時間観などを考察している。同じく原田による“*Rasselas* Reconsidered from the Consciousness of Time”【99656】もまた18世紀当時の文学では時間への意識が強かったことを踏まえ、*Rasselas* の構造を解明する鍵はやはり時間であることを再確認する。原田は時間の視点のみならず出版や旅の視点からも *Rasselas* に迫っており、それらの成果がこの領域での掉尾を飾ることになる。すなわち“*Rasselas* Reconsidered from the Point of View of Print Culture”【00231】の前半は、Johnson が貸本屋での分類である「散

文物語」としての枠組みに従って *Rasselas* を執筆したであろうと推論し、後半では、貸本屋への配慮から *Rasselas* が 2 巻本で刊行されることになり、彼がそれに伴う内容上の修正に応じたことを分割箇所前後の頁に検証している。あるいは“Johnson in Japanese Culture”【00433】は、明治維新らしいの Johnson への関心が日本人の精神形成に与えた影響を主に *Rasselas* 受容を通して解明しようとする論考であるが、そのなかで日本の文化的土壌が作品理解を可能にした *Rasselas* の旅行記的側面にも注目している。そして同じく「幸福探求に旅は必要だったのか？」【00471】では、Johnson が登場人物に仮託した「幸福の探求」という彼自身にとっての思索の的を、「人生と思索の変化」を目指した「空間移動」をこそ本領とする旅行記において表現しようとしたであろうと解釈する。

英米では Johnson の生前は勿論のこと彼の作品が等閑視された 19 世紀にあっても独り *Rasselas* だけはリプリントが繰り返されてきた人気作品であっただけに論考類も多数書かれており、Greene & Vance (1987) までに少なくとも 211 件を数えるほどであった。そしてその多くが最終章の解決の仕方を巡っての解釈であったから、*Rasselas* を論ずる際に欠かせないのは、Tomarken (1994) が指摘するように、繰り返しを避けるために過去において示された解釈を辿っておく作業ということになる。我が国でもこれまでに 100 件近くの業績が産み出され、英米でなされてきた指摘をある程度反映させているようであるが、本場での 250 年の *Rasselas* 批評史を踏まえた再評価と再配列とを済ませておくことが、国産の文献 100 件を今後活かす前提条件となるであろう。

なお【18/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【88622】【89041】【890X1】【890Z1】【89341】【893Z1】【90561】【909Z1】【94891】【96291】【97771】【99151】

【19/】: *The Plays of William Shakespeare (1765)* の編纂および批評

我が国での Shakespeare 受容には歴史があるから、その関わりで Johnson も早くに言及されてきたことになる。『文献目録』での最初期の言及例は明治 16 年で、河島敬蔵が「歐洲戯曲ジュリアス、シーザルの劇」【88321】の序文に「曾て英國の文學博士サミュール・ジョンソン氏も評しけん如く…」として *The Plays of William Shakespeare (1765)*、以下 *Shakespeare* と略記) の“Preface”に触れている。明治 27 年には坪内雄藏の「評論と創作(承前)」【89411】も Shakespeare の則 nature 脱 three unities 的作風を“Preface”に読み出している。明治 36 年の磯邊彌一郎著『改版増補英文學講義録』【90331】にも“Preface”の部分的注釈が見られ、明治 39 年になって『オセロ』【90651】の訳者戸澤姑射は *Shakespeare* から Johnson が付した *Othello* のための注を一部ながら訳出している。

〈第 II 期〉には、老田三郎が「D.N. Smith の近著 *Shakespeare in the Eighteenth Century (I) ~ (III)*」【92972】において 1928 年に出版された Smith による 3 本の講演の概要を紹介するが、Smith は Johnson の *Shakespeare* を歴史的研究以前の「舊學風の最高峰」と位置付け、その“Preface”については「Shakespeare の短所に對する Johnson の態度は必要の限度を越えて過酷」と指摘している。続く石田憲次著『ジョンソン博士とその群』【93311】の第 2 章 9 節 (pp. 177-193) も、Shakespeare のうちに「美點と共に缺點を見た、痘痕と齧と間違えなかつた」だけの洞察力が

Shakespeare をユニークな存在にしていると評価する。

〈第三期〉になると、*Proposals for Shakespeare* (1756)、*Shakespeare* の“Preface”と“Notes”の抜粋からなる W. Raleigh 編 *Johnson on Shakespeare* (1908) が吉田健一により『シェイクスピア論』【948Y1】として全訳され、また *Shakespeare* から *King Lear*, *Hamlet*, *Othello* のための序言が福原麟太郎により「シェイクスピア序説」【95041】において訳出されている。

この頃から Johnson による Shakespeare 論が1765年以前へも広げた視野で考察されようになる。すなわち中西信太郎は「『シェイクスピア偶像崇拜』の発生過程」【94991】で、Dryden-Pope-Johnson の三視点からの観測が Shakespeare 批評史の把握を的確にすると指摘している。大塚高信の「Johnson 辞典の Shakespeare 引用語句について」【955Z6】もまた *Shakespeare* 以前に注目し、彼が Warburton 編 *Shakespeare* (1747) から自分の *Dictionary* (1755) に引用した際の不正確さの故に Johnson は Shakespeare を消化しきれていなかったのではないかと推測している。

吉村清の“Dr. Johnson's Criticism of Shakespeare”【954Z2】は、Shakespeare を古典主義的法則から切り離して‘a poet of nature’と評価しようとした彼の批評理念を“Preface”に読み取る。中原章雄の「ジョンソン博士のシェイクスピア論」【95892】は喜劇と史劇への Johnson の注釈を通して彼が非凡な人生観察家であったと評する。

外山滋比古の「十八世紀における Shakespeare の Emendation」【96132】は、Johnson の *Shakespeare* を含む18世紀の「本文修正」の実態を *Romeo and Juliet* に調査して、当時の Shakespeare 解釈の積極的面と消極的面とを解明しようとしたもの。福原麟太郎が1967年3、4月と1968年6月に『學鏡』に載せた「ジョンソン大博士(7),(8),(21)」【96692】は Johnson による Shakespeare 関連著述を一通り紹介している。すなわち *Miscellaneous Observations on the Tragedy of Macbeth* (1745) と一枚紙からなる“Proposals” (1745) の概要、*Proposals for Printing...Shakespeare* (1756) から読み出せる Johnson 的な感受性と校訂方針、*Shakespeare* (1765) の“Preface”における Johnson 流の Shakespeare 解釈が3回の記事で要約されている。また林徹磨は“Dr. Johnson as a Shakespeare Critic”【96835】において、先ず Johnson の関連著述 (1747, 1751, 1753, 1756, 1765) を後世の研究も踏まえて要約し、その次に Dryden (1672), Pope (1725), Warburton (1747) から導き出した18世紀の Shakespeare 批評の趨勢とも照らしながら Johnson 版 *Shakespeare* の際立つ部分を指摘している。

日本における Shakespeariana の一端として Johnson は度々訳出されてきており、中川誠も *Yale Johnson* 第Ⅶ～Ⅷ巻 *Johnson on Shakespeare* (1968) の刊行を機に『シェイクスピア序説』【978X1】を訳しており、そこには Johnson の *Proposals* (1756)、*Shakespeare* (1765) の“Preface”、26篇の戯曲についての“Notes”からの結論的な部分が抄訳されている。後に川地美子も1765年の“Preface”を『古典的シェイクスピア論叢』【99432】に「シェイクスピア序説」(pp. 36-102)として訳出することになるので、吉田訳と中川訳を合わせると3種類の邦訳が作成されたことになる。

諏訪部仁は“A Note on Johnson's Preface to Shakespeare”【98591】で、*Shakespeare* の“Preface”における‘individuals’と‘species’という概念の借用元を探り、登場人物を批評する際に Johnson

が用いた 'species' という概念の役割を考察しているが、〈第Ⅳ期〉の諸論考においてもこのような概念がキーワードとして活用されることになる。秋山肇の「Dr. Johnson と Shakespeare 批評」【98631】は、1765年までの20年間に Johnson が産み出した著述を縦覧して、Shakespeare が描き分けた登場人物には普遍的人間性が投影されていることに加えて本文校訂に関する方針など Johnson の様々な所説を集めている。

〈第Ⅳ期〉に入って、原田範行の“Between Particularity and Generality”【99034】は、*Observations on Macbeth* (1745) に彼の歴史感覚と登場人物の心理に分け入るといふ伝記的手法を感知し、彼が 'generality' と 'particularity' の間に人間性の 'universality' を捉えようとしたと見るが、その後 Irene (1749) の執筆において 'universality' を掴み得なかった彼は Shakespeare の編纂を断念するに至ったとの解釈を示している。同じく原田による“Individuality and Universality in Johnson's Shakespeare Criticism”【99535】も、客観的・分析的姿勢で登場人物に普遍的人間性を読み出す Johnson の批評が個性に注目し登場人物に感情移入しようとする18世紀後半以降の Shakespeare 批評に凌駕されたとの定説を、Johnson の Shakespeare 批評に一貫する歴史感覚と伝記的手法とを踏まえながら見直してみるよう求めている。つまり原田の「Shakespeare 批評における個と普遍」【99571】によれば、文学に普遍性を重んじた Johnson が個に対して必ずしも無関心ではなかったこともプラス要因になるからである。更に原田は“Individuality in Johnson's Shakespeare Criticism”【99821】で、歴史感覚を働かせた心理分析的な登場人物批評と登場人物を 'species' 視する Johnson の古典主義的姿勢にこそ、登場人物の 'individuality' に感情移入するロマン主義批評が置き忘れてきた客観性と普遍性が残されていると再度主張する。中川誠もまた新旧両勢力の対立構造のなかでの Johnson の居場所を考察しており、彼の「モラリストの Shakespeare 批評」【99734】は、Shakespeare のような空想詩人を語れるだけの美的直観力が Johnson には欠けていたとする急進的なロマン主義者 Hazlitt による *Characters of Shakespeare's Plays* (1817) に反駁しながら、Shakespeare の思想の深遠さを認識して自らの限界を弁えた Johnson の謙虚さにこそ、難解な部分を神秘的な解説で煙に巻こうとするロマン主義的批評へのプレーキ的役割があったことを見出している。

小澤博の“Shakespeare and Samuel Johnson's Anti-theatrical Sentiment”【99691】は、Johnson が Shakespeare 解釈において読者の読みに委ねる方針に傾いた背景として、舞台人 Garrick に対して彼が1765年頃から抱くようになった反感の存在を予測している。【92972】に取り上げられていた D.N. Smith の講演集 *Shakespeare in the Eighteenth Century* (1928) が、日本の Shakespeariana に加えられるべく『十八世紀のシェイクスピア』【003Z1】として訳出された。Johnson への言及が多い第三講への訳注 (pp. 127-128) には、Johnson の“Preface”が「シェイクスピア批評の全体的評価をし、シェイクスピア批評の常識となっていたことに最終的な所見を与えている」とする Smith による評価、また訳者による「ジョンソンは旧学派シェイクスピア批評の頂点であるとスマスはいうが、今となってもジョンソンの批評は依然として優れた価値を持ち続けている。一時的に評判の低い時期があったとはいえ、シェイクスピアの様々な特徴をうまく説明しているところが世代を超えて偉大といわれる所以であろう」との評価が示されている。

従来この領域の研究ではテキストを W. Raleigh が抜粋した *Johnson on Shakespeare* (1908) に頼ることが多かったが、Yale 版第Ⅶ～Ⅷ巻 *Johnson on Shakespeare* (1968) が刊行されて以来 Johnson と Shakespeare の接点を示す資料が整備されたことになる。その後 R. D. Stock は *Samuel Johnson and Neoclassical Dramatic Theory* (1973) で1730～1770年当時の Shakespeare 批評との対比で Johnson の “Preface” を位置付けようとしたし、G. F. Parker も *Johnson's Shakespeare* (1989) でロマン派側の批評態度との差異を鮮明化させようとした。もっとも Yale 版が転載した大量のしかし断片的な notes に注目したのは E. Tomarken からで、彼は *Samuel Johnson on Shakespeare* (1991) で彼の批評態度を notes に読み出そうと試みることで今後への研究方向を示唆することになった。また A. Sherbo の *Samuel Johnson's Critical Opinions: A Reexamination* (1995) も同趣旨で編まれたが、*Johnson on Shakespeare* の研究はまだ成熟の域には達していないようだ。

なお【19/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【948Y1】【97521】【978X1】【99432】

【20/】：政治・経済関連の著述および見解

〈第Ⅰ期〉の文献として、明治35年に松村介石が「サムエル、ジョンソン」【90271】で、アメリカへの重税を容認した *Taxation No Tyranny* (1775, 以下 *Taxation*) を彼が草したことで「實にジョンソンは一度び獨立の節操を售りたる以來は、人から下蔑られ笑はれ、多年の名望を一時に失して、已に地獄に陥ちて居つた」と激しく弾劾している。また *Table Talk* (1835) の翻訳である『コールリッジ談話集』【00172】によれば、*Rambler* より彼の政治的著作のほうを評価していた Coleridge にしても *Taxation* には哲学的な理解が伴っていないと批判的であったようである (p. 393)。Johnson がアメリカ人に嫌悪を覚えその獨立に反対した真意については、〈第Ⅳ期〉になってから江藤秀一により「十八世紀一文人から見た植民地政策」【00533】において *Taxation* その他の Johnson の政治論に基づいて再検討がなされることになる。なお〈第Ⅱ期〉になって、石田・鈴木による『ジョンソン』【93431】は、「秩序」、「道義」、「自由」、「祖国」が Johnson が「政治及び社會の諸問題を批判し、裁量した」際のキーワードであったことを教えている (pp. 90-94)。

上記以外の関連文献は〈第Ⅲ～Ⅳ期〉に散見される。すなわち上田辰之助の「市民社會文学の一形態」【95311】は Johnson の経済人的側面に注目し (pp. 16-20)、矢島鈞次の「読書の在り方について」【95881】は言論の自由に対する国家・社会による適度な圧迫を容認する Johnson の政治姿勢に触れている。これは〈第Ⅳ期〉に秋山肇が「Dr. ジョンソンにおける保守主義」【99137】で示すことになる。一般民衆の政治的・宗教的な知恵を信じていなかった彼は言論・出版の自由について「無制限な自由が生む危険」や「制限することの危険」を認識し、彼が適正な統制を容認した背景には「民衆の物質的、精神的、社会的幸福」を希求する心があったらうという考察に繋がるであろう。そして Y. M. による D. Greene 著 *The Politics of Samuel Johnson* (1960) に対する書評【96112】が伝える ‘a skeptical conservative’ という Johnson 像にもそれは合致してこよう。しかし後に中野好之が「ジョンソンとバークの政治論への評価の変遷」【98542】で Johnson の政治論文が黙殺

されてきた理由に触れて彼の主張が歴史の動きから脱落してしまったからと判定するとき、やはり秋山【99137】で示唆された Johnson の保守的姿勢が想起されてくるのである。

Leslie Stephen (1902) を中野好之が訳した『十八世紀イギリス思想史(下)』【97043】では、「共同体全員に浸透して下位のいっさいの組織を統制運営し…他からのいかなる疑念や掣肘を受けずにただ物理的必要性のみによって限定づけられるような権力」が社会には不可避という Johnson の政治理論が *Taxation* から抽出されている。その様な国家観を前提にするならば、高瀬ふみ子が “Samuel Johnson and the Concept of Subordination” 【97633】において、Johnson の “Review of Jenyns” (1757) から知足の道徳観と流動的不平等を容認する政治観を読み出してきたても違和感はない。しかし保守的政治傾向一辺倒でもなく、奴隷制度は廃止されるべきだとの人道主義的信念も Johnson にはあったということは、Peter Gay の『ヨーロッパ啓蒙思想の社会史(I)』【98261】が指摘する通りであり (p. 24), また自由権を求めて訴訟を起こした黒人のために彼が1777年にモラルと人権の見地から弁護論を口述したと岸英朗が「奴隷の解放」【993Z1】で伝えるエピソードからも窺われるであろう。

1982年の「フォークランド紛争」勃発に際して秋山肇が『朝日新聞』に寄せた「ジョンソン博士の非戦論」【98291】が *Thoughts on the Late Transactions respecting Falkland's Islands* (1771, 以下 *Falkland*) に言及しているが、それは経済効率を勘案した Johnson が英国政府による穏健な対 *Falkland* 政策を支持した論文であった。植民地政策の非人道性に反対したはずの Johnson が、経済面では植民地を本国の統制経済政策に組み込もうとする重商主義を支持していたと見る松原慶子の「ドクター・ジョンソンと植民地」【98736】や「ジョンソンの植民地観」【98781】は、彼の “An Introduction to the State of Great Britain” (1756) 他を踏まえた考察であり、久保芳和の「ジョンソンのフォークランド諸島論」【98943】も、*Falkland* 諸島領有の経済効率を Adam Smith の視点で再検証したうえで、Johnson の *Falkland* を出色の政治論であったと評している。上田が【95311】で注目した Johnson の経済人的側面は桑子利男の「二つの〈農業論〉」【99522】にも見られよう。ここでは Richard Rolt の “Some Thoughts on Agriculture” (1756) が契機となって Johnson に書かせた “Further Thoughts on Agriculture” (1756) が考察されている。

Johnson の政治姿勢を巡ってのもうひとつの話題は、旧 Stuart 朝の再興を望む一派に彼が与していたかどうかという問題なのであるが、諏訪部仁は「ジャコバイト・ジョンソン」【984Y2】で1745年の反乱に彼が加わったか否かについて Clifford や Fleeman に意見聴取をしている。そして Johnson の矛盾と偏見に満ちた言動に必然性を見出そうとした J. Cannon 著 *Samuel Johnson and the Politics of Hanoverian England* (1994) を書評【99652】した原田範行は、一連の論考でこの問題に寄せる関心の程を示している。すなわち J. C. D. Clark 著 *Samuel Johnson. Literature, Religion and English Cultural Politics from the Restoration to Romanticism* (1994) への書評【99672】では、Johnson を Jacobite 視する立場で彼を衰退しゆく1660～1750年代の政治的文化的伝統の担い手として Clark が看做していたことを紹介している。また原田の “A Study of the Politics of Young Samuel Johnson” 【999Z2】や “A Perspective of the Studies on Young Samuel Johnson” 【00046】

は、Johnson が Jacobite であったか否かの論争も踏まえつつ、そうした複眼的視点で1749年以前の初期作品に絞って彼の文学に迫ることの要を唱えているし、J. C. D. Clark & H. H. Erskine-Hill 編 *Samuel Johnson in Historical Context* (2002) の書評【002Z5】でも、18世紀独自の時代性を踏まえることにより多様な 'contexts' での Johnson 研究が成り立ち得ることを本書に読んでいる。

英米で、Whig であった Macaulay の呪縛を逃れて、政治論文における Johnson の保守的姿勢が冷静に論じられ始めたのは1937~1944年頃からであった。1953年にはそれまで等閑視されていた500,000 words ある「議会討議録」(1741-1744)の文学性に注目した Benjamin B. Hoover が *Samuel Johnson's Parliamentary Reporting* において Johnson が描いた生気に溢れる演説者の姿に迫ろうとしている。また1960年になると上述の Greene が本文批評の手法を *The False Alarm* (1770) や *Taxation* に応用して成果を挙げ、また同年に刊行され Greene をこの領域の第一人者に押し上げた *The Politics of Samuel Johnson* は、Johnson を “a hard-headed, skeptical, perfectly independent observer and reporter of the complex political scene of his time” (第2版序文, p. lvi.) と規定したが、それが政治人としての Johnson 像の標準になったようである。

Greene は1990年に上掲書の第2版を出しているが、それは彼が “neo-Jacobite historians” と呼ぶところの J. C. D. Clark や H. Erskine-Hill にその序文のなかで嘯付くことが目的だったようだ。その結果 *The Age of Johnson* 第7 & 8巻(1996, 1997) は3者揃い踏みで全2回戦の論争の場と変じて話題となった。ちなみに同誌第9巻(1998)は Greene 追悼号となってしまったから、人生先は判らないものである。なお【20/】の領域に入る彼の作品の邦訳は見当たらない。

【21/】: *A Journey to the Western Islands of Scotland* (1775) など旅行関連全般

早くも明治27年には大和田建樹が『英米文人傳』【89492】所収の「サミュエル・ジョンソン」(pp. 71-78)で、*Journey* の本文と Johnson が旅先から Mrs Thrale に送った書簡とを「比較せんも亦面白かるべし」との期待を表明している。そもそも旅行記というものは、同じ土地を対象にしながら異なる時代の複数の旅行者が様々な視点で残した記録であり得るばかりか、後年自ら現地踏査して情報収集もできるという性格上、テキストを突き合わせる手法が興味を掻き立てるし旅行記作家の意図を理解するための近道にもなるであろう。

〈第Ⅱ期〉になって、本文の比較対照法は E. V. Gatenby の “Johnson and Boswell in Scotland”【92971】において *Journey* と Boswell の *Tour to the Hebrides* (1785) とで試みられているし、石田憲次の『ジョンソン博士とその群』【93311】も「蘇格蘭西部諸島紀行」(pp. 234-248)で二人の旅行記を対比的に解説し、Iona島の記述に Johnson の感情の高揚を認めている。いっぽう村岡勇は「Thomas Pennant の Scotland 旅行記」【94081】で、Johnson が賞賛を惜しまなかったこの Wales 出身の旅行家(1726-1798)の旅行記(1769, 1772)と *Journey* (1775) とを比較している。

Clifford & Greene (1970) でこの領域の文献を参照すると、1789年の文献【21:43】に続いて1870年の極く短い雑誌記事【21:44】、そして1890年の G. Hill による大著 *Footsteps of Dr. Johnson*【21:45】しか挙げられていないから、19世紀には *Journey* が研究されなかったことが判る。Hill の書は関連

資料を集積したいわば *variorum* 版であったから、我が国での〈第Ⅰ～Ⅱ期〉の論考が示唆した資料を突き合わせるという視点は恐らく Hill の書が直接あるいは間接の出処になっていたであろう。

実際に Johnson が Scotland (1773), Wales (1774), France (1775) に旅行したのは晩年近くになってからであったが、旅行記を読んで育った彼が旅行の道徳的効用を信じていたことは *Rasselas* 他の著述での設定に反映されている通りである。そうした側面を「旅の時代」と呼ばれた18世紀の旅行文学の枠組みで捉えた最初の研究書が Thomas M. Curley による *Samuel Johnson and the Age of Travel* (1976) であったから、一足先に刊行されていた *Yale Johnson* 第Ⅸ巻 *Journey* (1971) とともに、我が国でもこの領域の研究を誘引することになったであろう。

〈第Ⅲ期〉になると、柴崎武夫の「ジョンソンの「スコットランド西方諸島旅行記」」【961Z1】が、Boswellをトーキー映画的旅行記に、*Journey* をスライド的旅行記に喩えている。故に「Boswellの旅行記を土台にしてこそ初めて Dr. Johnson の旅行記から底知れぬ面白味のある彼の人間性を学びとること」が可能と示唆していたのが鈴木知行の「Johnson's *Journey to the Western Islands of Scotland* 小論」【971Z4】であった。いっぽう出口保夫の「「大陸旅行」(Grand Tour)をした人々」【975Z2】は Johnson のフランス旅行(1775)を話題にしているし、本城靖久も『グランド・ツアー』【98341】で Johnson の大陸旅行についての断片的な感想を彼の日記から紹介している。そして秋山肇の「ジョンソン紀行(1),(2)」【97824】は、Highlands 地方と Hebrides 諸島に Johnson/Boswell の足跡を辿りながら彼等の旅の記述と重ね合わせるという我が国では先駆的な記事であった。

岸英朗は「ある旅人のこころ」【98031】で、Johnson は自然の景観に五感の満足を求める旅人ではなく、目的地の風俗・文化についての「知識を予備して旅にのぞみ、それを自分の目で確かめ、深め、広げた旅人」であったとして、好奇心と予備知識の両視点から Scotland 文化を評価しようとする彼の旅での姿勢は *Lives* での批評的手法にも通ずることを指摘している。松原慶子も「サミュエル・ジョンソンの旅行記について」【98134】において、Johnson は旅行記というものは好奇心に訴えながら現地生活についての見聞を授ける文学であるとの信念のもとに *Journey* を執筆していたことを検証し、「人間とはこういうものという認識を基礎にすえて議論をすすめる」手法に *Lives* との類似性を見ている。秋山肇の「旅人としてのジョンソン(一),(二)」【98321, 98432】は、「旅」の視点で彼の半生を1718年から語り始めて、年金下賜を契機に「わが年毎の中部地方漫遊」を思い描けるようになった1763年までを辿っている。鈴木知行の「Edinburgh における Dr. Johnson の足跡」【983Z6】は、彼の Edinburgh 滞在の様子を Mrs Thrale 宛書簡や Bowsell の *Tour to the Hebrides* から再現し、Martin Martin (-1719) や Pennant の旅行記とも比較をし、*Journey* を「18世紀の Scotland の生活研究の論文」と位置付け、彼が *Journey* で Edinburgh を「故意に無視した」理由は連日の歓待に疲れたからであろうと推定する。合計103の注を添えた諏訪部仁の「スコットランドの旅」【98831】は地図上であるいは実際に現地へ赴いて二人の Scotland 旅行を辿るためのガイドブックであり、秋山の【97824】と併せ読んでもいいであろう。

〈第Ⅳ期〉になって、斉藤延喜の“Moral History in Samuel Johnson's *Journey to the Western Islands of Scotland*”【99122】は、1760年頃までの著述に読み取れる Johnson の旅行観が *Journey* に

において変質を来たしていたとして、18世紀になってから従来の旅行観に‘moral history’の観点が付加され始めたという現象に注目している。

その後、江藤秀一による一連の論考が「旅」という視点で Johnson の生活の諸相を捉えようとしている。すなわち「ドクター・ジョンソンの北ウェールズの旅」【00121】は、フランス旅行日記同様他人に読まれることを想定していなかった彼の1774年の日記“A Journey into North Wales in the Year 1774”から Wales 旅行が彼にもたらせたものを考察し、「スレイル夫人のウェールズの旅」【00133】では同じ旅行を Mrs Thrale による日記から眺め直している。ちなみに Wales 旅行日記で Johnson が書き残した自然描写について、かつて小倉多加志が『イギリス文学史要説』【975X3】で‘romantic’な傾向を感じ取っていたことを付言しておく。江藤の「ドクター・ジョンソンのスコットランド旅行」【00431】は、Edinburgh～Aberdeen の旅を追いながら、現地生活の観察から国情を論じようとする彼の手法を読み出す。「ドクター・ジョンソンのハイランドへの旅」【00523】は、Aberdeen～Inverness の道すがらに得た地誌学、民俗学、宗教、教育、文化程度に関する Johnson の所見を纏めるとともに、珍しく彼が「ロマンス的な記述」も残したことを教える。そして「ドクター・ジョンソンのヘブリディーズ諸島への旅」【00532】は、貨幣経済の導入が氏族制度いらいの「服従」という美風を Skye 島から追いやりつつある現状に戸惑いを覚える Johnson の姿を捉えた論考であった。

大きな収穫は、【21/】の領域の看板的作品であるところの *A Journey to the Western Isles of Scotland* が『スコットランド西方諸島の旅』【00631】として全訳されたことである。諏訪部仁、市川泰男、江藤秀一、芝垣茂による共同訳で、英国を代表する Johnson 学者で1985年に本作品の学術版を出していた John David Fleeman (1932-1994) とその未亡人に本訳書が捧げられている。本文の訳と訳注 (pp. 3-257) に加えて、共訳者が現地踏査をしながら撮影した18枚の写真、Boswell の *Tour to the Hebrides* の記述で補いながら二人の旅程を再構成した解説文 (pp. 259-296)、主に *Life* に拠って *Journey* 出版までの経緯を辿りながら刊行後の評判にも触れた「執筆と出版の過程」(pp. 296-303)、「ジョンソンの観察と所見：『スコットランド西方諸島の旅』」(pp. 303-338) などが本訳書の価値を増幅させている。

【22/】： *The Lives of the English Poets (1779-1781)*

Johnson 執筆の52詩人の伝記を集めた *Lives* の何れかに言及した恐らく最初の文献は、明治7年に中村敬宇が著した『西稗雜纂』【87431】であろう。その「詩各有才」(第九丁表) が“Milton”に由来する Milton 評を紹介している。明治13年になって乾立夫/中原淳藏(合譯)『泰西名士鑑』ちゅうの「^{ジョンミルトン}戎彌爾頓傳」【880Y1】もまた“Milton”から伝記部分を大雑把に咀嚼しているが、著者名不詳の *Fifty Famous Men* (1862) を介しての孫引きであった。明治26年の山田美妙の「みるたぬ」【89371】にしても、明治27年の長澤説の『盲詩人』【89451】にしても、“Milton”については未だ間接的受容の段階にあったのかもしれない。というのも〈第I期〉の文献で言及されている詩人の伝記が、明治24年の「古代の詩聖と近世の歌仙 (ジョンソン)」【89191】にその片鱗が窺える“Cowley”の場

合を除いたすべての言及が“Milton”に関してだったのも、もちろん“Cowley”にしてもそうであろうが、彼等執筆者が大部の *Lives* を手に取った結果というよりも海外の Milton 文献を参照しているうちの偶発的・付随的に言及することになったからに過ぎないであろう。もし *Lives* が舶載されていたならば、他の50～51篇の伝記に語られた詩人達への言及も多少は伝わって来たはずである。内田貢魯庵が『ジョンソン』【89471】では「『詩人傳』を著はし、は七十三歳」(p. 140) としか触れていないのもその故であろう。

大正時代には Johnson 関連文献がほとんど目撃されないのであるが、*Lives* の場合には多少の言及があったらしい。すなわち黒田健二郎(編)『日本のミルトン文献(大正・昭和前期篇上)』【98535】の教えるところによると、“Milton”を読んだ西澤富則が大正2年に『歐洲文藝界之逸話』ちゅうの「ミルトンと天候」で Milton の詩想が冬に働かなかったのはひねくれた性格の故と深読みした由(pp. 25-26)であり、大正6年の『藝文』(第8年5號)に掲載された『『假面劇コーマス』を讀みて』では Johnson も *Comus* の価値を認めざるをえなかったと出野彰夫が触れ(pp. 198-199)、大正9年の『英文學研究』(第1冊)に掲載された「英詩に於ける國家觀念の發達を論ず」のなかで齋藤勇が Johnson による‘patriotism’の定義を“Mitton”に引用していた(pp. 246-250)、といった程度の言及に過ぎないのではあるが。

〈第Ⅱ期〉になると文献数も増え、対象とされる伝記の詩人名も多様になり始めるし、テキストを踏まえた上での考察が多くなっている。*Rasselas* ほどではないが、Johnson の作品のうちでも我が国への受容が早かった部類に入るといえよう。

繁野政瑠は研究社英文學叢書版 *Samson Agonistes and Comus* 【929X1】の注釈者として巻頭の「“Comus”に就いて」のなかで“Milton”の *Comus* 論を紹介しているが、同じ繁野の『『失樂園』研究』【932Y1】では“Milton”での論点について「ジョンソンの説で注意すべきは、第一、閑話を辯護したこと、第二、エピックの主人公は不幸に終つても構はないといふこと、第三、人間味の缺乏を喝破したこと、第四、ドライデンの平板説を論破したこと、第五、「コーマス」に「失樂園」の縮圖を見出したこと、第六、靈物の矛盾を指摘したこと、第七、主人公をアダムと断定したことなどである。このうち最も深く後の批評家を動かしたのは、人間味の缺乏を論じた點であらう」(p. 212)と総括している。いっぽう齋藤勇の「Collinsの詩(7)」【93181】は“Collins”を利用してこの詩人の憂鬱症を語っているし、黒田健二郎(編)『日本のミルトン文献(大正・昭和前期篇中)』【98826】が引用(pp. 698-723)するところでは、Johnson が指摘した *Lycidas* の諸欠点に対して齋藤が『ミルトン』(研究社、1933年)で反証を試みているが説得力のあるものではない。

〈第Ⅱ期〉になっても暫くは“Milton”が話題の主役であったが、齒応えのある *Lives* 論が見られるのは石田憲次あたりからであろうか。彼は『ジョンソン博士とその群』【93311】の「詩人列傳」(pp. 193-220)において、大物詩人たちを知的に対等な立場で記憶にまかせて自由に記述した Johnson の執筆振りに感心しつつ、「最も異彩を放てるもの」である“Savage”に「ジョンソンの精妙細緻な観察」の跡を認め、「最も興味深きもの」として“Cowley”, “Milton”, “Dryden”, “Pope”, “Swift”, “Addison”の諸篇に目を向けるなど、従来にない視野の広さで *Lives* を語っている。福原麟太郎も

同じ頃に「英詩の Diction (2)」【933Y2】のなかで“Dryden”に「詩歌を散文から區別する善美なる連語法」という Johnson の diction 観を読み出しているし、「EmpsonとGray (上)」【93631】では福原の主たる研究対象でもあった詩人 Thomas Gray の伝記を取り上げている。

日頃から Johnson を好まなかったと思われる平田禿木は、*Lives* についても『傳記・書簡及日記文學』【941Z1】において、「詩に對するその獨斷的な評論に至つては、時代相應のもので、先づ史的價值しかないものとみるが妥當であらう」と相変わらず手厳しい (p. 16)。しかし当時の大勢は Johnson の側に立っていた。例えば1930年代に北村常夫が T. S. Eliot の“The Metaphysical Poets” (1921) を「形而上學的詩人」【933Y6】として訳出し、岩波文庫も矢本貞幹訳で「形而上詩人」を『文藝批評論』【93852】に収録しており、俄然“Cowley”への注目度が高まることになったからである。福原麟太郎の「英文學新講(12)～(14)」【93421】は“Cowley”に Johnson による対形而上詩評価を読み解き、それに Eliot が下した今日の再評価をぶつけている。また佐山榮太郎の『形而上詩人』【93751】はこの分野の「最初の纏まつた批評」(pp. 7-29)として、“Cowley”から Johnson の所信にあたる部分を引用し和訳している。

Lives の執筆者に‘reason’を重んずる‘moralist’の姿を読み出した柴崎武夫の“An Introduction to Dr. Johnson's *Lives of the Poets*”【93941】は密度の濃い解説で、後に「*Lives* に就いて」と日本語化されて *Lives of the English Poets: Vol. I (Milton)* 【94341】の巻頭を飾ることになる。柴崎は同書の前付に“Milton”の「梗概」(pp. xxv-xxxvi)も執筆していたが、こちらは戦後の改訂版【949Z1】から削除されている。ちなみにこの巻での福原麟太郎による注釈について、黒田健二郎は『日本のミルトン文献(大正・昭和前期篇下)』【99124】の解説(pp. 542-543)で「福原独自の注釈が、かなりの箇所ほどこざれていることを、見のがすべきではない」と、それこそ見逃せない指摘(警告?)をしている。

同じく *Lives* に「年老いた文人の、文學に對する態度をうかがふことの出来るもののみ幾つか拾ひ上げて見た」という福原麟太郎の「Doctor Johnson」【941X2】も、同叢書の *Vol. III (Pope)* 【94343】に「ドクター・ジョンソン」として転載された。このようにして福原は1930～1940年代に我が国での *Lives* 研究の推進者となっていった。その結果、福原が「Collins (1)～(3)」【94321】において“Collins”を全訳した将に1943年に、彼が注釈した研究社英文學叢書版 *Lives of the English Poets: Vol I (Milton), II (Dryden), III (Pope)* 【94341, 94342, 94343】が一挙に刊行されている。時局柄を考えると敵性言語による不要不急の合計で700頁に近い文学作品の専門書が印刷されたことに違和感をすら覚えるが、当時の英文学界の研究水準を示しておこうとの意地がたまたま *Lives* にぶつけられたのかもしれない。成程これだけの詳注版は英米においても Hill 版を措いて他には存在していなかったと思われる。

〈第Ⅲ期〉になって早々には、【93311】での所説の残響のような石田憲次の「ジョンソン博士」【94841】や、「何よりも Johnson 自身の風格が窺はれる点に盡きぬ興味がある」として“Pope”の一部を訳注した上田勤の「Pope and Dennis」【949Y1】や、“Cowley”から形而上詩人の作風と限界を総括した第50～63パラグラフを訳注した福原麟太郎の「The Metaphysical Poets」【95191】、

同じく「センチメンタルな形容詞が少なくなっている」特徴に注目して「ジョンソンの文章は『詩人傳』が一番よい」と評した福原著『英文學の特質』【95441】所収の「ジョンソンとボズウェル」(pp. 166-177)などが見られるが、この時期の論考は読者のレベルを戦前のそれにまで引き上げるウォーミングアップの段階にあったのかもしれない。

柴崎武夫の「Johnson の *Lycidas* 批評」【95491】は Johnson の牧歌観と彼の *Lycidas* 酷評とを“Milton”に要約しており、Milton 批判に Johnson の人生観や文学観を読み出そうとした柴崎の後年の論考「ジョンソンとミルトン」【97335】に繋がって行くものであろう。村上至孝は「十八世紀の詩論：その一、その二」【95431, 95534】において、“Pope”に Johnson の Pope 像、“Cowley”に彼の批評上の基本姿勢、“Dryden”に洗練された詩語に対する称賛、“Milton”に *Paradise Lost* 他の作品に対する彼の評価を読み出してから、Johnson を「幾つかの偏見を免れないながらも…英国文学批評史上の第一級に列する人」と穏当な位置付けに落ち着いている。

Milton 論ばかりではない。橋爪洋の「ジョンソン博士のトムソン論」【955Z2】は“Thomson”を解説して、「ジョンソンの作品に即しての独特の深い考察はトムソンの場合にはかなり不足の感」があると判定している。佐山栄太郎の「ジョンソン博士の「カウリー傳」寸想」【955Z8】も、1668年の Thomas Sprat による Cowley 伝(1668)と比較することで“Cowley”を「スプラットを修正し、或は補充する立場」の伝記と評している。そして柴崎武夫の「Dr. Johnson の人間批評」【955Za】は【95431】同様に“Pope”に彼の Pope 観を読もうとしたものである。

戦後の Eliot ブーム到来の反映であろうか、Eliot が Johnson に触れた文献だけでも篠田一士訳で「形而上派の詩人たち」が彌生書房版『エリオット選集第二巻』【95941】に、村岡勇訳の「形而上詩人 1921年」が中央公論社版『エリオット全集 3』【96062】に、安田章一郎訳「ミルトン II」も同『エリオット全集 4』【96092】に収録されている。既に北村訳【933Y6】もあった「形而上詩人」は、Eliot が「最も異質な観念が暴力によって結びつけられている」例を *Vanity* の第219-222行に指摘しながら Johnson が「形而上詩をその欠点で規定することに成功しなかった」と判定した1921年の講演であったが、そのなかの「我々はジョンソン(彼に不賛成を唱えるのは危険である)の批評を…しりぞけてはならない」との寸評は、戦後の Johnson 研究書や形而上詩論において度々繰り返されるところとなる。また「ミルトン II」は、Johnson が「なにゆえミルトンに敵意をいだいたのかの理由と正当性」を実際に詩作する詩人であった Eliot が明らかにしようとした1947年の講演であった。

福原麟太郎は“Collins”を【94321】で全訳していたが、それについての論考も登場している。橋爪洋の「ジョンソン博士の「コリンズ伝」」【95951】は、Johnson が「旧友 Poor dear Collins の伝を率直公正に」語ったとはしながらも、彼が Collins の「浪漫的な情趣」を評価し得なかったことを遺憾としている。秋山肇は「Dr. Johnson の批評理念」【96043】において、“Cowley”を主たる材料にして Johnson 流の詩論を再現しつつ、作品に評価を下す Johnson のうちに「自己の批評理論の骨子」の存在を認めようとするなど、彼の批評家としての諸相を読み集めている。“Swift”に探った論考も登場している。柴崎武夫の「Johnson と Swift」【96121】であるが、Johnson が Swift

の人間性に強い関心を抱いたことに注目している。

篠田一士は「ジョンソン(1)～(3)」【964X4】で、各詩人伝を単体にバラして論ずるよりも総体としての *Lives* に光を当てようとする。すなわち *Lives* が読む者の心を和ませ魂を高揚させるのは古典主義の批評原理とは別に読者を惹きつける何等かの源がそのなかにあるはずだとして、*Lives* の作者は「詩を読むよろこびを直截に語り、すぐれた詩とはどういうものであるかを、きわめて具体的な方法でたえず読者に教えてくれる」点を強調している。我が国の英文学研究が *Lives* を52詩人の伝記の集合体として取り上げ、それを総体として味合えるだけの成熟の域に達することが今後に求められたのかもしれない。

秋山肇の「Dr. Johnson と作家の美德」【96532】は、*Iliad* の推敲に勤しむ Pope の姿を Johnson がわざわざ“Pope”に挿入した背景には、彼の眼にそれが詩人の美德と映ったからで、読者が勤勉さを学び取るべき麗しい例としてその姿を提示しようとの動機が働いたとする。更には読者に‘useful pleasure’を提供しようとしてきた Johnson の自在な筆遣いとは対照的な Pope の入念な推敲を Johnson が多とした真意についても考察している。黒田健二郎の「ドクター・ジョンソンのミルトン伝」【967X2】は、Milton の初期の詩を認めていなかった Johnson が *Paradise Lost* を叙事詩として積極的に評価していたことから、両者に共感し合うところがあったのではないかと推測する。平善介の「Dr. Johnson の形而上詩人論」【96891】は、Johnson が“Cowley”で与えた wit の第二、第三定義を手掛かりに“Waller”, “Addison”, “Dryden”, “Denham”を読みながら、*Lives* に一貫する Johnson の形而上詩観を考察したものである。高山修の「ジョンソンとスウィフト」

【971Y6】も柴崎の【96121】同様 Swift に対する Johnson の態度に注目し、彼の偏った Swift 観は Samuel Madden (1686-1765) に感化されてのことであろうと推測する。やはり Johnson が嫌った詩人について、飯島武久の「サミュエル・ジョンソンのグレイ批評」【97334】は嫌悪の情が彼の Gray 評価に影響したか否かを“Gray”に検証し、人物評での偏向は見られないものの作品論では Gray の意図や狙いを彼が把握し損ねた場合もあったと判定するが、当時批判されてきたほどには偏見にも悪意にも囚われておらず「Johnson らしい個性が如実に覗かれるような批評」であると好意的な評価になっている。

新井明が『ミルトン研究』【97441】の巻末に執筆した「参考文献」で、Johnson の“Milton”について「今世紀の Milton 研究も結局はこの評伝に帰らなくてはいけない」(p. 7)とコメントしているが、それが Milton 研究者の側からの評価であるだけに寸評とはいえ重みがある。しかもその“Milton”が同じ1974年の『世界批評大系1』に朱牟田夏雄訳で「ミルトン伝」【97461】として収録されることになった。

松原慶子による「Johnson の *Lives of the English Poets*」【977Z1】は、“Milton”, “Dryden”, “Cowley”, “Waller”, “Savage”と複数の伝記に‘truth’の意味を読み集めて、「人間主義的で、プラクティカルな生活を大切にされた彼の姿勢」が批評基準のバック・ボーンであったことを明らかにしている。白井毅の「John Gay の金字塔」【98182】は、恐らく我が国では初めて“Gay”を取り上げて内容を咀嚼していた。江藤秀一も「ジョンソン博士の『リトルトン伝』」【98737】で、比較的

マイナーな “Lyttelton” に注目し、そこでの評価が引き起こした Johnson と Elizabeth Montagu (1720-1800) との確執について紹介している。クランメル房子の「ジョンソンの『ミルトン伝』【98835】は、“Milton”における揶揄的な Milton 像に、‘humour’の感性を具えた Johnson の陰画化された像を認めて意表を突く。

ここから〈第Ⅳ期〉に入るが、【22/】の分野では文献数が多いために、昭和から平成時代が変わったからといって文献に質的变化が認められるというわけではない。したがってこの時期の文献についてもほぼ時系列に沿って追いつけることにしよう。

秋山肇による「Dr. Johnson の『詩人伝』(一)、(二)」【99033, 99135】は秋山の【96532】の延長線上に位置する論考と見られ、(一)は Johnson が半世紀の読書経験と人生経験を注ぎ込んで *Lives* を執筆した背景に、「一般読者」の視点で批評をすることにより読者を裨益しようとするモラリストらしい動機が働いたと推論し、(二)では彼が想定した「一般的読者」というのが「不変の人間性に期待をおく普遍的な読者」を意味したために、*Lycidas* や Gray の *Odes* に対する彼の批判も人間性という批評基準に照らしての帰結であったと考察し、更に形而上詩人批判で自らの詩の原理を展開させている “Cowley” にも注目する。そして中川忠の「*Life of Pope* 覚書」【99038】は、「ウーンとうなりたくなるほどおもしろいと思える箇所」を取り上げた覚書風な紹介であるが、中川はこの後『ポウプ伝』【992Z1】を、全446パラグラフのうち第96～99パラグラフを省略して訳出することになる。

総計52詩人の伝記からなる *Lives* には未開拓の詩人伝がたくさんある。藤井哲が1990～1993年に “Roscommon” や “Collins” について、Johnson が *Lives* に収録する際に施した加筆の実態とそれら伝記の及ぼした影響を調査したことは【13/】の領域で触れた通りである。

伊澤東一の「『リシダス』テキストの一部としてのジョンソン博士の批判」【99425】は Johnson の *Lycidas* 批判が既に Miltoniana に組み込まれている実状を捉えて “Milton” から当該部分を訳出し彼の主張を読み解いたもの。久末源治の「サミュエル・ジョンソンのスウィフト論」【995Z3】は、面識のない人物の伝記を執筆する際に対象の人物像や思想をイメージしてきた Johnson が Swift の複雑な性格に違和感や困惑を覚えていたことを例証する。箭川修の “The Reader and the Critic in Samuel Johnson's *Life of Milton*” 【99692】は、Johnson が読者の立場で批評したことにより読者が Milton に接近するのを容易にしたし、読者が自らの批評眼を養うように彼は仕向けていたとの解釈であり、【96532】【99033】【99135】に近い着眼を “Milton” に対して適用してみた論考と思われる。いっぽう鈴木雅之による「ロマン主義時代のミルトン像」【00221】は、W. Hayley の *The Life of Milton* (1794; 1796) を援用して Johnson により「歪められ(誤読)された」Milton 像の修正を試みた論考であった。

21世紀に入って登場回数が多い詩人伝は “Swift” であろうか。加賀屋俊二による「サミュエル・ジョンソンの「スウィフト論」について(1)、(2)」【00234, 00337】は、Johnson が Swift を批判した理由を Swift の党派性や人間性が彼の癩に触ったからであろうと推測しつつ、Swift が Johnson にとって重要度第9位に位置する作家なればこそ彼はフェアな姿勢で “Swift” を執筆したはずと付

度もする。そして中川忠訳の「スウィフト伝(サミュエル・ジョンソン)」が『スウィフト：伝記と詩篇』【005Y3】において公刊され、*Lives* ちゅうの主要伝記がまた1点邦訳されたことになる。

芝垣茂の“Dr. Samuel Johnson's Critical Method focused on his *Lives of the English Poets*”【00338】は、主に“Pope”から観た *Lives* の特性、批評家および humanist としての Johnson、彼の批評の手法と実践と現代性とを纏めている。いっぽう笠原順路は『地誌から叙情へ』【00435】の序章 (pp. 3-7) で、Johnson が“Denham”において‘local poetry’を定義し、また「地誌詩」も論じていたことを教えているし、海老澤豊も『田園の詩神』【00583】ちゅうの「ジョンソン博士、無韻詩をくさす」(pp. 313-320) で、*Lives* や Boswell の *Life* に散見される農耕詩に対する Johnson の悪罵や嘲笑を摘録するなど、Johnson 研究者がこれまで見過してきたような着眼で *Lives* に切り込んで行く試みであることが興味深い。

我が国では書評されなかったようであるが、Robert Folkenflik による *Samuel Johnson, Biographer* (1978) は伝記作家として彼を論じた最初の纏まった研究書であった。いらい30年間に *Lives* 研究は様々な成果を産み出してきているが、方法論や文体論的考察以外では詩人伝全52篇を集合体として考察するよりも、“Milton”, “Pope”, “Cowley”, “Dryden”, “Savage”, “Gray”, “Swift”といった主要各篇に分散して研究されることが多い。Johnson がそこで示した特異な論調や、それに伴う伝記・人物評・作品論セクション間に生じる評価上の軋みを理由付けるために、人物評価と作品評価の間に例えば彼の ethics の観念が通底したと解釈するなどして整合性を求めようとする方向性が強かった。その結果マイナーな存在であったが故に小規模な詩人伝に注目して分析した業績は少ない。

折りしも2006年には Hill 版(1905)を大幅に増補改訂した Lonsdale 版 *Lives* が登場したこともあり、今後に向けて *Lives* 研究に拍車が掛かることは疑いを容れないが、群小詩人の伝記にも研究が及ぶためには、*Lives* という序文が寄せられた先の *The Works of the English Poets* (1779-1781) 全58巻や Lonsdale の教える各篇の種本を参照できる環境を整えることが必要になってこよう。

なお【22/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【94321】【95381】【96351】【96981】【97461】【990Z3】【992Z1】【005Y3】 また中川忠訳『ドライデン伝』が2006年7月にあぼろん社から出版されたことを追記しておく。

【23/】：Johnson の書簡

Dictionary の刊行直前に *The World* 誌に称賛の論文を寄せて Johnson の後援者たらんと目論んだ Chesterfield 伯爵に、その援助を7年前に欲しかったと彼が嘸み付いた1755年2月7日付の“Dr. Johnson's Letter to the Earl of Chesterfield”は、作家が patron に訣別を告げて作家業の独立を宣言したことを象徴する書簡として英文学史で言及されることが多く、我が国の英文学徒は Johnson の書簡と聞けば Chesterfield 宛のものを連想するよう条件付けられている。したがって以下に示すように、Johnson の書簡を主題にした文献はほとんどがこの書簡に触れている。

〈第I期〉では明治25年だからかなり早い事例と思われるが、磯邊彌一郎の『英文学講義録第三巻』【89291】が Chesterfield 宛書簡の原文がなくて注釈のみを収録しているのは講義録の故である

うか。次の3点はすべて明治29年で増田藤之助によるもの。すなわち「博士デヨンソン「書翰」【89611】は「文學獨立を報ずる一曉鐘とも謂ひつ可き」ところの Chesterfield 宛書簡の原文・和訳・解説であり、「ジヨンソン(下)」【89681】は同書簡の背景を解説し、「スキントン英文學中のジヨンソン「書翰」【89682】も原文・訳・注を印刷している。

しかし明治34年の「Johnson と Mrs. Boswell との往復書簡」【901Z1】は1782年9月7日付の Boswell 夫人宛の病氣見舞状とその返書を取り上げている変わった文献例であった。明治35年の「Dr. Johnson の書簡」【902Z1】も Reynolds が闘病中であったとは知らなかった Johnson が1764年8月19日付で送った無沙汰を詫げる書簡を注釈している。明治38~40年に行った講義「十八世紀英文學」に加筆をして明治42年に出版した『文學評論』【90931】ちゅうの「文學者の地位」を講じた章で夏目漱石が Chesterfield 宛書簡を候文に邦訳しており、いらいこの訳文が原文以上に有名になった。翌年の石川弘による『泰西名家の手紙』【91071】にも「チエ伯に奉るの書」(pp. 124-129)が訳出されている。

〈第Ⅱ期〉に属する文献では、「Samuel Johnson to Lord Chesterfield」【921Z1】は、双田穰が脚注を付け対訳にしたものであった。石田憲次著『ジョンソン博士とその群』【93311】の「書簡より見たジョンソン」(pp. 101-117)がある程度纏まった最初の書簡紹介であろう。そこでは彼の生涯を追いながら Chapman 編 *Selected Letters* (1925) を拾い読みし、彼の人生訓にも触れ、後半では「彼の最も嚴肅な、最も崇高な文字は死を眼前にした時に生まれる」として Mrs Thrale 宛書簡から彼の切々たる思いを引用している。また書簡から読み取れる Johnson 像について「微妙繊細なる心遣ひを缺いでみた人ではなかつた」(p. 115)との指摘も見られる。

〈第Ⅲ期〉には、福原麟太郎が『世界人生論全集5』【96351】で訳出した「書簡選」(pp. 234-247)が彼の人生論を投影したものとして注目される。その内訳は Chesterfield 宛の他、彼が再婚を考えたとされる Hill Boothby (1708-1756) 宛の見舞状。母親 Sarah の死を聞く直前に彼女宛に書いた手紙(石田の【93311】に言及あり)。Boswell の結婚を祝福した手紙。‘Ossian’ が捏造であると断固主張した James Macpherson 宛。従僕 Francis Barber 宛の出先での勤勉を促した手紙。Bennet Langton の7歳になる娘に宛た「習字のように大きくていねいに書いてある」手紙(【93311】に言及あり)。男子が心情を手紙に託することの意味合いを訴えた Mrs Thrale 宛手紙(【93311】に言及あり)と、Gordon Riots で Thrale 家所有の醸造所が受けた被害を報告したもの。彼女が Gabriel Piozzi と再婚することを嘆いた Thrale 未亡人宛の最後の書簡、の計9点である。この「書簡選」は『福原麟太郎著作集2』【96981】にも再録されている(pp. 363-366&542-547)。

『學鏡』に福原が連載した「デヨンソン大博士」【96692】のうち1967年12月に掲載された「(15) チェスターフィールド卿への手紙」が、Thomas Warton 宛書簡と Chesterfield 宛書簡から *Dictionary* 出版直前の Johnson の心境に迫っており、それがそのまま『デヨンソン』【97211】にも転載されている(pp. 173-185)。なお同志社女子大学が1968年に改訂した *Masters of English Literature* 【96841】は旧版が収録しなかった Chesterfield 宛書簡を初登場させており、それが英文学史での必須知識として一般に認知されていた状況を窺わせる。

我が国で本格的に彼の書簡を論じた考察は、中原章雄の「『チェスターフィールドへの手紙』再考」【976X1】が最初かもしれない、有名な1755年2月7日付書簡の行間から Johnson の屈折した思いを読み出そうとしたものであった。また谷口富男の「サミュエル・ジョンソン」【98926】が、出版業者 Edward Cave に宛てた Johnson の書簡を訳出しながら London での Johnson の足跡を辿る手段に利用している。

Johnson の学術的研究の黎明を告げた一連の Hill によるテキスト編纂のなかに *Letters* (1892) もあり、書簡1,043通を収録していた。その60年後には R. W. Chapman が Hill 版を土台に原資料に遡って Johnson の読み難い文字を解説し照合する徹底した校訂で1,515通を *The Letters of Samuel Johnson* 全3巻(1952)に集積した。しかし Johnson は自分の書簡が出版されるのを避けるために故意に素っ気なく書いていたとされ (Boswell, *Life*, 8 May 1781)、書簡は補助的な伝記資料としてのみ利用される場合がこれ迄は多かった。その後 Bruce Redford 編 *The Letters of Samuel Johnson* 全5巻(1992-1994)が Hyde Collection を駆使して新たに52通を追加、過去40年分の研究成果を織り込んだ新版を出したが、Chapman が Hill 版から踏襲していた書簡番号を廃してしまい、Chapman 版が小活字で挿入していた Mrs Thrale からの書簡を除外してしまったために、Chapman 版の利用価値を皆無にするには至っていないが、生活者 Johnson の実像を知るための情報源としての書簡に対する関心を研究者に呼び起こすことになった。

なお【23/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【89611】【89682】【90931】【91071】【921Z1】【96351】【96981】【98926】

【24/】：Johnson の日記，祈禱，説教類および信仰関連

この分野の文献は我が国では〈第Ⅱ期〉から登場し始めるようで、石田憲次著『ジョンソン博士とその群』【93311】は「祈禱と冥想」や「説教集」を「最もインティメイトな心の消息を傳へたもの」として規定し、「神への憑依の神秘を高調しながら…宗教の倫理的方面を忘れないところ」が Johnson の健全さであるとしている (pp. 117-130)。半年後 *Works of Johnson* (1825) 所載の “Prayers and Meditations” (1785) を鈴木二郎が『祈禱と黙想』【93361】として訳出。その翌年には石田と鈴木による共著書『ジョンソン』【93431】が、この “Prayers and Meditations” を「最も悲痛な人間的告白」であると位置付けし、彼の宗教は「罪悪感」と「最後の審判に關する壯嚴なる想念」と「より善き生活への熱望」とから構成されていたと解説している。

〈第Ⅲ期〉の幕開けは、*Yale Johnson* 第Ⅰ巻として *Diaries, Prayers, and Annals* (1958) の刊行を報じた書評【96021】であった。すなわち「十六束の材料があるのを一応全部ほぐして年代順に整理し直し、いちいち日付を追って配列」したテキストの普及は Johnson の信仰についての研究の基礎資料を用意したことになり、その後の論考への呼び水となったはずである。

岸英朗の「S. ジョンソンにおける詩と宗教の問題」【962Z3】は、彼の宗教的情熱と詩的情熱とが英語で書かれる詩にあっては分離してしまう理由を、読者の眼に晒される ‘impersonal’ な詩作品と ‘personal’ な宗教的情感との間に彼が違和感を覚えたからであろうと考察する。*Diaries, Prayers,*

and Annals (1958) を読んだ神山妙子は、怠惰克服への戦いが彼にとっては魂の救済への宗教的な戦いであったと“Samuel Johnson the Idler”【964X1】で考察している。高橋源次の“Dr Johnson's Religious Life”【97733】は、身体的諸障害に起因する苦痛を Johnson に耐えさせたのは信仰の力であったことを“Prayers and Meditations” (1785) に読んでいる。鈴木善三の「サミュエル・ジョンソンにおける神観念」【98121】は新刊の *Yale Johnson* 第XIV巻 *Sermons* (1978) も取り込んで「十八世紀の思想風土との関連で、ジョンソンにおける神観念という問題を考察」しようとするものであった。

Johnson の日記は宗教絡みではない読まれ方もしていた。【21/】の繰り返しになるが、『イギリス文学史要説』【975X3】の小倉多加志は1774年の Wales 旅行日記を読み、彼が書き残した自然描写に‘romantic’な傾向を感じ取っているし、江藤秀一も四半世紀後に「ドクター・ジョンソンの北ウェールズの旅」【00121】執筆のために彼の日記“A Journey into North Wales in the Year 1774”を読んでいる。江藤はまた「ジョンソン博士の幼年時代」【981Z4】を纏めるにあたって彼の日記や年譜“Annals”を多用したし、同じようにして「Dr. ジョンソンの *Prayers and Meditations*」【982Z4】では宗教人・慈善家・病人の三面から彼を捉えようとしていた。

Yale Johnson 第XII巻 *Sermons* (1978) の刊行は泉谷寛に Johnson の「説教」を邦訳する事業に取り組ませることになった。その皮切りは「人生の悲惨さについて」【98772】で、以後1996年まで掛かって現存する28本の説教の全てを訳出することになる。そしてそれらは後述する【99731】として単行本化され、鈴木一郎の『祈禱と黙想』【93361】と併せて、Johnson の「最もインティメイトな心」の消息」が日本語で読めるようになったことになる。

鈴木聡の「ジョンソンと『アビシニアへの旅』」【98784】は、Johnson が英訳(1735)する際に用いたフランス語版を、すなわち原典 *Itinerário* (1639-1640;1669) からフランス語に重訳した Le Grand 版(1728)を、英訳文と読み較べることで Johnson の宗教的姿勢に着目しているが、その姿勢については、永嶋大典の『ジョンソンの死と信仰』【995X1】により、イエズス会神父 Lobo が残した原典が Johnson によりプロテスタント的立場で自由訳されたと解説されている (pp. 151-153)。この永嶋の業績から〈第IV期〉の時代に入っている。

永嶋【995X1】の第Ⅱ部「ジョンソンの信仰」(pp. 143-191)は、主として言語作品を情報源にして、「幼少期」～「オックスフォード大学時代、ローとの出会い、『メサイア』」～「『アビシニア航海記』」～「結婚、上京、『ジェントルマンズ・マガジン』時代 (1735-46)」～「『英語辞典』、『テオドールの幻想』、『人の望みの空しさ』、『アイリーニ』、『ランブラー』その他 (1746-53)」～「『ラセラス』前後 (1753-73)」～「『スコットランド旅行記』、『詩人伝』その他 (1773-83)」～「『祈禱と瞑想』、『説教集』」～「ジョンソンの信仰」～「ジョンソンと死の恐怖」といった章題のもとに Johnson の信仰生活を年代順に辿ったもので、我が国では従来になかった視点からの Johnson 伝に書き上げられている。そのなかの「ジョンソンの信仰」の章 (pp. 185-188)は、彼の信仰がアルミニウス派 [Arminianism] であったろうことを教えている。

そして泉谷寛訳出による全356頁の『永遠の選択：サミュエル・ジョンソン説教集』【99731】で

あるが、本書は偽筆とされる第21説教を含めた第1～25説教を *Works* (1825) 所収の *Sermons on Different Subjects Left for Publication by John Taylor, LL.D.* (1788) から、また第26～28説教と一部 Johnson の筆になる“A Letter to Samuel Johnson, L.L.D.”とを *Yale Johnson* 第XIV巻から訳出している(各題目と初出時の【文献番号】を脚注に列挙しておく)¹⁸。そして訳者泉谷による「あとがき」(pp. 353-354)には「当時の人びとの人生もわれわれ以上に厳しかったはずである。しかし、彼等は人生の選択だけでなく、もうひとつの不易の世界を持ち、その選択の領域を準備していた…。これが彼等の忍耐と希望の根源であり、ままたらぬ現実に対処する活力であり推進力となっていたのではないだろうか。…ジョンソンの日々の思索と実践はこの選択の確執との戦いであつたのであろう」と記して Johnson における説教の意義が総括されているが、通読するに幾評かの忍耐を要する『説教集』の訳者の言葉として傾聴するに値しよう。

石井善洋の“The Religious Thought of Samuel Johnson”【99735】は、Johnson が *Sermons* において意図した‘the moral principle’と‘the Christian principle’との融合は、彼の‘the doctrine of charity’において達成されたとする解釈を示しているが、Johnson の宗教的側面に迫ろうとした論考はこれを最後に『文献目録』にはもう登場しない。

ところで、『サミュエル・ジョンソン百科事典』(原著1996/邦訳【99921】)の「Religion」項末尾には、Johnson の成人後の信仰については M.J. Quinlan, *Samuel Johnson: A Layman's Religion* (1964) を、受けた信仰教育については C.F. Chapin, *The Religious Thought of Samuel Johnson* (1968) を、信仰全般については C.E. Pierce, *The Religious Life of Samuel Johnson* (1983) を参考にすると書いてある。それで ECCB で当該文献の書評をチェックしてみると、評者を得られなかったと思しき Quinlan には他誌上の書評情報だけでコメントがなく、Chapin に対しては論旨の混乱が長々指摘され“another book on the same subject”が望まれると辛辣に結ばれている。Pierce には“The lack of precision here is symptomatic of the book as a whole.”とか“The simplification necessary to elevate Johnson to tragic hero has here reduced him to a wooden character in a second-rate tragedy.”といった寸鉄人を刺す語気で欠陥がたつぷりと挙げつらわれている。キリスト教圏なればこそ、この領域では日本とでは比較にならないほど業績が受け入れられ難いであろう。最近の英米での研究書の少なさがそのことを物語っているように思われる。

なお【24/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【93361】【98772】【99151】【992Z2】【992Z3】【99373】【993Z2】【993Z3】【99475】【994Z3】【994Z4】【99573】【995Z2】【99671】【99731】

¹⁸ 1. 結婚について【初出:993Z3】; 2. 悔い改めについて【99475】; 3. 恐怖と心の頑なさについて【992Z2】; 4. 慈善について【994Z3】; 5. 人生の悲惨さについて【98772】; 6. 高慢さについて【99373】; 7. 古代の宗教について【994Z3】; 8. 知者のうぬぼれについて【99373】; 9. 聖餐式について【99573】; 10. 自己欺瞞について【99373】; 11. 愛と同情について【994Z4】; 12. 人生の空しさについて【992Z3】; 13. 敬神について【994Z3】; 14. 神への信頼について【992Z3】; 15. 人生の空しさについて【992Z2】; 16. 神の属性について【993Z2】; 17. 偽証について【994Z4】; 18. 欺瞞について【993Z2】; 19. 慈善について【99573】; 20. 宗教へのあざけりについて【993Z3】; 21. 神の善性について【995Z2】; 22. 聖餐式について【99573】; 23. ねたみと党派心について【99475】; 24. 義務と権威について【99475】; 25. 靈魂の不死性について【993Z2】; 26. 犯罪と処罰について【99671】; 27. 慈善について【99671】; 28. 信仰と悔い改めについて【99671】

【25/】：その他の Johnson による作品

Johnson によるマイナーな作品が我が国で話題にされるのはほとんどの場合〈第Ⅲ～Ⅳ期〉に入ってからのものであるが、金子健二の『東洋思想の西漸と英吉利文學』【93441】のみ〈第Ⅱ期〉にあって、*Rasselas* や *Irene* と並べて *A Voyage to Abyssinia* を解説していた。この *Voyage* を英訳し1735年に出版した経験のあった Johnson は、Edward Cave が主宰する *The Gentleman's Magazine* (GM) に寄稿し始めた1738年前後に職業作家への道を踏み出した。その頃の彼を捉えた E. A. Bloom の *Samuel Johnson in Grub Street* (1957) への書評【95871】によると、「ジャーナリストとしての彼の仕事は、彼が苦闘しながら円熟してゆく過程を示している」というのが Bloom の結論であった由。また出口保夫が「雑誌ジャーナリズムの登場」【974Y1】や「イギリス文芸雑誌の発達(2)」【98356】で、GMの寄稿者としての Johnson が「日に4ペンス半のくらし」を強いられながらジャーナリズムに深く関わっていった様子に触れている。

Johnson が GM に書いた文章のうちに“On Gray's Epitaph” (1738) と “An Essay on Epitaphs” (1740) があるが、岸英朗は「エピタフという名の詩」【98312】で後者から Johnson の墓碑銘観を抽出し、それをラテン語で書くことに彼が執着した背景を述べたり、Wordsworth の墓碑銘論とも比較をしている。いっぽう泉谷寛は「墓碑銘に関する考察」【986Z5】で1738年と1740年の両篇を訳出している。Johnson の墓碑銘論は〈第Ⅳ期〉になってからも考察がなされており、桑子利男が「S. ジョンソンの二つの〈墓碑銘論〉」【99424】で、いわば理論編たる “Essays upon Epitaphs” (1740) と応用編たる “A Dissertation on the Epitaphs written by Pope” (1756) とを読み較べて、「説示のしかたやニュアンスなどに多少の変化や付加」があったことを指摘している。彼が生涯に書いた4篇の墓碑銘のうち、Goldsmith に、ヴァイオリン弾きの Claudius Phillips に、Hogarth に捧げた3篇と、Johnson のために Soame Jenyns が書いた墓碑銘を訳出したのが岡地嶺著『英国墓碑銘文学序説』【000X2】であった。

その Jenyns が *A Free Inquiry* (1757) で説いた序列的宇宙観を踏まえた必要悪の容認は Johnson に *Review of Jenyns* (1757) を書かせることとなり、高橋源次は “Dr Johnson on Evil” 【97832】でそれを要約している。その後の Jenyns 論は泉谷の独壇場で、先ず「ソーム・ジェニンス著『悪の本質と起源に関する自由な設問』論評」【985Z1】で *Review* を訳出し、「ソーム・ジェニンスの〈時間〉観」【985Z2】で Jenyns を含む18世紀人の時間意識を考察し、「ソーム・ジェニンスにおける「悪」の問題」【98633】で「弁神論の典型的な思索の形」を考察し、「ジョンソンとソーム・ジェニンス」【98671】では両者が「思想的性格においては…相違点があったが、その内容では共通する処多々あった」と評するなどしている。

更に泉谷は「教育に関する考察」【986Z4】で、Dodsley が纏めた教訓書 *The Preceptor* に Johnson が寄せた “Preface” (1748) も訳出しているが、この “Preface” については既に高橋源次が *Samuel Johnson* 【97841】所収の “What to Teach” (pp. 9-11) で、若者が教育されるべき12分野についての Johnson の見解と彼が推奨する書名とを示していた。

〈第Ⅳ期〉になると、江藤秀一の「ジョンソン博士と『ジェントルマンズ・マガジン』」【99032】が彼とGMとの関わりについて整理している。また【24/】の繰り返しになるが、かつて金子が【93441】で解説していた*A Voyage to Abyssinia* (1735) について、鈴木聡の「懊悩の時代：ジョンソンと『アビシニアへの旅』」【98784】は、Jerónimo Loboによるポルトガル語の原典 *Itinerário* (1639-1640;1669) からフランス語に重訳したもので、Johnsonが英訳する際に用いたLe Grand版 (1728) を、英訳文と読み較べることで彼の宗教的姿勢を読み出していた。同じく高知尾仁の「近代エチオピア表象論」【99426】も、*Abyssinia* についてJohnsonが英訳を拵えるに際して原著に加えた変更^{たかちお}に宗教的意味合いを指摘している。また永嶋大典は『ジョンソンの死と信仰』【995X1】の第Ⅱ部「ジョンソンの信仰」(pp. 143-191)において、Johnsonの*A Commentary on Mr Pope's Principles of Morality* (1742)を「神学的にはクルーザを支持し、ポープの理神論的・自然宗教論的宿命論に反対している」論文と読んでいる(pp. 154-155)。なおこの作品のテキストがYale Johnson第XVII巻として2004年に刊行されている。青木健の「ジョンソンと献辞」【99631】は、Johnsonがビジネスと割り切って代筆していた数々の「献辞」(dedications)に注目し、そのリスト(pp. 50-49)を作成してから特徴的な部分を訳出し吟味を加えている。しかし1937年にはJohnsonが代筆した文章の買い取り先がAllen T. Hazenによって既に割り出されて本文が*Samuel Johnson's Prefaces & Dedications*により供給されていたという英米での研究レベルの高さに、我々は彼我の感を禁じ得ないはずである。

最後に、W. Snellの“A Note on Dr. Samuel Johnson and the Reception of Chaucer in Eighteenth-Century England”【00432】は、Johnsonが晩年に計画しながら幻に終わったChaucerの詳注版について、本文を自由に改竄したUrry版(1721)をJohnsonが架蔵していた事実とJohnsonのMiddle Englishにおける知識不足とを勘案したうえで、その結果は惜しむに値しないと判定しているが、これについて他の研究者たちの所感を聴いてみたいところである。

なお【25/】の領域に入る彼の作品の邦訳は以下の通りである。【985Z1】【986Z4】【986Z5】【99151】【000X2】

Mrs Piozzi (Thrale) の場合

18世紀当時に多数発表されたSamuel Johnson (1709-1784)の伝記のうちでも今日までよく知られているものが3点ある。先ずその筆頭格としてJames Boswell (1740-1795)による*The Life of Samuel Johnson* (1791)があり、それにJohn Hawkins (1719-1789)の*The Life of Samuel Johnson* (1787)がBoswellの陰にひっそり佇み、もうひとりHester Lynch Thraleすなわち夫と死別後Johnsonを袖にした挙句の果てに使用人であった音楽教師と再婚して身分を落としスキャンダルの渦中にあったMrs Piozzi (1741-1821)が逸早く発表した*Anecdotes of the late Samuel Johnson* (1786)があり、いわゆる御三家の格式と看做され多々言及されてきている。伝記の刊行順序に従って、それらの著者であるMrs Piozzi (Johnsonと関わり合った時期の彼女に対しては再婚前だったので

Thrale と呼ぶことがある), Hawkins, Boswell が日本において受容・研究されてきた流れを『文献目録』を用いて展望してみよう。この章で取り上げられる文献の【主題識別番号】は【5/1】すなわち Thrale 家と Johnson との関わり合い (C/G では【5:1】) になる。

James L. Clifford の *Hester Lynch Piozzi* (1941) は Virginia Woolf が書評【99473】した決定版とも言える Mrs Thrale 伝であるが、Clifford の第 2 版 (1952) の序文によると、初版刊行後の 10 年間に様々な資料が発掘されはしたものの本文に修正を求めるほどではなかったと自信の程を示している。ところがそうした発掘資料のひとつに Mrs Piozzi が残した日記その他の記録集 *Thraliana* 全 2 巻があって、後に Johnson の心の闇を論じて注目された K. C. Balderston の編集によりそれは 1942 年に初めて活字化されていた。実はこれが *Anecdotes* を準備する際にその材料の 9 分の 5 (それでも *Thraliana* 全体の 14 分の 1 の量でしかない) を Mrs Piozzi に提供し (p. xxiii), 彼女が Hawkins や Boswell を抜いて Johnson 伝での一番乗りを果たすことを可能にした重要資料であった。また Mary Hyde 編 *The Thrales of Streatham Park* (1976) は Hester の結婚翌年 (1764) から死去 (1821) までの家庭の記録を集めた資料集であったが、1987 年に Clifford が再版された際も Margaret Doody の序文が付けられただけであった。そうしたなか William McCarthy が 1985 年に *Hester Thrale Piozzi* を出版しており、ECCB に Doody が寄せたそれへの書評は、“Clifford's biography remains an indispensable source of information” としたうえで、本書が Clifford とは違って彼女を Johnson と切り離し、再婚後に物された大量の著述に注目し彼女に詩人・歴史家としての才能を発見した最初の文学評伝に仕上がっていると評して、いまでも Clifford との間に住み分けがなされ得ることを教えている。

本稿での目下の関心に照らすと、Johnson 伝で競合した Boswell との関係が反目的であったか友好的であったかという問題が議論されることがある。例えばこの領域の必須文献でもある Mary Hyde 著 *The Impossible Friendship* (1972) は ECCB で Marshall Waingrow によって反目を否定する立場から書評されている。仮りに反目的ではなかったにしても Boswell の *Life* の何処を Mrs Piozzi が気にしたかについては、研究者ならずとも気になるところである。こうした方面への好奇心の抱き方 (着眼の仕方) では洋の東西に変わりがないようで、現在 *The Life of Samuel Johnson...With Marginal Comments and Markings from Two Copies Annotated by Hester Lynch Thrale Piozzi* 全 3 巻 (1938) と *The Journal of a Tour to the Hebrides with Samuel Johnson...With Marginal Comments and Markings from a Copy Annotated by Hester Lynch Thrale Piozzi. Illustrated...by Thomas Rowlandson* (1974) で確かめることができるようになっている。

我が国に眼を転ずると、Johnson 研究・受容の歴史において最も早くに Mrs Piozzi に言及した文献は、恐らく明治 27 年に刊行された内田魯庵の『ジョンソン』【89471】であったろう。その「例言」において、魯庵は「ボスウエル本の外に参考せしものはピオッジ夫人の『ジョンソン行實』 (*Anecdotes of the late Samuel Johnson*) なり」と書名まで挙げている。しかし彼女が言及されているのは 5 箇所しかない。*Anecdotes* は、Hawkins の *Life of Johnson* とは違って、19 世紀だけでも 1822, 1826, 1831, 1835, 1856, 1884, 1887 年に再版されていたから、魯庵はテキストを入手で

きていたのかもしれないが¹⁹、*Anecdotes*を読み込んだというよりは、1878年に刊行されていた Leslie Stephen の *Samuel Johnson* に負うところのほうが多かったように見受けられる。明治28年にも Thrale 未亡人への Johnson の恋心から語り起こして、当時の女性の間での彼の評判や彼の女性観を紹介した増田藤之助の「長恨録：其1 チョンソンの戀」【89511】が『日本英學新誌』に連載されたが、そこには *Anecdotes* ではなく1861年刊行の Abraham Hayward 編 *Autobiography: Letters and Literary Remains of Mrs. Piozzi (Thrale)* が言及されている。以上が〈第Ⅰ期〉までの言及である。

20世紀になり〈第Ⅱ期〉に入って、石田憲次の『ジョンソン博士とその群』【93311】は京都帝国大学に提出された博士論文であると同時に、「作品をば新しく読み直して自分自身の讀後感を語」った、日本で最初の Johnson, Burke, Goldsmith およびその周辺を解説した研究書であったが、*Anecdotes* を入手できずじまいでの執筆であった。それでも R. W. Chapman が纏めた Johnson の書簡集 *Selected Letters* (1925) を介して Mrs Thrale に迫ろうとするなど、少なくとも *Anecdotes* を参考にしたと称する魯庵以上の意気込み様ではあった。故に石田の監修で鈴木二郎が執筆した『ジョンソン』【93431】ちゅうの「クイーニー（‘Queeney’）への手紙」（pp. 114-120）でも、S. C. Roberts 版 *Anecdotes* (1925) を参照し、Lansdowne 版 *Johnson and Queeney* (1932) から Mrs Thrale の娘に宛てた Johnson の書簡2通を早々と訳出するなど、石田の関心の強さが窺われる。

更に翌年には芥川潤が「Johnson 博士の晩年」【93571】において、Thrale 未亡人がしでかしたお抱え音楽教師 Gabriel Piozzi (1740-1809) との身分違いの再婚に着目し、上述の Roberts や Lansdowne (1932), Kingsmill (1933), Broadley (1909) などを踏まえて、Johnson 晩年の憂鬱の原因を考察している。この論文は *Albion* (京都大學英文學會) に掲載されたから、Mrs Thrale を中心に据えて論じた最初の紀要論文ということになろう。このように20世紀になってから戦前までの Mrs Thrale 論は、石田を発端として京都大学周辺で1933~1935年に集中していたことが窺える。²⁰

戦後つまり〈第Ⅲ期〉に入って暫くの間は Mrs Thrale は目立たない存在であった。1960年代になって福原麟太郎により『世界人生論全集5』【96351】で彼女宛の Johnson の書簡が3通訳出され (pp. 241-247)、「ジョンソン大博士(完)」【96692】では M. J. C. Hodgart 著 *Samuel Johnson and his Times* (1962) に拠って Johnson の晩年の様子が Mrs Piozzi との関わりで描写されたが連載物の性格上専門的研究ではなかった。²¹ しかし1970年代になると、Thrale 家の子供たちの教育に励む Johnson の姿とともに Johnson や Boswell と反りの合わない ‘the hysterical woman’ の姿を K. C. Balderstone の大著 *Thraliana* (1942) に読み出した高田峰尾による論考“Hester Lynch Piozzi (Thrale)”【970Z1】が、戦後四半世紀を経て〈第Ⅲ期〉初の Mrs Thrale を主題とした紀要論文となった。その数年後に泉谷寛が Thrale 家に Johnson が寄せた短詩3篇を訳出している。すなわち「即興短

¹⁹ 福原麟太郎は「ジョンソン大博士(1)」【96692】で、魯庵が Cassell National Library (1887) で読んだのであろう推定している。

²⁰ Hugh Kingsmill 著 *Johnson Without Boswell* (1940) の刊行を逸早く伝えたのも、*Albion* (第7巻4号, 1940) であった (p. 322)。

²¹ 丸善の宣伝誌『學燈』の1968年9月号に掲載された第24回のこと。『福原麟太郎著作集2』【96981】では pp. 470-481, 『ジョンソン』【97211】では pp. 287-299 に転載されている。

詩」【97652】として、*Yale Johnson* 第VI巻 *Poems* (1964) 所載の “On Hearing Miss Thrale Deliberate about her Hat” (p. 306) を訳出し、「成人頌歌」および「スレール夫人へ：三十五才の誕生を祝して」【97792】には、Henry Thrale の甥 Sir John Lade が成人したのを祝した詩 “A Short Song of Congratulation” (pp. 307-308) および “To Mrs. Thrale, On her Completing her Thirty-Fifth Year” (pp. 292-293) を寄せて、晩年を迎えていた Johnson の Thrale 家への愛着振りを伝えている。

日本における英文学研究のいわば指針役として内容の更新を繰り返してきた齋藤勇版『イギリス文学史』が、改訂増補第五版【97471】になって初めて Piozzi, Hawkins, Burney に言及するようになったことは、彼(女)等が Johnson 周辺の人物として我が国でも研究対象に意識され始めたことの反映であろう。偶々1974年には Arthur Sherbo 編 *Memoirs and Anecdotes of Dr. Johnson* の刊行によりテキストの入手が容易になったから、日本においても Mrs Thrale への関心が高まってよい頃合ではあったが、Mrs Thrale を取り上げた論考はその後1980年代まで見掛けない。すなわち岸英朗による「ドクター・ジョンソンと女性たち」【98231】が Mrs Thrale を含む Johnson 周辺の女性たちが示した彼への一様でない対応振りを調べている。その翌年には中野好之訳『サミュエル・ジョンソン伝3』【983Z1】の解題 (pp. 455-487) も、Boswell のライバルという視点で Mrs Piozzi や Hawkins を紹介しており、Boswell の全訳版が読書界に及ぼしたインパクトと影響力とを考えた合わせれば、この紹介文により Mrs Piozzi や Hawkins という名前ばかり知れ渡っていた伝記作者の存在感が我が国でも多少は意識されるようになったことであろう。

事程左様に1980年代は日本においても Mrs Thrale (Piozzi) 研究が面白くなり始めた時期であった。Johnson の Edinburgh 滞在を Mrs Thrale 宛の彼の書簡から再現しようとする鈴木知行の「Edinburgh における Dr. Johnson の足跡」【983Z6】での試みにして然り、Mrs Piozzi が社交界婦人連の会話の洗練のために編纂した *British Synonymy* (1794) の歴史的意義を検討した小島義郎による「ピオッツィ夫人と類義語辞典」【98544】にしてもまた然りであった。

〈第IV期〉になって、小島の【98544】は『英語辞書物語(上)』【989X1】(pp. 63-85) 及び『英語辞書の変遷』【99964】(pp. 136-146) に転載されることになる。松原慶子による「Samuel Johnson の *Life of Savage*」【98834】は、*Savage* を支配する熱気の背後に母性を求めながら母親や妻に裏切られ、後には Mrs Thrale にも裏切られることになる SJ のわだかまりを感じ取っている。同じく松原の「ジョンソン博士とスレール夫人」【98933】では、2度目の精神的危機に陥った Johnson を迎え入れたのが母と妻の慈愛に満たされた彼女の家庭で、彼はそこで彼女に対して ‘infantilism’ を解き放ちながら ‘melancholy’ の治療に勤しむことができたが、Piozzi と再婚を決めた彼女に対する彼の反応には子を捨てた母親への子からの怒りがあったと解釈して説得力もある。

1991年になって横手長治により Sherbo 版 *Anecdotes* が『ジョンソン博士逸話集』【99113】として全訳された。これで Johnson 伝の御三家のうち Hawkins を除くすべてを日本語で読めるようになったのであるから、我が国における Johnson 研究の今後の可能性を期待させる快事ではあった。ところが Boswell 研究の第一人者である中原章雄がその著書『ジョンソン伝の系譜』【99191】で

「ホーキンスの伝記の資料的価値については認識を新たにした。ピオッチの『逸話集』はジョンソンに関するコンパクトな読み物として現代でも通用するだろう…。どちらも未だ訳されていないが、とくに後者の邦訳が待たれる」(p. 241)と述べたように、横手訳が私家版であったことが災いしてか『逸話集』の存在は長らく研究者たちに知られていなかった。また【99191】のために中原が書き下ろしたと思われる「ボズウェル以前：ピオッチとホーキンス」(pp. 13-35)は、Boswellの反感を逆手に取ることで *Anecdotes* の独自性を浮上させるべく、「同居人としてのジョンソンを「軼」ととらえることこそが、おそらく、この小さな書物の最大のメッセージであった」と Mrs Piozzi の意図を忖度している。

この頃、「スレイル夫人のあとを20年間追いつづけたいまましい勤勉なアメリカ人」たる J.L. Clifford の著書 *Hester Lynch Piozzi* (1941) を書評した Virginia Woolf の「スレイル夫人」【99473】が^{いずぶち}出淵敬子により邦訳された。それによると Mrs Thrale は「衝動的で感動しやすかったが、また鈍感で気転が利かなかった…彼女の性格には粗野なところがあり、ものの見方は平凡で、そのことがなぜ彼女が観察者としてはボズウェルにまったくかなわなかったかを説明している」と舌鋒鋭く分析して、その結果卑小化された Mrs Thrale 像が Woolf を介して日本の読者に植え付けられたことであろう。

いっぽう1999年にフロッピー・ディスクで配布された永嶋大典による約1,800枚規模の「評伝サミュエル・ジョンソン」【999Z4】では、Thrale 夫妻の出自から Johnson 没後までの Mrs Piozzi の伝記的な記述が随所に織り込まれているので、それらを集めれば程々の量の Mrs Thrale 論になるかもしれない。なかでも1782年8月についての「二人の決別は2年後のことになるが、この頃すでに亀裂は決定的なものになっていたと見てよい。しかしこの年の10月には、ジョンソンとスレイル夫人の再婚の噂が再び飛び交うのであるから (Clifford, *HLT*, 212-13), 人生とは皮肉なものである」との一節は、しかるべき文献を押さえながらの記述であるだけに説得力がある。また永嶋の『ジョンソンの死と信仰』【995X1】には *Anecdotes* での記述と重ね合わせながら Johnson の後半生を語った部分も収録されている (pp. 81-90)。先に小島義郎が注目していた *British Synonymy* (1794) が永嶋の監修でゆまに書房から復刻【00061】されたことも付言しておこう。²²

21世紀になって、Mrs Thrale による1774年の Wales 旅行と翌年の France 旅行が彼女にもたらせた収穫を彼女の日記に読み出そうとする試みが江藤秀一によりなされている。すなわち Johnson ではなく彼女に視点を据えて考察した結果、この旅が彼女にとって「自分発見の旅」となったと評する「スレイル夫人のウェールズの旅」【00133】、そしてフランス旅行中に彼女の風物観察が自国最真に傾いていったこと、日記を付ける習慣と外国旅行への関心をこの日記が彼女に目覚めさせたとも指摘する「スレイル夫人のフランス旅行」【00336】である。特に両論考で注目されている主役が、それらに同行した Johnson ではなく専ら Mrs Thrale のほうであるところが、日本における今後の Mrs Thrale 研究への胎動と方向性を予兆させているかもしれない。

²² 「*British Synonymy* は英語辞書史上初めての類義語辞典として注目されるが、それはまたいろいろな脱線 digressions が面白く、ジョンソンも50回以上言及されているという」(永嶋【999Z4】より引用)。

Hawkins の場合

【3/】の一部に相当する領域になるが、Sir John Hawkins (1719-1789) が我が国で言及された最初期の事例は明治27年に見られる。すなわち『ジョンソン』【89471】を著わした内田魯庵は、Hawkins の *The Life of Samuel Johnson* (1787) の存在を「ボズウエル本に比して遜色ある」ものとして認識していたことである。しかし伝聞ばかりでテキストそのものは未だ舶載されていなかったようだ。

それから〈第Ⅱ期〉になって、石田憲次は『ジョンソン博士とその群』【93311】において、「傳記行状の類」のうち「最も重なるものは、Mrs. Piozzi (スレイル夫人) の *Anecdotes of the late Samuel Johnson* (1780) と Sir John Hawkins の *Life of Dr. Samuel Johnson* (1787) で、ともに久しくジョンソンを知る人の著であるが、ボズウエルは其等の書物をも凌駕する覺悟を以て…」(p. 67) と、Hawkins に言及してはいるがその原著を手にする機会は得られておらず、専ら W. Raleigh の *Six Essays on Johnson* (1910) を参照しての発言であった。鈴木二郎が起草し石田が校閲した翌年の『ジョンソン』【93431】にしても状況は同様で、Hawkins への言及も 1～2 箇所に見られるが文献表には書名だけで刊年すら示されていないところから、まだ原著を入手してはいなかったようだ。また同書の「彼れをめぐる人々」に挙げられた18人名のなかにも Hawkins は含まれていない。辞典項目としても、一般向けの『岩波西洋人名辞典』【932Z1】には Hawkins の音楽学者としての側面が記述されているのみであったが、齋藤勇(編)『研究社英米文學辭典』【937X1】になって Johnson との接点が100字少々ながら語られるようになっていた。戦前までの Hawkins に対する我が国での認知度は概ねこの程度であったろう。

〈第Ⅲ期〉になって10年以上が経過してから、Johnson が死に対して抱いた恐怖に分け入ろうとするための情報源として Hawkins の *Life* が利用され始めたが、その論考“Samuel Johnson's Central Tension: Faith and the Fear of Death”【95893】の著者は、原書へのアクセスも容易だったはずの Philip Williams という英語圏出身の研究者であった。1961年に B. H. Davis が Hawkins の第2版を短縮した *The Life of Samuel Johnson* が登場したのを機に、翌年には篠田一士が「もうひとつのジョンソン伝」【96272】と題する3頁足らずの紹介記事を発表しており、そこで篠田は古典主義的人間像を信じる Hawkins の客観的で冷静な執筆姿勢に注目し、対象にのめり込んだロマン主義的な Boswell の *Life* に比べても「それほど遜色のないもの」と評している。しかし1967年11月に『學鐙』に掲載された「ジョンソン大博士(14)」【96692】で福原麟太郎は、Davis 版を読んで「本は悪くないと思ったのだが、このジョンソン夫人死去の段に至って、ボズウエルも強引だが、ホーキンスもあてにならないと思った」との感想を洩らしている。同じく1968年9月掲載の第24回目の「ジョンソン大博士(完)」では、Johnson が溜まった水を出すために自ら足を切り裂いた臨終の日の光景を描くのに、Hawkins からではなく Krutch (1944) の伝記に拠っていたことから、福原は Davis 版を読了していなかったかもしれないし、読んでいたとしたら Hawkins に惹かれることが恐らくなかったということであろう。そして多くの18世紀英文学研究者を育成した高名な福

原による Hawkins 評価はそのまま我が国の Johnson 研究者たちに広く受け継がれたことであろう。

その後、鈴木善三による J. H. Middendorf 編 *English Writers of the Eighteenth Century* (1971) の書評【97332】を通して、我々は B. H. Davis の論文“The Rival Angler Editions”が Walton の *Compleat Angler* (1653) の校訂者としての Hawkins にも注目していることを知らされる。しかし 1973年に Davis によって大部の Hawkins 伝が纏められたり²³、1974年には *The Life of Johnson* の第 2 版が復刻されたりしたにもかかわらず²⁴、日本国内では Hawkins を取り上げる気運は盛り上がりえないままであった。齋藤勇版『イギリス文学史改訂増補第五版』【97471】でさえ、本文には Hawkins の *Life* を Mrs Piozzi のものと並べて言及してはいるものの、「参考書誌」においては未だ必須文献として認知してはいなかった。

その少し後に稲村善二によって Harold Nicolson の名著 *The Development of English Biography* (1928) が『英国伝記文学の発達』【97931】として全訳され、そこには Hawkins が持つ Boswell を超える資料的価値や独自の魅力を総括した一節 (pp. 81-82) が含まれていたが、やはり私家版による訳書であったためか Hawkins 研究への呼び水になるほどには影響力を揮わなかったように思われる。むしろ1980年代に実現した Boswell の全訳『サミュエル・ジョンソン伝』の第 3 巻【983Z1】が解題として掲載していた「ホーキンスの『ジョンソン伝』」(pp. 462-463) の節が、Hawkins での散漫な構成と逸脱、生硬な文体、Boswell との感情的対立という negative な面のみを取り上げたために、Hawkins を日陰者の境遇から引き出すきっかけにはならなかった。その頃久々にリニューアルされた『研究社英米文学辞典第三版』【98522】でも“Hawkins”項の記述は半世紀昔の【937X1】のままであった。

平成の時代すなわち〈第Ⅳ期〉になって Hawkins 再評価への試みが漸く現れ始めた。すなわち『ジョンソン伝の系譜』【99191】の「ボズウェル以前：ピオッチとホーキンス」(pp. 13-35)において、中原章雄が「標準的な『ジョンソン伝』としての地位を容易に確立することができるだけの条件をとにかく備えていた」(p. 25) ところの Hawkins の復権に必要なのは、脱線が多く叙述が不正確で「暗く、意地の悪い色彩」であるという Boswell の批判に応えることだとして、1960年に出版された *Johnson Before Boswell* から著者 Davis による Hawkins 擁護論を要約し、「ボズウェルよりもホーキンスのほうがより完全で納得のできるジョンソン像を描き出している」という Nicolson による指摘を踏まながら、無名時代の Johnson を間近に見てきたという強みを持っていた Hawkins が「冷静な実務家肌の人間が覚めた目で彼に接しながらも、その人物の大きさに感銘を受けて書いた伝記」としての固有の意義をアピールしている。すなわちこの『ジョンソン伝の系譜』は Johnson の臨終場面を Boswell と Hawkins の両記述で比較した「臨終のジョンソン」(pp. 129-145) も収めるなどして、Hawkins を積極的に利用する姿勢を打ち出した書が我が国にも登場したことを告げるものであった。

さらに10年を経た2001～2002年に、藤井哲により一連の論考が発表されており、そのうちでも

²³ Bertram H. Davis, *A Proof of Eminence: The Life of Sir John Hawkins* (Indiana U.P., 1973).

²⁴ *Johnsoniana XX: The Life of Samuel Johnson, LL.D. 1787 by Sir John Hawkins* (Garland, 1974).

「サー・ジョン・ホーキンス版『サミュエル・ジョンソン伝』評価史」【00235】は Hawkins および彼の *Life* についての200年にわたる評価と研究の歴史を纏めている。同じく“A List of Textual Differences between the First and the Second Editions of *The Life of Samuel Johnson*”【00136】では、1787年3月の初版と同年6月の第2版との間の本文の異同をすべてリストに纏めており、数百箇所に施された加筆うち特に2頁規模の加筆部分に込められた Hawkins の思惑を推論した「サー・ジョン・ホーキンス著『サミュエル・ジョンソン伝』：第2版における加筆2頁について」【00256】は我が国における数少ない Hawkins 論のひとつであった。²⁵

このようにして、Hawkins 研究の基礎的な部分では地ならしが済んでおり、彼の *Life* に取り組める環境は整いつつあるかに思われるが、その後 Hawkins を正面から取り上げた研究が発表されたという話は聞こえてこない。無愛想で人付き合いも悪く、杓子定規で想像力に欠けるエゴイスト的性格の持ち主では、我が国の研究風土に馴染みにくいかもしれない。しかし将来、全訳は無理にしても「脱線が多く」なく「叙述が不正確」でない抜粋版として *Life* が邦訳されるようなことがあれば、既訳の Boswell と Piozzi とを併せて Johnson 伝の御三家をすべて日本語で読めるようになり、より広角的な新たな視点で Hawkins が注目され Johnson 研究が加速されることもあろうかと期待しておくものである。

Boswell の場合

Johnson 伝の御三家のうち最後に登場し、いらい世界中でもっとも広くそして永く読み継がれてきている伝記文学の大傑作が James Boswell の残した *The Life of Johnson* (1791) であること、そしてその *Life* が我が国の Johnson 研究の流れに対して不可分なほどに強力な親和力と影響力とを保ってきたということも英文学史では常識中の常識になっているし、本稿 (p. 3) のグラフが示す業績数がそのことを裏付けてもいよう。さは然りながら、Johnson 研究に対する Boswell の浸透振りを時代を追いながら解きほぐして記述していく作業は複雑にして大仕事であり、筆者の当座の能力を超えてしまいそうなので、ここでは Boswell が我が国に受容されてきた経過を、【主題識別番号】における【4/1】～【4/3】(C/Gでは【4:】)に分類される文献をそれぞれ時系別に沿って辿る程度に留めておきたい。

ところで我が国での Boswell 受容の流れを辿るに先立って、本場での Boswell 評価の歴史を簡単に振り返っておこう。すなわち Thomas Macaulay は1831年および1856年の Johnson 論で、Boswell について *Life* という傑作伝記を偶然に産み出してしまった“a coxcomb and a bore, weak, vain, pushing, curious, garrulous”と喩えたが、以後一世紀間近くこうした Boswell 観が明治期以降の我が国をも含めて実質的に世界を席捲することになった。

²⁵ 藤井による Hawkins 論は【00113】、【001Y3】、【001Z3】、【001Z4】などが発表されている。取り分け『伝統と革新：高柳俊一教授古希記念英文学論集』（研究社、2002）所収 (pp. 121-140) の論考【00235】が、英米での Hawkins および彼の *Life of Johnson* 関連の文献を網羅的に取り上げているので、そちらも参照されたい。

もっとも1910年になって *Thomas Seccombe* は *Encyclopaedia Britannica* 第11版の“Boswell”項で、“any fool may write a valuable book by chance”という Macaulay の所説を退け、Boswell を “a biographical genius”としていた。こうした再評価の機運は、C.B. Tinker による *Young Boswell* (1922) や *Boswell's Letters* (1924) そして Frederick A. Pottle の *The Literary Career of James Boswell* (1929) の登場を促すことになり、Boswell 学の創始をもたらせることになった。

それまでは *Life of Johnson* (1791) 【4/1】か *Journal of a Tour to the Hebrides* (1785) 【4/2】か、せいぜいのところ *An Account of Corsica* (1768) 【4/2】の著者としてしか知られていなかった Boswell ではあったが、彼の隠されていた面が露にされるようになったのが、1925～1940年の数次にわたる“Boswell Papers”発見という英文学上の大事件であり、Geoffrey Scott & Frederick A. Pottle 編集のもと各570部で公刊された *The Private Papers of James Boswell* 全18巻および *Index* (1928～1934 & 1937) 【4/3】を通してであった。

それにより Boswell は “an inspired idiot” だったどころか *Life* 以上に彼らしい業績を物していた作家として、R. W. Chapman など1945年に “I suppose it is now agreed that Boswell was a man of outstanding genius. ... The recovery of his long-lost journals revealed him in his true stature.” (p. 12) との認識を表明した程であった。その一方では、発見された文書により可能になったテキスト同志の照合から *Life* で Johnson のものとされていた発言の信憑性が度々疑問視されるようになって、D. Greene など例えば “Reflections on a Literary Anniversary” (1963) において Boswell による意図的な Johnson 像の歪曲を糾弾するようになった。

Boswell のこうした面は一般読者の好奇心を刺激し、1950～1989年には商業版 *The Yale Editions of The Private Papers of James Boswell* 全13巻が刊行され、特に *Boswell's London Journal 1762-1763* (1950) はベストセラーとなった。それに呼応してであろう1963年の *Britannica* 第14版 “Boswell” は彼を「世界の最も偉大な日記作家の一人」と規定し直し、新たな Boswell の存在が世界的に認知されたことになる。

商業版の成功は学術版への呼び水となり、1966年からは *The Yale Editions of The Private Papers of James Boswell: Research Edition* が全40巻の予定で刊行され始め、既刊14巻ちゅうの取り分け Marshall Waingrow 編 *James Boswell's Life of Johnson* 全4巻については1776年までの部分(第1巻1994, 第2巻1998) が実現しており、1934～1971年以来の底版である George B. Hill & L.F. Powell 版 *Life* にも新たな光が当てられ、Boswell の手法が照らし出されようとしている。

このようにして一筋縄では行かない Boswell にはなったが、英米での Boswell 研究は1950～2006年に100点近い関連書を産み出す程に活況を呈している。また *Life of Johnson* 刊行後200年を記念して Greg Clingham が纏めた *New Light on Boswell* (1991) なかでは、David Daiches が Boswell を “a much more complex and artful person whose inner tensions and contradictions are bound up with remarkable talents” (p. 1) と *Britannica* より更に踏み込んだ規定をしており、そうした Boswell 像が彼に対する評価の転換振りを窺わせている。ということは Johnson とは距離を置いた所に立つ、好奇心を刺激してやまない mysterious な Boswell を追い込んでいくという楽しみが

今後の我々に用意されていることにもなる。

【4/1】すなわち *Life* (1791) および *Boswell* と *Johnson* との交友の領域として、特に *Life* については明治23年の「難文難句英語詳解」【89051】や翌年の『英國文學史』【891Y2】などでも言及されていたが、実際に *Life* を踏まえた上での著作は明治27年になってからの内田魯庵の『ジョンソン』【89471】が最初で、そこでは執筆方針を「ジョンソンの思想よりは寧ろ行實を明かにするにあれば主としてボスウェルの傳に依りて事實を採集しぬ」として、*Life* から「僅に其十分一」を取り入れたと「例言」にある。また明治33～36年に、原著の20%弱を抜粋した3分冊の教科書版【90091, 90281, 90361】が脚注付で刊行されている。すなわち *Boswell* が *Johnson* に出会った1763年からスタートして1765年まで、1767～1773年の間に二人が会合したときの記述、二人が頻繁に会っていた1778年の記述を収めており、*Johnson* 理解のための手近な情報源として当時から *Life* の原文に対する需要があったことを想像させる。しかし〈第Ⅰ期〉を見渡してみると、明治6年以降の資料に *Boswell* への言及を辿った泉谷寛の「明治期のボズウェル」【991Z1】が示していた「明治期全体を通して見ても、ボズウェル『ジョンソン伝』が口程にブームを呼ばず、また特別な研究、文献も見当たらない」という観測が妥当なように思われる。

上述の類の *Life* の抜粋版としては、〈第Ⅱ期〉になってから、原著の約25%に小椋晴次が詳細な注を付けた研究社英文學叢書版 *The Life of Samuel Johnson* 【93111】があったので、当時の英語関係者からも手近に得られるテキストとして重宝がられたと思われるが、ほぼ同じ頃に片山俊編注による本文144頁(原著の10%弱)の *Boswell's Life of Johnson* 【93521】も教科書版として出されていた。また1941～1948年には神吉三郎により原著の半分弱が岩波文庫【94161, 946Z1, 94811】に訳出されていたことから、我が国では *Boswell* の業績を把握しようというよりも *Johnson* 理解のための情報源として〈第Ⅰ期〉同様に *Life* の必要なところだけが読まれていたと想像できよう。それも〈第Ⅲ期〉になると抜粋版は平田家就の *The Life of Samuel Johnson: Some Wise Sayings Selected* 【96932】しか出版されなくなってしまった。そろそろ原書の入手が容易な時代になってくると、原著の約30分の1しか収めていない教科書版の出番はなかったのであろう。

いっぽう戦前に *Life* を取り上げた論考としては、R. W. Chapman の *Boswell's Note Book* (1925) を用いて *Life* における *Boswell* の手法に迫ることへの可能性が石田憲次の『ジョンソン博士とその群』【93311】により示唆されていたが (pp. 62-75)、それ以外には *Boswell* の 'concrete details' 志向を彼の writer としての魅力と解した神吉三郎の「*Boswell* の魅力について」【93341】と、「何でそんなに英人に面白いのか、そこは自分には詳説できないが、その作品としてよく纏つてゐるには驚く」と *Life* を褒めた平田禿木による『傳記・書簡及日記文學』【941Z1】くらいであろうか、この時期での *Life* の評価にもばらつきがあった。その背景には *Boswell* の人格を否定的に紹介していた Macaulay の影響を示す【89051】【891Y2】や、彼が *Encyclopaedia Britannica* 第8版に執筆した項目“Samuel Johnson”の教科書版【929Y1】【933Z1】【93611】が我が国の教室に普及していた状況もあったかもしれない。このことについては後に中原章雄も『「辞書のジョンソン」の成立』

【99922】所収の「マコーリの毒，マコーリの亡霊」(pp. 19-26)で、*Life*を評価しながら Boswell を痛罵する Macaulay の暴論が Boswell 研究史に独特の歪みを残したと指摘することになる。

しかし戦後の〈第三期〉になってみると、従来の Johnson 像や Macaulay の造り上げた Boswell 観を吹き飛ばすほど重要な“Boswell Papers”が公開されたという F.H.R. (福原麟太郎)による報告「Boswell の原稿を発見」【948Z2】辺りを契機として、Boswell 復権への試みが我が国でもなされ始めた。その早い例が高田峰尾の“Arm in arm along the Strand”【95421】で、Boswell を才能に恵まれた伝記作家として積極的に評価し、彼を‘an inspired idiot’と看做した Macaulay による定説に修正を施そうとする論考であった。またその数年後には、Boswell の俗物性に目を閉じはしないものの、Macaulay による「知力のもっとも低劣な人間」という評価を斥けた Thomas Carlyle の“Boswell's *Life of Johnson*” (1832) も高村新一により「サムエル・ジョンソン」【962Z1】として訳出されている。

Boswell 復権の反映であろうか、1960年代後半から以降、盛況とまではいわないものの、*Life* を取り上げた論考が平均して年 1 本程度発表されてきている。例えば柴崎武夫の「Boswell の執念」【96721】なども、従来の Johnson 研究の情報源としての *Life* の利用を脱して Boswell の伝記作家としての功績を積極的に評価するとともに、彼の執筆の動機と手法とに迫ろうとの姿勢を打ち出してきている。取り分け“Boswell Papers”の商業版として初御目見得した *London Journal* (1950) は我が国でも一般読者を巻き込むほどの話題になり、その余波を受けて“Boswell Papers”の記述に照らしながら Boswell の *Life* での手法を抽出しようとの試みが散見されるようになる。例えば青木健の「『ジョンソン伝』における「語り手」の位置」【97553】、岸本利昭の「ジェームズ・ボズウェル著『サミュエル・ジョンソン伝』について」【976Z1】、青木健の「伝記における視点の二重性：『ジョンソン伝』の技法」【97822】などが発表されている。また石田の【93311】に始まる *Boswell's Note Book* を用いての同趣旨の試みも福原麟太郎著『英文學の特質』【95441】所収の「ジョンソンとボズウェル(その一)、(その二)」(pp. 166-177)を経て、中原章雄著『『辞書のジョンソン』の成立』【99922】ちゅうの「ボズウェルの『手帳』」(pp. 55-61)でも提唱されてきている。

更に1981~1983年には中野好之により *Life* の全訳【98151, 98251, 983Z1】が果たされたことで、*Life* の読者層が広がるとともにそれに対する読みも深められていくことになる。すなわち秋山肇の「ジョンソンにおけるボズウェル」【98232】が指摘するところの「Johnson との交渉をつづることの中に自分自身を表現した」との視点を先取りした青木健の「伝記における「私」の視点」【97882】があったし、その後も中原章雄の「ジョシュア・レノルズへの「献辞」」【98753】や、諏訪部仁の「さまよえるスコットランド人：ジェイムズ・ボズウェル私論」【98972】などが書かれた。また *Life* において自己実現を果たそうとした Boswell の隠された思惑や作為を読み出そうとする中原による一連の論考、すなわち上述の【98753】の他、「『ジョンソン伝』のロンドン像」【98833】、そして〈第四期〉に入ってから「『ジョンソン伝』におけるロンドン再考」【991Y1】、「ジェイムズ・ボズウェル登場」【99331】、「『辞書のジョンソン』の成立」【99922】所収の「伝記に先だって」(pp. 9-17)などが発表されてきている。

1990年代になると中原章雄は「この伝記作品の成立過程の分析」²⁶にも視線を向けるようになり、*Life* の仕上げ段階での Malone の貢献を解明しようとした「ジェイムズ・ボズウェルとエドモンド・マローン」【99422】、*Life* 第2版の背景に注目した『『ジョンソン伝』第2版における作者と読者』【99732】や、“Excavating the Second Edition of Boswell's *Life of Johnson* (1)”【00022】、また *Life* の構想から執筆までの流れを素描した『「辞書のジョンソン」の成立』【99922】所収の「ジョンソン伝の構想」(pp. 41-53)などの論考を精力的に発表してきており、2003年には *Life* の第2版が島田孝右の監修で晴れて復刻されるに至った。

【4/2】すなわち *Life* 以外の Boswell による作品の領域として、*Life* 以外で我が国において取り上げられてきた Boswell の著作には先ず *Tour to the Hebrides* (1785) がある。この旅行記に部分的に取材した挿話的な文章は佐伯有清の「Sea-horse の傳説」【95221】、村上文昭の『スコットランドあれこれ』【979Z1】、白田昭の「ボズウェルとジョージ三世」【988Y1】など〈第Ⅲ期〉に散見されるが、この作品を積極的に論じた最初の論考は、それを「Johnson の旅行記の非常に正確な注釈書」と規定した鈴木知行の「Johnson's *Journey to the Western Islands of Scotland* 小論」【971Z4】であろう。〈第Ⅳ期〉になると、さらに進めて *Tour* を“an attempted patricidal tour” (p. 20) として読み直そうとした久保田佳克の“Boswell's Journal-writing and his Divided Scottish Self”【99562】、Rowlandson の諷刺版画集 *Picturesque Beauties of Boswell* (1786) の絵解きに利用した J. Remsbury による“Johnson, Boswell and Thomas Rowlandson”【99737】、逸話に傾倒する Boswell の姿を *Tour* から読み出した妹尾新太郎の「『逸話』のリアリズム」【00393】などが目に留まる。*Tour* の邦訳も2003年から稲村善二により「ジェイムズ・ボズウェル著『サミュエル・ジョンソンに随行のヘブリディーズ諸島旅日記』(翻訳：1)～(3)」【00339, 00434, 00538】として少しずつ発表され、2005年までに冒頭の10%分が訳了している。共訳者を得て全訳が遠からず実現することであろう。

他の Boswell 作品を扱った論考は散発的あるいは単発的にしか登場していない。すなわち Boswell が「関与したダグラス事件という相続訴訟を主題に南スペイン、フランスを仮りの舞台として」1767年に執筆した *Dorando: A Spanish Tale* が、伊丹レイ子の編注により教科書版【98141】としてリプリントされたほか、*An Account of Corsica* (1768) に触れた中野好之の「“コルシカ”・ボズウェルとパオリ」【98541】や、中原章雄著『「辞書のジョンソン」の成立』【99922】所収の「「辞書のジョンソン」と「コルシカ・ボズウェル」」(pp. 27-30)、彼の *No Abolition of Slavery* (1791) に触れた岸英朗の「奴隷の解放」【993Z1】くらいであろう。

【4/3】すなわち“Boswell Papers”等の領域になると文献も多い。“Boswell Papers”における trade edition (商業版) の第1巻として *London Journal 1762-1763* が1950年に刊行されると、これ

²⁶ 中野好之が「『ジョンソン伝』刊行後200年」【99262】で用いた表現であるとともに、今後の *Life* 研究の方向性をも示している。

が英語圏では幅広い読者層に受け入れられ²⁷、その刊行が時を移さずに我が国での Boswell 研究を刺激してきた経緯もあるので、以下に我が国における“Boswell Papers”受容の概要を展望してみよう。

英国で“Boswell Papers”発見のニュースが報道されたのは1927年のことであったが、遡って1925年に R. W. Chapman が序を付けて刊行していた *Boswell's Note Book* も、別系統で伝わったとはいえ Boswell が公刊を意図しなかった文書のうちとして“Boswell Papers”に含められるであろう。100頁にも満たない冊子ながら、Boswell が残した1776～1777年のメモと *Life* 初版の本文での対応箇所とを見開きに印刷した *Boswell's Note Book* は、断片的ながらも *Life* における Boswell の意図を解明する資料として刊行当初から我が国でも言及されてきた。すなわち〈第Ⅱ期〉の大正14年には F. 筆「Boswell's Note Book」【92581】が「如何に Boswell が潤色したか遠慮したか」を知ることができる書として報じており、いらい上述した石田【93311】、福原【95441】、中原【99922】などが度々触れてきている。同様な期待があったればこそ、“Boswell Papers”発見の報もまた富田義介の「Boswell's Ebony Cabinet(上),(下)」【92872】、T. T. 筆「文壇消息」【93171】、「海潮音」【93731】、上述の福原【948Z2】と繰り返されてきたが、実際に“Boswell Papers”を取り入れた論考が登場するのは〈第Ⅲ期〉も1950年代すなわち trade edition が流布する様になってからのことであった。いらい2005年に至るまでに“Boswell Papers”に関連した論考ないし啓蒙的な紹介は我が国でも、*Life* 論並みに年平均にすると約1本のペースで発表され続けてきている。

福原が海外の消息を報じた【948Z2】は“Boswell Papers”について、Boswell が自らを「好ましい人物として後世の眼に映るように気を配っていたこと」および「彼が今まで考えられていたよりも一層偉大な人物であること」を解明する資料になろうと紹介しており、こうした期待が我が国での Boswell 研究の指針とされてきている。すなわち“Boswell Papers”を論じた最初の論考である福原麟太郎の「ボズウェルの「ロンドン日記」」【95231】は、*London Journal* の概要や *Life* との関連性に触れながら、「小説のように面白い日記は、十八世紀文学の背景を知るのに重要な記録である。ジェイムズ・ボズウェルという男の性格、生活を知るに、不可欠の書」であると、その意義を強調している。その翌年に佐野英一は「日記文学新顔：*Boswell's London Journal 1762-1763*」【95371】において、これが小説のように面白く読める理由を考察しているし、そのまた翌年には柴崎武夫が「Boswell と Johnson」【954Z1】で Boswell の性格と作家的手法に迫ろうとしている。特に Boswell の手法解明への試みは1957年以降に散見されるようになり、郡司利男の「Boswell の英語」【95771】、河井迪男の「最近の18世紀英語研究」【96483】、水野和穂の“Some Problems of Concord in *Boswell's London Journal*”【989&1】などが英語表現の視点から彼の手法を考察したものであった。

上述の様に我が国での“Boswell Papers”に対する反応には素早いものがあり、1952年に第2巻の *Boswell in Holland 1763-1764* が刊行されるや、その年のうちに金生喜造が『和蘭におけるボ

²⁷ 英国ではどんな片田舎の古書店でも種々の版本で *London Journal* を見掛けることがしばしばである。Samuel Pepys (1633-1703) の日記と競い合うくらいに普及しており、英国人がちょっと上の階級の私生活に寄せる好奇心は衰えることなく時代を問わず旺盛なようだ。

ズウェル』【95281】で海外の書評記事を要約紹介している。やや遅れて柴崎武夫も「Boswell in Holland」【95521】で、Boswell のオランダ滞在日記のうちの“Boswell Papers”から散逸した部分に着目し、その部分の再現を試みている。また1953年に第4巻の *Journal on the Grand Tour 1764* が刊行されると、翌々年には高田峰尾が“Boswell, the Reporter”【95522】でそれに考察を加え、1957年に第6巻 *Boswell in Search of a Wife 1766-1769* が刊行された翌年には佐野英一が「ボズウェル「ロンドン日記」のその後」【95833】で拾い読みするといった風であった。

そして福原麟太郎が *London Journal* について、日記も読者に感動を呼び起こせば文学であるとの評価を「日記文学」【95722】において示した頃から、“Boswell Papers”が一般書籍においても紹介されるようになった。恐らくその嚆矢は庄司浅水の「『黒檀タンス』の秘密：ボズウェル文献の発見にまつわる物語」【95822】であったが、英文学研究者ではなかった庄司は R. D. Altick の *The Scholar Adventurers* (1950) の参照で済ませていたと思われる。その一方では更に踏込んだ“Boswell Papers”の読み解きも試みられ始めており、例えば坂本幸児による「The Private Papers of James Boswell (I), (II)」【958Z1, 960X2】が、Boswell は *London Journal* が読まれることを想定して素材を取捨選択し脚色を施したのではないかと推測したり、*Boswell in Holland* に対して真の姿により近い Boswell に接するための資料としての意義を求めたりもしている。そして何かと「思惑買い」の Boswell が「貧しく、みめかたちもすぐれたとは云えず、おまけに年上のいとこ」であった Margaret と結婚するに至るまでの心境と、その後の夫婦愛の様子に迫った1963年の E. N. 筆「ボズウェル夫人」【96332】なども、彼の書簡や日記を読み込んでの成果といえよう。以上の他の“Boswell Papers”に触れた1960年代の文献は、『文献目録』で見える限りでは啓蒙的記事あるいは英文学の教科書程度でしかない。

1970年代になると“Boswell Papers”の取り上げ方は、英文学史の教科書や一般書の記事や翻訳書等におけるような読者の好奇心に訴えようとする紹介の仕方と、Johnson や Boswell 研究の資料の一端として取り込んでいこうとする姿勢とに二分されるようになる。しかし紹介の仕方も様々で、例えば加藤周一の新聞記事「一八世紀の英国または『ボズウェル文書』の事」【97581】は、“Boswell Papers”が加藤にとって人生にかなりの満足を与えてくれる面白い読み物になろうとの予感を示してはいるが、未訳の文書を新聞の読者に紹介する意味がどれほどあったであろうか。確かに秋山平吾が訳した『ジェームズ・ボズウェルのロンドン日誌』【97761】は *London Journal* 1762-1763 から1762年末までの本文を邦訳しているが、Boswell が Johnson と出会う1763年の部分は未訳のままであった。また G. R. Hocke (1963) を柴田斎が訳した『ヨーロッパの日記』【99133】ちゅうの「ジェイムズ・ボズウェル」(pp. 736-748) にしてもドイツ語経由での *London Journal* の超抄訳に留まっている。アンドレイ・アニーキンの『アダム・スミスの生涯』【975Z3】は Boswell が London の Suffolk Street に Smith を訪問した1775年4月2日の会見の様子を再現 (pp. 291-302) しているが、1968年時点のソ連では文書が一般の手に届き難いと油断したせいとか、“Boswell Papers”の記述を忠実に伝えているとは言い難い。佐伯彰一は *London Journal* を「いかにも生きた文学」として「伝記と自伝：生きた文学のありか」【98324】で賞揚し、新聞記事「ボズウェル「ジョンソン伝」

【990Y3】でも同様の訴えをしているし、『伝記のなかのエロス』【99041】では“Boswell Papers”の「驚くべき魅力の一端」を力説していた。

1970年代の研究成果を眺めてみると、伊丹レイ子は一連の論考すなわち「ボズウェルの「サミュエル・ジョンソン伝」」【971Z3】、「ドイツ宮廷旅行記」の解明を中心としたジェイムズ・ボズウェルの「この私の日誌」」【979Z2】、「ボズウェルの妻取りの記録」【98961】において、*Life*でのBoswellの手法や1764年当時のBoswell像や彼の女性観などを“Boswell Papers”から読み取っている。岸川利昭の『「サミュエル・ジョンソン伝」について」【976Z1】はBoswellが自らの抱くJohnsonのイメージに合わせて資料を意識的に再構成していたことを察知している。長瀬久子は“Boswell's Attempts at Self-improvement”【97751】でBoswellの自己変革への意欲と挫折とを“Boswell Papers”に読み取っている。また青木健は上述の【97822】のほか一連の論考、すなわち「自己認識の構図：*Boswell's London Journal 1762-1763* 論 (I), (II)」【98032, 980X2】、および「James Boswell, *Life of Johnson*」【98052】において、記録するBoswellと記録されるBoswellとの「二重構造」が彼の「自己認識のプロセス」を支配し、それが*London Journal*に文学的表現を与えることになったと解析している。

1980年代に入って、宮治弘之の「ルソーとボズウェル」【98175】はBoswellとRousseauとの関わりを1764～1766年のBoswellの日記に追っており、同じく「ボズウェルの醜聞」【982Z1】は“Boswell Papers”を相続したLady Talbotが破り捨てたと目される1766年1月12日から2月23日までの約12頁分のBoswell日記の内容を推定している。白田昭による「絞首刑のあと」【98552】や、『イン：イギリスの宿屋のはなし』【98662】や、「イギリス風“正直日記”の面白さ」【98681】などは、それぞれ“Boswell Papers”の1982年時点での既刊分12冊を駆使して、Boswellの私生活をあからさまに記録した事例を読み出しており、好奇心を刺激されそうな文章に仕上げられている。

そして“Boswell Papers”のtrade editionが完結した1989年以降2005年までの間がなかなかの盛況振りで、〈第Ⅳ期〉には“Boswell Papers”を取り入れた論考が研究論文から啓蒙書までの様々なレベルで約30点も登場することになる。それらのなかには、*Boswell on the Grand Tour 1764*に記録されていたRousseauとの面会の場面からBoswellを彼の弟子と看做した中原章雄の「ルソーの弟子ボズウェル」【98951】であるとか、*Grand Tour 1764* および *Grand Tour 1765-1766* の2冊に*London Journal 1762-1763*には見られなかった主体性のあるBoswell像を発見した青木健の「ボズウェルのグランド・ツアー日記」【99455】、trade editionを通読してBoswellがJohnsonに会った日数を算出した諏訪部仁の「二人の会った日：ジョンソンとボズウェル」【99081】および“Boswell's Meetings with Johnson, A New Count”【99551】等が特筆すべき成果であろう。

更に中原章雄は“Boswell Papers”を積極的に利用しながら以下の諸論すなわち、“Boswell Papers”を*Life*執筆のための「創作日記」と位置付けた「ボズウェル日記とその時代」【99391】、*Life*でのBoswellとJohnsonの初対面の記述にBoswellの巧みな演出を読み取った「ジェイムズ・ボズウェル登場」【99331】、Marshall Waingrowの編集した*Life*草稿(1969 & 1994)の可能性に期待を寄せた「『ジョンソン伝』手稿』を読む」【995Y2】などを精力的に発表してきており、それら一連

の Boswell 研究は『「辞書のジョンソン」の成立：ボズウェル日記から伝記へ』【99922】に纏められたが、1999年時点での我が国の Boswell 学の水準を示すに足る誇るべき業績であった。

参照資料目録(抄)

『文献目録』の執筆に際して利用した情報源については同書のための「参照資料目録(抄)」(pp. xiii-xviii)に示した通りである。また本稿の執筆に際しては、筆者がこれまでに発表してきた論考が間接的に利用されているが、それらについては『文献目録』の「索引」から遡及できるので列挙しないし、本稿に書名で言及した英米の文献についても繰り返さない。したがって以下には、英米での研究の動向に触れる際に参照したが本文中には書名を示さなかった資料を中心に挙げておく。

- ALLEN, Robert R. et al. eds. *The Eighteenth Century: A Current Bibliography [ECCB]*. New Series Volumes 1 for 1975 (Philadelphia: American Society for Eighteenth-Century Studies, 1978)-27 for 2001 (New York: AMS, 2005).
- CHAPMAN, R.W. *Two Centuries of Johnsonian Scholarship*. Glasgow: Jackson, 1945.
- CLIFFORD, James L. et al. eds. *Johnsonian News Letter*. I:1 (1940)-LVII: 1 (2006).
- CLIFFORD, James L. "A Survey of Johnsonian Studies." *Johnsonian Studies 1887-1950*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1951. Pp. 1-16.
- CLIFFORD, James L. & Donald J. Greene. "A Survey of Johnsonian Studies, 1950-1960." *Johnsonian Studies*. Ed. by Magdi Wahba. Cairo, 1963. Pp. 269-278.
- CLIFFORD, James L. & Donald J. Greene. "A Survey of Johnsonian Studies [1887-1968]." *Samuel Johnson: A Survey and Bibliography of Critical Studies*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1970. Pp. 3-33.
- CRANE, Ronald S. et al. eds. "The Eighteenth Century: A Current Bibliography [ECCB]." *Philological Quarterly*. Volumes 5 (Iowa: The University of Iowa, 1926)-54 (1975).
- GREENE, Donald. "Johnsonian Studies since 1970." *Samuel Johnson: Update Edition*. Boston: Twayne Publishers, 1989. Pp. 174-183.
- GREENE, Donald & John A. Vance eds. *A Bibliography of Johnsonian Studies, 1970-1985*. Canada: University of Victoria, 1987.
- KORSHIN, Paul J. et al. eds. *The Age of Johnson: A Scholarly Annual*. Volumes 1 (New York: AMS, 1987)-16 (2005).
- LYNCH, Jack ed. *A Bibliography of Johnsonian Studies, 1986-1998*. New York: AMS, 2000.
- LYNN, Steven. "Johnson's Critical Reception." *The Cambridge Companion to Samuel Johnson*. Ed. by Greg Clingham. Cambridge: Cambridge University Press, 1997. Pp. 240-253.
- TOMARKEN, Edward. *A History of the Commentary on Selected Writings of Samuel Johnson*. Columbia: Camden House, 1994. (2006年9月)

『文献目録』正誤表

(2006年10月末現在)

- p. xvii (下から5行目) : 柴垣茂 → 芝垣茂
- 【91051】 (2行目) : p. 264 → pp. 263-264
- 【916Y1】 (1 & 2行目) : 蕪峯 → 蘇峯
- 【93311】 (下から12行目) : 観察 → 觀察
- 【93421】 (1行目) : 英文學新 → 英文學新講
- 【95621】 (2行目) : Postage → Postgate
- 【95932】 (2行目) : なかで → のなかで
- 【98121】 (4行目) : 昨年出版 → 昨年 [1978] 出版
- 【98313】 (2行目) : 対象性 → 対照性
- 【98372】 (2行目) : 隨所 → 隨所
- 【98391】 (7～8行目) : 編者 Ellery ～評した → 編者 Ellery ～評した (5行目冒頭に移動)
- 【98731】 (3行目) : *Rassela* → *Rasselas*
- 【98933】 (5行目) : infantism → infantilism
- 【989X2】 (1行目) : セミコロンをコロンの修正
- 【99351】 (5行目) : 触れなて → 触れて
- 【99522】 (4行目) : 【25/】 → 【20/】
- 【00321】 (3行目) : 【13/】 【14/】 【15/】 【18/】 【19/】 を削除
- 【00381】 (1行目) : シャーロック → シャーロック
- 【00584】 (5行目) : 【11/1】 → 【11/】
- p. 282 (「す」に追加) : 須原屋茂兵衛..... 【87171】
- p. 284 (「と」) : 徳富蕪峯 → 徳富蘇峯
- p. 292 (「C」) : Chambers, Robert の 【00392】 を同姓同名の別項目に
- p. 295 (「H」) : Hawkins, John に 【983Z1】 を追加
- p. 299 (「P」) : Postage, Raymond W. → Postgate, Raymond W.
- p. 310 (【25/】) : 【99522】 を 【20/】 へ移動

以上